

虹
私とは
離れて
遠く



オルハサ"カサンバン"チ

1 虹と私は離れて遠く

What are little girls made of?

女の子はなんでできている？

What are little girls made of?

女の子はなんでできている？

Sugar and spice And all that's nice,

砂糖、スパイス、それから素敵なもの一杯。

That's what little girls are made of,

そういうもので、出来ている。

目次

| | | |
|-------|---------------------------|-----|
| 【一】 | 人形遣いの見る夢 | 3 |
| 【二】 | 霧雨魔理沙後方支援会 | 29 |
| 【三】 | ルイス・キャロルの寵愛 | 65 |
| 【四】 | 忌み嫌われた弾幕（前） | 89 |
| 【五】 | 忌み嫌われた弾幕（後） | 131 |
| 【六】 | 人形欠席裁判 | 159 |
| 【七】 | 平行線上の魔法使い | 183 |
| 【八】 | 君は彼女の元に居たと彼等は語り | 225 |
| 【九】 | エンサイクロペディア・パンデモニカ | 263 |
| 【一〇】 | 少女は無慈悲な赤の女王 | 293 |
| 【一一】 | 伸ばすその手も竦みもするが、君は決めたと私は聞いて | 325 |
| 【ep.】 | 互いが御伽噺として、虹と私は離れて歩く | 337 |

【二】人形遣いの見る夢

赤の女王は仰います。

走れ、進め、前に往け。そうしていなければ死んでしまうぞ。
だからアリスは、まっすぐに走り始めました。

Spell Card Bonus 「イーハートブォの田舎」



オルゴールの円盤が一周し、曲が最後のフレーズを刻む。

舞台の上をとろ狭しと踊っていた人形達は、曲の終りに合わせて一斉に動きを止めた。演奏を終えた楽団人形も次々と立ち上がり、舞台とその周辺に整列してゆく。

戦っていた騎士と魔女も、逃げ出したお姫様も追手の兵隊も、みな笑顔で手を取り合つて。舞台の中央に立つ座長人形の指示にあわせて、人形達が一礼する。

一糸乱れぬその動作に、わっと拍手が鳴り響いた。

「本日の演目はこれにて終幕。皆様、お楽しみ頂けましたか？」

意識して芝居がかった口調を作つて観客へと向き直れば、万雷の拍手の中、老若男女を取り混ぜた人々が口々に歓声を上げていた。カーテンコールもそこそこに、最前列に陣取つていた子供たちが、わっと舞台の傍まで駆け寄ってくる。

「お姉ちゃん、これ本当にお人形さんなの？」

「ばっか、俺知つてるぜ。ちゃんと生きてるんだつてば！」

これは七色の人形遣いアリス・マーガトロイドの日常の一コマ。

目を輝かせながら珍しげに覗きこむ子供たちを、役者人形達に相手をさせつつ広場の隣へ誘

導し、残る人形達には後片づけの指示を出した。

「ねえねえ、この子たち触ってもいい!？」

「あー! ずるい! わたしも動かしてみたいー!」

「こらこら、あまりアリスを困らせるな」

詰めかける子供達を制したのは、引率役の上白沢慧音。優しげな一言に騒いでいた子供たちが一斉に手をひっこめ、行儀よく並び始める。彼女の寺子屋での厳しい指導を窺わせる一幕だ。

「いつも済まないな」

「気にしないで。好きでやってることよ」

人里での人形劇は好評を博し、いまでは市が立つ時の恒例となっていた。小さな観客たちには特に弓兵、騎兵、剣兵が人々を守り、力を合わせて魔物を倒すような演目が好まれており、アリスは人形製作以外にも戯曲の台本を書く作業に頭を悩ませるようになっていた。

アンコールの要望に応え、騎士人形達に即興の演目を披露させて子供たちの気を引いているところへ、声がかかる。

「よう、アリス」

聞き慣れた声音にいつもの黒ずくめ。人混みの中で帽子は取っていたものの、やはり前時代的な魔法使い然とした姿は人目を引いていた。

霧雨魔理沙。アリスとは旧知の魔法使いである。

「見てたぜ、大盛況じゃないか」

「お気に召したなら幸いね。あなたこそ珍しいじゃない。こっちに顔出すなんて」

「どこかの引きこもりと一緒にしないで欲しいぜ。ま、今日はツアーガイドだけだな」

白黒の魔法使いが観客に混じって劇を見ていたのには気付いていた。普段、あまり人里には近寄らない彼女と、ここで顔を合わせるのとはなかなか珍しいことでもある。

その原因は、どうやら魔理沙の隣の少女であるらしい。

「わー……」

普通の魔法使いの隣で目を輝かせているのは、碧の髪もまぶしい少女。色こそ違えど、その装いはアリスも良く知る、神社の巫女のそれに良く似ている。見ない顔だなど首を傾げるアリスに、彼女はずいといと顔を寄せてくる。

「すごい！ 読んだ通りの美人さんなんですわね！」

臆することもなく上から下まで眺めまわされ、アリスは困惑する。面識はないはずだが、どうも彼女はこちらの事を見知っている風であった。

「あ、すみません。ご挨拶が遅れました！ この度幻想郷にやって参りました守矢神社の風祝、東風谷早苗と申します。よろしくお願いしますね！ アリスさんも人生に行き詰る事などありましたらぜひ守矢神社までご相談を！ 最近信仰は不足してませんか？ 分社とかご入用じゃありませんか？」

「……随分と前衛的な子ね」

鼻息荒くアリスの手を取ってぶんぶんと振り、流れるように勧誘を始める早苗。初対面という事もあってあからさまに嫌悪を覗かせる訳にも行かず、アリスは困惑2割と鬱陶しさ8割で応じる。

「アリスさんのこと、これで読みました！ 人形師さんなんですよね！」

ほら、と早苗が突き出したのは、人里で出版された幻想郷縁起の一冊だった。やけに親しげだったのはそれが理由らしい。

「ま、来たばかりでいろいろこっちの事には疎いらしいからなとりあえず観光案内から始めてるところだ」

「……そうなの」

「よろしくお願いします！ アリスさん！」

聞いてもないのに早苗は勝手に自己紹介を始める。なんでも彼女は外の世界の諏訪というところで巫女をしていたらしく、先日、彼女の祀る神と神社に伴われて幻想郷へとやってきたらしい。

「ほんとに外人さんなんですわねー。綺麗なブロンドだし、それに眼も青くて……私、幻想郷には外国の人なんていないんだと思ってました」

「はっはっは。田舎もん丸出したぞ早苗。金髪くらい珍しいもんじゃないだろ。お前んとこの

神様も片方はそうじゃなかったか？」

指摘した魔理沙に、早苗はそれとこれとは違うんですよと拳を握って妙なごだわりを見せる。

「それに、諏訪子様はホントは金眼なんですから！」

「わかったわかった。あとで聞いてやるから、な？」

子供をあやすように言われて、むうー、と頬を膨らませる早苗だが、すぐに近くの子供たちに混じって人形達の即興劇に興味を移していた。

「やれやれ、子守も楽じゃないぜ。……なんだよ？」

「別に？」

先輩風を吹かせる魔理沙がおかしくて、アリスはくすりと笑う。

「けど、ちよつと意外だな。人形劇なんてお前の柄じゃないんじゃないか？」

「無碍に断るほど下らないと思ってるつもりもないけどね」

実際、人里での人形劇は好評なのだ。永夜異変の一件で夜を停めたことに対する引け目で始めてみた事ではあったものの、今では里のちよつとしたイベントである。子供たちに混じって顔を出す大人のうちの何割かは、美人の魔法使いに対する下心もあるのかもしれないが――

ひとしきり、人形達をじつと眺めて、早苗は感心したようにひとり頷く。

「わー。やっぱり見るのと聞くのじゃ大違いですね。人形遣いさんだっていうのは知ってましたけど、こんなにすごいなんて思いませんでした」

「そう?」

小さく微笑んでアリスが指を一本立てると、人形の一体が作業の手を止めて舞台から飛び出し、ちよこちよこと早苗の前に歩み出た。スカートを抓んで優雅に一礼。まるで舞踏会のエスコートのように、守矢の風祝へ手を差し出す。

「わわっ」

早苗は驚いて人形の丸っこい手に指を伸ばす。風祝の手を取って、舞台劇用の人形は見事な表情を作り喜んでみせた。

「すごい……本当に生きて動いてるみたいですねっ! これ、ひとつひとつ手で動かしてるんですか?」

「ふふ、どうかしら」

謎めかして答えるアリスに、早苗は感動した様子で人形の顔を覗き込む。

山の上の神様を祀り、また自らも現人神であると公言した少女は、アリスの人形劇の仕組みが不思議でならないらしい。

人形達に生きていると見紛うばかりの繊細な動作を可能とさせているのは、一体一体に編み込まれた高密度の魔力糸だ。アリスは五指に嵌めた指輪型の魔具から、合金製の魔力糸を介して指手を送り込み、人形たちを動かしているのである。

人形自体に駆動のための小規模な魔力炉と機構が組み込まれているため、演者は余分な魔力

を消費せず、命令さえすれば人形達を自在に操ることができる。

いまでは魔力糸によらない遠隔操作——これこれの行動をしろ、と単純な指示を与えて魔力経路を切り離し、自律稼働させることも可能にはなっているが、里で披露する人形劇ではそこまでの高度な技術は使っていない。

ともあれ、これこそがアリス・マーガトロイドを稀代の人形遣いたらしめる、傀儡の魔法だ。

アリスは同時に数十もの人形達を従え、それらを個別に使役することで様々な並行動作、複合作業をも可能にしていた。

「いつか、完全に自律した人形を作るのが目標なんだっけな」

「自律、ですか？」

魔理沙がぽつりと漏らすと同時に、声を上げて人形に向かっていた早苗が、きらきらと目を輝かせてぱつと手を上げた。

「あの、アリスさん！　お願いがあります！」

「……何かしら」

「その子、動かしてみてもいいですか？」

「……………」

ずずいと詰め寄られ、思わず黙ってしまうアリス。どちらかというと早苗は人形というフレーズよりも、自律駆動というあたりに食いついた感があるが——

余計な事をとアリスは魔理沙を睨むが、魔理沙はさっきのお返しとばかり歯を覗かせながら肩をすくめてみせる。期待に目を輝かせる早苗に、あまり強いことを言う気にもなれず、アリスは小さく肩を落として指に嵌めていた指輪型の魔具を外した。

「いいわよ」

「ありがとうございます！」

指輪を早苗に渡して、傍らの楽団人形の一体を示す。

「操作の感覚は慣れてもらうしかないから、とりあえず動けと念じてみればいいかしら」
「わかりました！」

勢い込んで指輪を受けとった早苗は、アリスに倣って人差し指にそれを嵌めた。真剣な表情で人形を睨み、むむむと額に力を籠めるように眉を寄せる。

だが、守矢の風祝がいくら顔を赤くして力んでも、人形はピクリと動く気配もない。

「むう……なかなか、難しいんですね……」

「そうかしら？」

当然のことだ。人形操作はアリスが十年以上の時を費やして身に付けた魔法だ。容易く真似されてはそれこそ人形遣いの面目がたたない。

「意地の悪いこったな。起動^{言葉}ハスくらい教えてやれよ」

「なにか勘違いされても困るもの」

種族魔法使いの人生はその大半を己の魔法を磨くために費やされる。そうして積み上げた魔法は何物にも代えがたい魔法使いの財産である。そう簡単に他者に貸し渡すようなものではないのだ。少し意地の悪い事を考えながら、アリスは人形と睨めっこをしている早苗を見やる。「いいのか？　こう見えてもこいつは神様らしいからな、それくらいやってみせるかもしれないぜ？」

「……神様、ねえ」

人形相手に「よっ」「とっ」「はあっ！」などと百面相して悪戦苦闘する早苗の様子に、アリスは半信半疑の表情を崩せなかった。



ひとしきり、動かない人形と格闘する早苗の姿を眺めてから、頃合いを見てアリスは切り出した。人形劇の舞台もあらかた片付き、あれだけいた観客もほとんど残っていない。

「そろそろおしまいにして貰ってもいいかしらいつまでも片付かないと里の人にも迷惑だわ」

「うー……」

未練たつぷりで何度も自分の手と見つめながら、早苗は渋々アリスに指輪を返す。

「もうちよつとでコツが掴めそうなんですけど……」

「気になるならまた試してもらっても構わないけれどね」

くすりと笑って、アリスはいつも連れている二体を残して人形達を、舞台装置の詰まったトランクの中へと格納する。市の外れでちよつとした野外劇場となっていた機材の一切合財が全部トランク一つに納まってしまったことに、早苗はしきりに感心している様子だった。

「なんだ早苗、いよいよ巫女やめて魔法使いに弟子入りでもするのか？」

「そこまで言うつもりはありませんけど……いろいろ便利そうじゃないですか」

「ずいぶん不純な動機だな」

魔理沙にからかわれて、早苗はうー、と口を尖らせる。

「いいえ。その姿勢は立派よ。楽をしたいというのは決して間違った思考じゃないわ。魔法使いは効率と性能をなによりも重んじるべきよ。魔理沙、あなたも力押しばかりじゃなくて、もう少しそこを考えたらどうなのかしら？」

「何を言ってるんだ、お前との勝率なら私の方がいいぜ？」

「力試しで全力なんて出す理由がないじゃないの」

呆れたように答えるアリス。人形の一体が丸っこい腕でつんと魔理沙の鼻先をつつく。

そも、幻想郷の少女の嗜みである弾幕ごっこは、あくまで二者間の合意に基づく決闘のためのルールだ。誤解を恐れずに言ってしまうえば子供の遊ぶベーゴマやメンコのようなもの。

そんな場で、手持ちの札をすべてさらけ出すことこそが愚かしいというのがアリスの持論だ。

とっておきの魔法を繰り出せば確かにその場の勝ち拾えるかもしれないが、明らかになった手札は必ず研究され、解析され、攻略法が組み立てられる。自分の手の内を全て知られた状態で、いざ譲れない勝負に臨まねばならぬとなったらどうなるのか。

——結果は火を見るより明らかだ。

「ま、そういうことにしといてやるぜ」

魔理沙とてそれを分かっているわけではないのだろう。子供っぽい拗ねかただなど思いながらも、アリスは決してそれを不快に感じていないことにも気付いている。流星のような彼女の生き方は、自分には決して真似のできないものだろうから——

「にしても、自律人形ねえ」

魔理沙はアリスの肩の上あたりにふわりと浮かぶ人形を見上げて、

「こいつらとか、半分勝手に動いてそうだがな」

「そうね」

歩くことをわざわざ意識しないように、日々の習慣になるまで繰り返された動作は、意識の外側に置かれるものだ。それを自律というのなら似たようなものかもしれない。

アリスの魔法にとつて、人形の操作に習熟する事は全ての基本にして最終的な目的である。出来のいい中から一体の人形を選び、いつも連れ歩いて操作するようになったのも、眠っている時以外は（いや、その時でさえも）常に人形を動かす事を心がけるためだった。

いつしかその人形がスペルカードの名前から上海人形と呼ばれ、人形遣いアリスの相方のように扱われるようになっていた。

しかし、魔力糸がいくら滑らかに動き、人形の指が魔法や家事に慣れても、そこに人形固有の自我が生まれるわけではない。彼女達の奥にあるのはあくまで、魔力糸で繋がったアリスの意識でしかない。

魔理沙をはじめ多くの者たちはそこを誤解しているようなのだが、否定して回るのも面倒なため、アリスは言わせるままにしていた。

「メデイスンとかはどうなんだ？ あとこの前、動いてしゃべる雛人形にも会ったぜ？」

「スズランの毒人形さんですね！」

最初のほうの名前に、早苗が喰いついた。縁起で読みましたよ！ と覚えてたの知識を披露する早苗に、二人は苦笑を挟む。

「彼女達とはたまに話もするけど、メデイは付喪神の性質に近いし、雛は人形なんていうよりも厄を集める神様じゃないの。彼女達を動かしているのは人形としての機構とは別のものよ。それは私の目指してるものじゃないわ」

「どうもよくわからんな」

難しい顔をする魔理沙に、アリスは吐息する。どうせ説明しても理解は得られないだろうと思いつつも、指を立てた。

「……ただ動けばいいってもんじゃないのよ。その為の理論、過程が重要な。彼女達は確かに^{アーキタイプ}元型こそ人形だったでしょうけど、それを動かしているものは人形の機構とは別のもの。出自が人形だとしても、いまや確固たる妖怪や神なのよ。それじゃ自律人形とは言えないわ。私が目指しているのは『人形として』完全自律稼動する人形なの」

「でもメデイ達は動いてる人形でもあるんだろ？ 結果が同じなら、手段はどうでもいいと思うぜ」

「そういうところが粗雑だっていうのよ、あなたは。理論も機構も解りもしないものをよく使う気になれるわね」

頓着のない魔理沙の態度に呆れ、アリスは半眼で魔理沙を睨んだ。

「馬鹿にすんな。実験はちゃんとやってるぜ？」

「あなたのは単に事象の再現性を確認してるだけでしょう。同じ素材で同じ操作をして同じことが起こる。それを確かめるだけで止まっているのは解析とも理論とも言えないわ。その過程と機構を確定させず、理論構築に繋がないでいるのが信じられないって言ってるのよ」

人と妖怪という差以前に、アリスと魔理沙のスタンスは対照的だ。食欲に知識を求め、スペルの模倣すら是とする魔理沙と、慎重に理論を組み立て設計・構築を行うアリスは、魔法使いとして求めるものがまるで違う。基本的に魔法使い同士はそりが合わないものだが、分けてもこの二人の噛み合わないさは折り紙つきであった。

「魔法使いとして最低限の矜持は捨てたくないわね。どこかの盗賊さんは違うんでしょうけど」

「——そいつがお前の魔法だっていうんなら、そうなんだろうぜ、お前ん中ではな」

「あ、あの……？」

ついに睨みあいまで始める魔法使い二人に、早苗はおろおろと互いの顔を見つめる。

が——しばしの沈黙ののち、アリスと魔理沙は同時に吹き出した。

「しょうがないわね」

「まったくだな」

二人にとってはこれもまたいつものやり取りだった。魔法使い同士が顔を合わせれば互いの理論を肴に議論になる事は日常茶飯事であり、それはアリスも魔理沙も承知の上である。事態に付いていけずきよとんとする早苗の肩を叩いて、魔理沙。

「さて、それじゃあ片付けも済んだところで、せつかくだ、なにか甘いもんでも食べていこうぜ、アリスのおごりでな」

「え。いいんですか？」

「なんでそうなるのよ」

呻くアリスに、魔理沙は白く綺麗な歯を覗かせて、笑う。

「たったいま稼いだところじゃないか。後輩に懐の深いところを見せてやれよ。それにあの観客集めには私も協力してやったんだぜ？ 少しくらい労に報いてもらっても罰は当たらないと思

うんだがな」

「頼んだ覚えはないんだけどね」

返事も待たず、魔理沙は早苗の手を引いて歩きだす。アリスは呆れた表情で人形にトランクを抱えさせて、その後を追った。



「美味しいですねえ」

最近開店したばかりという里の饅蜜屋で、ぱくりと冷えたスプーンをくわえ、早苗が満面の笑顔を浮かべる。細かく砕いた氷やシロップに漬けた果物を使って作られた饅蜜は里でも評判が良く、甘味を好む幻想少女達も良く立ち入っているという。

「……んむ。こんな美味しいものを残すなんてもったいないな。なんなら私が貰ってやつても良いぜ？」

「結構よ」

アリスが目の中の器に手を付けていないのを確認すると、魔理沙はそろりそろりとスプーンを握る手を伸ばす。アリスはそっけなくその手をぺしんとはたき落とした。

痛いぜ、と文句を言う魔理沙を尻目に、アリスは饅蜜に匙を付けた。

「……少しはテーブルマナーを身につけなさい」

「悪いな、和食派なもので箸より重いもんは持った事がないんだぜ」

しれつと言つてのける魔理沙は、ちやつかりとお代わりを店員に注文する。奢ってもらつて図々しすぎやしないかとそれをアリスが咎めるのもお構いなしだ。

「なんだよ、どうせ食べなくても生きていけるんだろ。栄養もいらんだろうに」

「栄養と嗜好は別なのよ」

アリスも少女のはしくれとして甘いものが嫌いなわけではない。さらりと言つてのけ、決してせわしなさを感じさせない優雅な手つきで、速やかに餡蜜を口へと運んでゆく。

早苗がきよんととして首を傾げる。

「え？ アリスさんはご飯も食べないんですか？」

「魔法使いって言うのはそういう生き物なのよ。根源の渦から溢れた魔素を捉え、それを直接身体に取り込んで力にする。捨食の魔法でそうして身体を保つ事ができるわ。これで非効率な食事や代謝、睡眠の煩わしさから解放されるの」

「つてことは、いくら食べても太らない？ うわあ……いいなあ！ やつぱり私、アリスさんに弟子入りしようかなあ……」

目を輝かせる早苗。神様も半分似たようなものではないかと思うアリスだが、つい最近まで外の世界で女学生をやっていた風祝には、人形操作よりもよほど魅力的に映つたらしい。現金

な現人神様に、魔理沙もスプーンを咥えたまま笑う。

「あの、ひよっとしてトイレも行かなくても——」

「ノーコメントね」

不躰な質問をしようとした風祝の口を、アリスの人形が慌てた様子で塞ぐ。むぎゆつ、と顔を覆われたに早苗は、目を白黒させて人形と格闘を始めた。

神様の自分がそうはいかないことを棚に上げてよく言うものだと思うが、そもそも人格神である日本の愉快な神様の精神性は、人間のそれをより強くカリカチュアしたものが多い。神とは並外れたものであり、怒りや嘆きを躊躇うことなく露わにする者こそが相応しい。よってより泥臭い感情を剥き出しにしたものが求められる。そうした意味で、東風谷早苗は実に神様らしいと言えるのかもしれない。

「美味いもんを食べなくてもいいってのもいまいち共感しがたいよなあ」

これにはアリスも内心では同意していた。

事実、習慣的なものとは言え、アリスも食事をしないという訳ではない。

むしろ、身体がそれを欲している訳でもないのに、一日と何も食べないことの方が少なかった。甘いものやお酒などは、量こそわずかだがほぼ毎日摂取している。

数十年を経て捨食、捨虫の魔法を得て人間を脱したが、生前の習慣というのは案外抜けないものらしい。

人であった時代のまま、心が餓えているのかもしれないと、アリスはそう考えている。

生まれながらの魔法使いだったのではないかと噂されるパチュリーですら、書の傍らに珈琲やクッキーなどの軽食を好むし、入浴も楽しむし、館の主と夕食を共にすることも少なくないというのだから——あるいは、魔法使いと言えど人の姿を採っている以上、その形を保つためには食事という要素は必須なのかもしれない。

「じゃあ、やっぱりアリスさんはもともと人間だったんですね」

人形をようやく引っぺがし、口元に人形のしがみ付いた痕を残して、早苗はまたもや幻想郷縁起を引つ張り出してくる。少しでも早く幻想郷の流儀に慣れようと勉強熱心なのは結構なのだが、なにやらカタログを片手に品定めをされているような気分で落ち着かない。

しかしそれを口にするのは淑女としては宜しくないだろう。内心の不満は顔に出さず、笑顔で頷く。

「ええ」

「……………そうだったのか？」

魔理沙は何か得心がいかないのか首を捻っていた。彼女が魔界に来たのはもうずいぶんと前の事なので、忘れているのだろう。

確かにあまり話したいことでもないで口をつぐんでいたが、アリスは顕界とは別の世界——魔界と呼ばれる場所で、姉妹や母と呼んでいる人物たちに囲まれて育った。

「養女なのよ。魔界に捨てられていたのを、母が見つけて——育ててくれたの」

魔界に住んでいる者たちは、ほぼ全てが魔界人と呼ばれる、魔界の神に創造された種族である。魔理沙はアリスもその一員なのだろうと思ひ込んでいたようだが、それは違う。

アリスの両親——生みの親は、人間だった。

アリス自身、顔も名前も知らない。彼等は産まれたばかりの赤子を、どういう訳か魔界へと放り出していった。

魔界は過酷な環境に満ちた場所だ。その土地の七割以上は未踏領域であり、数百メートルを超える津波や、分厚い鋼鉄の門すらずたずたに引き裂いてしまう黒水晶の砂嵐、生命を吸い上げ飲み込んでしまう赤い砂漠といった人智を超えた自然と災害が群れ、漆黒の澱みに暮らす強大な魔物たちが犇めきあっている。

そして何よりも特筆すべきなのが、普通の人間ではものの数日で狂ってしまう程の凄まじい濃度の魔素だ。だからこそ魔界はその存在自体を禁忌とされ、『門』によって顕界とは隔離されていた。

そんな場所に放り出された赤子が命を長らえたというなら、まったく幸運だったと言うほかはない。それこそ、奇跡のように。

「運が良かったってだけじゃないのかもね。……私はそう思うことにしているわ。ママに会えた事も、姉さん達と一緒に育ててもらった事も含めてね」

今にして思えば、そんな自分が魔法使いになろうとしたのは必然だったのかもしれないとアリスは思う。

「……………」

「姉さん達も、母も、出自の違う私に嫌な顔一つせず、大切にしてくれたわ。本当の家族みたいにね」

「じゃあ、私と一緒にですね」

同じように、神様を家族として暮らす早苗には思うところもあったのだろう。早苗の幼い連帯感にそつと頬笑み、アリスはお茶に軽く口をつける。

「でも、今にして考えてみるとわざわざ魔界を出て独り立ちなんてことを考えたのも、そのあたりがあつたからかしら。立派な魔法使いになりたいと思つたのもそう。……みんなと自分が違ふとどこかで感じていたからかもしれないわね」

生まれながらにその姿であり、完成された人格を持つ魔界人たちの家族の中で、ごくごく普通の人間だったアリスが感じた違和感——それは、一旦感じてしまえば簡単に拭い去れるものではなかった。

白鳥になった醜いアヒルの子とは訳が違う。母の娘ではない、人間の少女という特異性。過酷な魔界において生み落とされた生命とは違い、脆弱で未熟な自分に対する劣等感。

家族達はそれでもなおアリスにいつもと変わらぬまま接してくれたが、皆の態度が変わらな

いままであることは、かえって苦痛であつたかも知れないとアリスは思う。

そうしてそんな時に、外界から人間達が乗り込んできたという話を聞き——あとはもう、魔理沙や霊夢の知る通りのことだ。

「その時に魔理沙さんと会つたんですよね？」

「ええ。霊夢ともね」

「わー、興味あります。その頃のお二人ってどんなだったんですか？」

「……ええとね」

続きを聞きたがる早苗をどう誤魔化すかと思案するアリスの隣で、魔理沙は黙ったまま、やけに神妙な顔をして——空の餡蜜の器を掻き回していた。



まだ人里で用事があるというアリスと別れ、早苗と魔理沙は帰途につくことにした。

帰り道は別々だが、息をするように空を飛ぶ幻想郷の少女達にとつて、道行などは割と気分次第だ。方角さえ近ければ自然と足は同じ方向き、会話が産まれる。

空の上、緩やかな風を纏つて飛ぶ早苗は、隣を行く箒上の魔理沙に並び、新しい神社のこと、山の妖怪達のこと、次の宴会のこと、少し前に起きた異変のこと。とりとめもない雑談を続け

ていた。

そして話題は、やがてアリスのことへと飛ぶ。

「アリスさんって、どういう人なんですか？」

「どういうって、あの通りだぜ？」

「うーん、確かに外国のお嬢様って感じでしたけど……こう、なんていうか……」

早苗はいまいち腑に落ちないと言う様子で、眉間に皺を寄せる。いつも遠慮会釈のないこの娘が、口ごもるのは珍しいなと魔理沙は思う。

「魔理沙さんとは随分前からお知り合いなんですよ？」

「ん？ ああ、まあな」

具体的にいつからのと問われれば、どう答えるべきか困ってしまうが、確かにかなり前から
の知り合いであることは確かだった。

アリスか、と魔理沙は呟いて、

「見ての通りとしか言えないが、人形に関してはとにかく頑固だ。魔法使いなんて大概、偏屈
で自分勝手な変人がほとんどだが、アリスはその中でも一番魔法使いらしい魔法使いだな」

「……？ 魔法が好きってことですか？」

「いや、魔法使いらしくあろうとしすぎて言うかな。……一応聞いとくけど、種族とし
ての魔法使いと、職業としての魔法使いの違いは分かってるよな？」

前者がアリス、後者が魔理沙のことだ。さらに種族魔法使いにも2種類あり、元から魔法使いとして産まれる者と、後天的に魔法使いに『成った』者がいる。それらの前知識を訪ね、早苗がこくと領いたのを見て、魔理沙は腕組みをした。

「アリスはその種族魔法使いだ。種族魔法使いは、魔法使いってだけあって、自分だけの魔法を求めて研究をするもんなんだ。正しく言えば、日常のいろんなことをそっちのけで魔法のために生きたいってやつが、人間やめて魔法使いになるわけなんだが——アリスのやつは、他の事を犠牲にしても自分の魔法、完全自律人形つてのの完成に執念を燃やしてる。それこそ、種族魔法使いのお手本みたいにな」

幻想郷じゅうに広く人脈を持つと自負する魔理沙の友人の中でも、魔法使いは決して多くはない。だから比較するのも難しいのかもしれないが、それを考慮しても、アリスの生き方は窮屈だなと思えてならなかった。

「……それがなんとなく、勿体ない気がするんだよな」

魔理沙はすいと視線を上にあげた。藍と橙の入り混じる夕映えの空には、ちらほらと星が瞬いている。小さな輝きが、空の大気の中に一筋の光を書いて流れ落ち、燃え尽きて消えてゆく。それを黒い瞳の奥に映し、魔理沙は胸中のもやもやを言葉にして押し出した。

今日一日、なんとなく胸の奥に抱えていた違和感を、結局形にできないまま吐き出したような、そんな心地の悪さ。

「世の中にもっと他に面白いことがたくさんあるはずなんだが、アリスにはそんなものが見えてないらしい。……魔法使いならそうあるべきだって、アリスの奴は言うだろうし、実際そう言うもんなんだろうぜ。でも、それが……なんとなく私は納得いかないんだ。なんてのかな、もっと他の物を見てもいいんじゃないかってな。そりゃあ、魔法使いにとつて魔法は何よりも大切なことなんだろうけど。……でもなあ。」

第一、アリスはあんなことに拘らなくても、魔法使いの腕としちや私よりずっと上なんだが——ああいや、勿論私だって負けてないぜ？」

思わず認め、尊敬を口にしてから慌てて苦笑いとともに打ち消す魔理沙。

アリスは特に不得手なく、十大系統の魔法を自在にこなす万能タイプである。敢えて人形使役以外の他の系統でも問題なく魔法使いとして一流だろう。むしろあんな回りくどい魔法の完成を目指していなければ、もっと上の実力を持っているだろうと、魔理沙は実体験と共に推測していた。

「今はあんな感じだけだな、前はもっと違ってたんだぜ」

「前？」

「一度だけな、自身のあいつと戦ったことがあるんだ。あいつが幻想郷に来る前。魔界でな。……まだスペルカード・ルールもなかったころだ」

魔理沙にはまだ師匠がいて、博麗神社の巫女の守役を務めていた大亀が、高齢を理由に引退

を申し出た頃のこと。修行嫌いの巫女は空を飛ぶ練習を始めてほんの数日で魔理沙に負けないくらい上手に飛べるようになり、その異常すぎるくらいに天才性の片鱗を見せ始めた時の話だ。それはちょうど、甘味屋でアリスが口にした、魔界での出来事と重なっている。

そこで言葉を切り、魔理沙は気付いたように頭をかいた。

「と、すまん、いろいろしゃべり過ぎたか」

「え？」

いきなり話題を打ち切られ、早苗はきょとんと瞬きをする。

彼女の困惑を背中に感じつつ、魔理沙は大きく箒を南へ巡らせた。

「……悪い、もう帰る。じゃあな！」

「え、あの」

早苗はなんのことかわからないと言うように生返事を返す中、魔理沙は魔法の森へと進路を変え、箒の速度を上げた。

「さようなら……」

流星のように小さくなつてゆく、白黒の魔法使いの背中を見送つて。

早苗は未だ困惑の中、大きく首を傾げながら、手持ち無沙汰になった手を中途半端にひらひらと動かし、言葉にし損ねた別れの挨拶を小さく口の中で反芻していた。

【二】霧雨魔理沙後方支援会

——フラグ 10-B 成立。

追加ヒロインルートが解放されました。

Spell Card Bonus 「支援妖^バ怪^ーの選択肢」



年も明けて程なく、幻想郷のあちこちから温泉が湧き出した。

神社の境内に噴き上がる間欠泉を見上げ、霊夢がこれ幸いと浴場を作らせ、参拝客を増やそうと目論んでいた頃。

アリスはひとり、魔法の森の工房で頭を悩ませていた。

温泉騒動とほぼ時を同じくして、人形達が異常動作を頻発しはじめたのである。研究作業用はおろか、家事や雑務を任せている人形までが狂い出し、その対応に追われて先月からの作業工程は半分も消化できていない。

異常動作の原因は人形本体にはなく、外的要因であることはすぐに判別できた。その究明のため、アリスは様々な要因を検討し、可能性を一つ一つ潰していく。地道な作業を根気よくこなし、不眠不休で三日。びっしりと埋まったチェックリストの束を傍らに、アリスは明け方の工房の中で嘆息と共に三日ぶりの紅茶を口に運ぶ。

「……間違いない、か」

その原因は温泉にある。人形の記憶素子の棋譜^{ログ}を複数照合して確認したところ。温泉の周辺で瘴気が濃くなるのに合わせて、人形の動作不良エラーが著しく増加していたのだ。この瘴気

の増減は、温泉から噴き出す霊の数と比例している。近付いた霊が命令の伝達経路にノイズを生じ、意図しない誤動作が頻発する原因となっていたのだ。

アリスの操る人形には、精密な動作を可能とするため、過剰とも言えるほどの魔力糸が編み込まれている。設計段階から運用まで人形に外的な霊干渉が起きないように防護を張り巡らせてはいるが、ヒトガタをした存在は霊の干渉を受けやすく、根本的な解決は難しい。

防御手段を模索したが、一体当たりにかかるコストが莫大になる上、それを全ての人形に施すのはあまりにも現実的ではなかった。

他人事と考えていた温泉騒動が、俄かに身近なものとなってきた事実を認め、アリスは眼鏡を外して眉間の皺を押さえる。3日目の朝日が目に染みた。吸血鬼ほどではないが、魔法使いも基本的には夜行性だ。

「調査をしなきゃダメかしらね」

窓の外を無数の霊が泳いでゆく。基本的には無害な存在ではあるが、放置もできない。おぼろげなその輪郭に、七色の人形遣いは深く吐息した。



麓の雪も緩み始める中。湖のほとりにはまだ色濃く冬の気配が残っていた。去りゆく寒さを

名残惜しむように、岸のほとりでは氷精が猛威を振るっている。

妖精メイドに用件だけを告げ、地下に続く階段を下りてゆくと、冷やりとした空気と共に、辺りには黴と埃と、積み重なった古書の匂いが満ちはじめ。

そうして辿り着いた大きな扉の先に、紅魔大図書館は存在した。

まるで牢獄のように分厚く巨大な扉は、この大図書館から知識が流れ出てゆくことを拒絶しているかのようにも感じられる。魔法使いという生き物は押し並べてどこか狂っているものだが、この図書館の主の書に対する執心も並々ならぬものだ。

ノックをしてしばし。重い扉が開くと、訪れた図書館の扉を潜ると、一礼と共に、赤い髪の使用い魔が出迎えてくれた。

「いらつしやいませ、アリス様」

以前は服に着られていた印象が強かったが、今では司書姿も馴染んだものだ。彼女は魔界から召喚され、魔法使いに使役される知識と書の在り方を示す悪魔^{アボククリファ}の一柱である。契約の常として名を持たず、知識と日陰の魔女パチュリー・ノーレッジの従僕としてこの図書館に従事している。

アリスの見立てでは本来はこんな場所で司書など務めているような格の魔神ではない筈だが、司書となる経緯がどんなものであったのか、この使用い魔は自分と主の出会いについては頑として語ろうとしない。

アリスもまたさして興味を持つてはいなかったので、必要最低限の言葉くらいしか交わしたことはなかった。

彼女に先導され、峡谷のように聳え立つ書架の間を飛んでゆく。膨大な知識をおのずから収集するこの図書館は、一種の異界として機能しており、日々刻々とその姿を変えるのだ。主の居場所も決して一所には留まらず、案内には書の悪魔である彼女を頼らねばならなかった。

「パチュリー様、アリス様がお見えです」

「客人か。……日陰の魔女が随分と社交的になって、結構なことじゃないか、パチェ」

「そうね、こちらの都合も考えずに押しかけてくる相手ばかりで、読書の時間にも不自由する一方よ」

図書館には珍しく先客がいた。無愛想な日陰の魔女が頁を捲る傍らで、白いドレスを着た小さな姿が背中の羽根をばたばたと揺らす。

永遠に紅き幼き月、レミリア・スカーレット。言わずと知れた紅魔館の主である。

この五百歳の吸血鬼は、図書館の主である七耀の魔女とは百年来の旧知の間柄にして友人であった。同時にパチュリーは紅魔館の顧問魔術師であり、レミリアとは雇用関係にある。

「こんにちわ。お邪魔だったかしら？」

「いいのよ。横暴な当主様の我儘に手を焼いていたところだったから」

「話し相手になってやってるってのに、なんて言い草だ」

皮肉交じりの魔女の言葉にも、吸血鬼は鷹揚に頷くばかり。それもこれも、当主としての格を示すためののだとレミリアは言つて憚らない。

吸血鬼は矜持や体面を重んじる種族であり、妖怪の中では珍しく『血脈』の優劣にも拘泥する。わずか五百歳という若輩ゆえか、レミリアは殊更に年長ぶる癖があった。年経た妖怪達にとってはその幼さ、若さこそが求められているというのが皮肉でもある。

「こんな明るくなるまで夜更かし？ 不健康な吸血鬼ね」

「愛ゆえに、だね」

「眠気覚ましの時間潰しに付き合わされる身にもなつて欲しいものね。神社にはまだ出かけなくていいのかしら？ レミイ」

「時に、恋には時間も重要なのだ。パチエ」

この吸血鬼が、酔狂にも博麗の巫女にご執心であるというのは、既に幻想郷中の知るところとなっている。当の巫女はけんもほろろだが、それでもレミリアは健気に神社に通い詰めているらしい。

わざわざ生来の生活習慣すら矯正して、神社に出向いては素っ気なく追い返される——特殊な性癖でもあるのではないかと勘繰りたくなる。

（吸血鬼ならばその程度の倒錯した嗜好、備えていても当然かもしれないけど）
ひとしきり考えてから、アリスは一人で納得した。

「失礼するわね」

パチュリーの許可を得て、アリスはテーブルの一席に腰を下ろす。手土産にと今朝焼いたばかりのパウンドケーキを差し出すと、パチュリーは領いて妖精メイドを呼び寄せた。

ほどなく、テーブルには紅茶と切り分けられたケーキが並ぶ。メイド長が氣を利かせたのか、レミリアの皿にはクリームチーズと共に紅のブラッディジャムが添えてあった。

「パチュリー、今日は――」

「温泉の件よね。そろそろ来る頃じゃないかと思っていたの」

「……へえ。珍しいわね」

あなたが外の事に興味を持つなんて、とアリスが告げると、パチュリーは幾分機嫌を損ねたようにわざとらしい溜息をついた。

「あなたにまで引き籠り扱いされるのは心外だわ。あなたほどじゃないけれど、私も被害を被っているのよ。湿気で本が駄目になって困るわ」

しきりに嘆くパチュリーだが、日陰の魔女の喘息には少しばかり湿り気があった方が良いんじゃないかとアリスは思う。

しかし、幻想郷のあちこちに靈のホットスポットが生じると言う異常事態は、魔法使いとして注視すべき現象である事は間違いない。パチュリーが興味を持つのも、考えてみれば当然の事だ。

「この霊——便宜的に、地霊と呼んでいるけど——温泉に引き寄せられたものではないわ。間欠泉の泉脈に乗って、地下深くから湧き出しているのよ」

前提知識を持つていることを条件に、同じ立場で交渉を持ちかけるアリスとしては、パチュリーが万が一にもこの異変に関して無関心であるという事態が最も忌避すべき事態だった。来訪がとりあえず無駄にならなかったことに、アリスはこっそり安堵する。

「地下から幽霊ねえ。それこそ巫女の出番じゃないか？ お祓いでもなんでもさせればいい。なんだったら、私が話してやっても構わないよ」

「そんな単純な話で済むならいいんだけどね」

完全に他人事で笑う紅い暴君に、アリスは吐息。二人の魔法使いから露骨に邪魔扱いをされているのを驚異的なまでの面の皮で跳ねのけ、吸血鬼はこの場に居座る気満々らしい。

あまねく運命を識ると嘯くこの吸血鬼は、生きる魔法災厄のようなものだ。基本的に、彼女が出張る場合事態はややこしい方へと転がる。

それが、彼女が面白いと思うほうへ運命を弄くっているからなのか、単に我儘だけなのかははつきりしない。

「そもそも幽霊と亡霊は別物。一緒にされても困るのよ。原因をどうにかしなきゃ対処療法ね、根本的な解決にはならない。嘔き出してきた源泉を埋め戻せば済むというような話ではないでしょうし」

「あの間欠泉は、埋めるだけでも大仕事ね」

パチュリーが手近にあった本を広げると、そこに幻想郷の森を映す幻影が浮かび上がる。地上数十メートルもの高さで吹き上がる湯柱に、図書館の魔女は顔をしかめる。

そもそも、因果を突き留めずに封印で済ませるような手段では、発掘された不発弾を埋め戻しているのと変わらない。異変の理由と原因を調査しなければ話が始まらないのだ。

「第一、その巫女と一緒に湧いている温泉を歓迎している有様だし」

「割と気持ちよかったわよ？ パチェも入ってみれば氣にいるかもしれないわ」

「……広い風呂はあまり好きじゃないわ」

おそらく博麗神社でひと風呂浴びてきたのだろうが、流水を苦手とするはずの吸血鬼だが、少なくとも怨霊がたつぷりと含まれた温泉はその対象外であるらしい。常々紅魔館の主が公言しているニンニク、陽光といった弱点とやらもどこまで本当なのかは疑わしい話なのだが。

どんどん話題が逸れていく事を危惧したか、パチュリーがわざとらしく咳き込む。

「……そろそろ本題に入ってもいいかしら」

喘息の薬を吸引してから口調を改め、パチュリーは前置きと共にアリスに向き直る。

「アリス。これは、あなたも知っていると思うけれど。妖怪の社会から疎まれたもの達が、地底に隠れ暮らしているという話があるわ」

「……聞いたことがあるわね」

外の世界で忘れられたものが流れ着くこのザナドウに置いて、なお忌み嫌われた彼等。その多くは、かつて鬼と呼ばれていた者たちだった。

幻想郷の成立過程で、彼等は地の底へと追いやられたという。その中心となったのは現在の妖怪の山で権勢をふるう天狗たちと、妖怪の賢者だったのだとパチュリーは続けた

「当時の幻想郷は今より不安定だった。好戦的で、人間の種全体を脅かす事にも頓着のない連中と、結界の安定を望む者たちの間では、分裂は必然だったのかもしれないわ。後になって、妖怪の賢者との間で盟約が結ばれて、以来地底と地上の交流は禁忌とされてきた。……レミイや私達がここにやってくるずっと前の事ね。それからかなりの時間が経つけれど——今回の怨霊騒動、彼等の思惑だったとしたらどうかしら」

「積年の恨みで地上の侵略でもしようってわけ？」

「ふん、なかなか面白そうな話じゃないか」

ぱたぱたと背中中の蝙蝠めいた羽根を揺らし、口元に牙を覗かせて、レミリアは満悦。霊夢に構う口実ができたということだろう。

「可能性は高いと思うわ。いずれにしても、これはただの温泉騒ぎじゃ済まされない。世間の認識以上の異常事態なのよ。当事者の八雲紫が手をこまねいているとは思えないし、山の妖怪たちだって黙ってはいられない筈」

妖怪の山は現在の幻想郷における一大勢力である。天狗や河童を中心として構成される彼等

の社会は、極端に閉鎖的で知られていた。幻想郷から追いやられた地底の妖怪達となれば、現行の体制を脅かすに十分な相手である。特に天狗あたりは率先して動くことだろう事は容易に想像がついた。

「しかし、そのつまらん盟約とやらで、私達が直接出向くと言うわけにはいかないだろう？」
レミリアは、友人の苦境を面白がるように喉奥でくつくつと笑いを漏らす。

ふどうやら傲慢なる紅魔館の主は、今回の異変に対しあくまで傍観者を気取る腹積もりであるらしい。何事も騒動の中心でなければ気が済まない吸血鬼が、特段の興味を示さない事は、僥倖と呼べるかもしれないとアリスは思う。

実際、彼女本人がその気になりさえすれば、盟約など鼻にもかけずそのまま地底に突入してすぐさま大暴れだろう。

パチュリーも同じことを考えたらしい。紅茶のカップを傾け、再度小さく咳をひとつ。

「そうね、妖怪達にとって地下との交流は禁忌よ。……妖怪にはね」

含みを持たせたパチュリーの言葉に、アリスはさも、今気付いたというように頷いた。
概ねパチュリーも自分と同じことを考えていたようだ。

「魔理沙ね？」

「ええ」

図書館の魔女は卓上にあつた眼鏡をかけ、使い魔に持つてこさせた書をテーブルに広げる。

古い筆字の下に、薄汚れた赤黒い点——レミリアが眉を動かしたのを見て、アリスはそれが風化した血判だと気付いた。

「かなりとんでもないものが出て来たわね」

パチュリーが持ち出してきたのは、地底と地上の不可侵を記した契約書の模写だ。どう考えても軽々しく持ち出されて良いものとは思えないが、およそ書に関するものでこの図書館になんともものは皆無ということだろうか。

まさかその契約文そのものを目にするとは思っていなかったため、アリスは少なからず驚きを隠せない。たちこめる古書の匂いに咳をしながら、パチュリーは古びた文字をつうつと指で追い——

「ここね。見て。……この盟約、人間については何も触れられていないの。だから、人間なら盟約に反することなく地下に堂々と入っていける」

「……詭弁ね」

「ええ。でも横車を押すには十分」

自信に満ちた口調で、図書館の魔女は断言した。

今回の怨霊騒動は、数年前、幻想郷に訪れた永夜異変に良く似ていた。

終わらない夜と偽物の月がもたらした異変——それは人間にとってはお月見に不自由する程度のささやかな変化だったが、妖怪にしてみれば太陽が出なくなることと等しいほどの大異変

だった。

人間達の多くが——本来は異変解決が生業のはずの巫女ですら、その異常性に気付かない中、一部の妖怪達だけが地底というキーワードに反応し、対応を模索。人間たちに打診して異変解決に名乗りを上げたのである。

パチュリーはその構図をヒントに今回の発想に至ったのだろう。

「地底との盟約が締結された当時、今のようない変のシステムも、スペルカード・ルールも、抑止力としての巫女も存在していなかった。人間の里の中に実力者と呼べるような者も殆ど見られず、交渉のテーブルに着くことは不可能だったようね。地底との交流の中に、人間に関する言及がないのは当然とも言えるわ」

つまり当時の妖怪は、人間を軽んじていたのだ。大結界も敷かれてはおらず、現在のような人間と妖怪の関係すらまだ確立されていなかったこの時代、両者の関係は一方的な捕食と被捕食、討伐と迫こそが当然とされていた。

「間拔けなもんだ。その人間に負かされて、こんなエデンの東に追いやられた自覚もなかったのかね」

自分は違うと言いたげなレミリアだが、パチュリーは首を振り、盟約の書面を示す。

「そうかしら。……これを作らせたのは八雲紫よ。彼女が人間を軽んじる事は決してない。それは断言していいわ。きっとこんな事態を想定していたのじゃないかしら」

「買いかぶりだな」

友人の推測を、つまらなそうに両断するレミリア。

「何でも知っているなんてふりをしているだけさ、アレは」

「そうね、誰かさんの運命操作能力みたいに解りにくいものね」

呟いた魔女に、レミリアは言い返せず口元の牙を覗かせて唸る。言い返してこないところを見ると、それなりに核心を掠めていたのか。

「アリス」

不意に名を呼ばれ、かつての妖怪達の盟約に見入っていたアリスは顔を上げた。

知識と日陰の魔女は手元の本をしっかりと閉じ、七色の人形遣いの双眸を正面から見つめて、力強く宣言する。

「私は魔理沙に協力を頼むつもりよ」

（ふうん……）

パチュリーの言葉の裏に込められた挑発に、アリスも気付く。どうやら彼女は永夜異変で出遅れた事をずっと心に留めていたらしい。実に魔法使いらしいことだ。

手袋を投げつけられた気分で、アリスは小さく微笑んだ。

「知らなかったわ。パチュリー、あなた、結構根に持つタイプなのね」

「物覚えが良くなきゃ魔法使いは務まらないもの。貸し借りはきちんと押さえておかないとね」

本人の前で明かす事はまずないが、パチュリーが森の魔法使いに対して並々ならぬ興味を――控えめに言って、ただの友人以上の好意を抱いていることは、アリスも承知している。

「魔理沙が興味を持つかしらね？　霊夢が動く様子はないんでしょう？」

「……それも時間の問題よ」

鬼、天狗、すきま妖怪。博麗の巫女の周りに集う妖怪は、いずれもが名に負う大妖怪ばかりだ。地底との確執も昨日のように知っている長命のものも数多く、今回の事態を座して静観することはないだろうと言うのがパチュリーの読みである。

アリスもそれは同感だった。

「報酬に魔法書の二、三冊も用意すれば、魔理沙も引き受けてくれるでしょうね」

森の魔法使いは実に利己的だが、実のところ友人の窮状や頼みを黙って看過できない性格であるのも、二人は十分に承知の上だ。

その上で、パチュリーはあえてそれを口にした。黙っておいて直接、魔理沙に交渉する事もできるのを、敢えて明らかにしたのは、アリスに対する宣戦布告でもあるだろう。

アリスもまたそれを受け、余裕を崩さぬままに応じてみせる。過去にコンビを組んだ経験があるのだ。優位を崩す手はない。

「そうね。……じゃあ、機会を作って話してみる？」

「ええ」

パチュリーが頷き、かくして二人の協定は合意に至る。

魔理沙を代理として、地底との交渉を行い、地上に噴き出している怨霊の原因を解析、追及して対処させる——その為の臨時の魔女会は、こうして結成された。

なお、報酬の魔道書三冊は、双方の次難被害にあつたなかからツケの清算という形で行われることも合意される。

「問題は地_下との交信方法ね。私達が直接立ち入ることができないとは言っても、魔理沙に任せて結果を待っただけじゃ消極的すぎるわ。こちらからのバックアップというだけじゃ、あの子は言うことを聞いてはくれないでしょうしね」

「同感ね。魔理沙にはあくまで私達の代理になつてもらわなきゃならない。ただの補佐だけじゃイニシアチブもとれないし、地底で好き放題でもされたら、交渉の余地もなくなるわね」

「念話で間に合うかしら？」

「瘴気の内包値も高いし、怨霊密度の濃い場所でも有効な通信帯があるかしら。感覚共有とまで贅沢は言わないけど、双方向の会話くらいは抑えておかないと」

霊というのは生前の記憶や魂を持つ意識体だ。雑霊が群れる区域では、交信に彼等の意志が入り込み、その邪魔をする。遠隔通信のための魔法は多くあるが、それらがみな魔法である以上、霊の干渉を受けないわけにはいかない。

「高密度の暗号化とジャミング——だめね。そもそも霊によって通信帯が塞がってるのが問題

なわけだし」

いざ議論を始めてみると、それは思いのほか難題であつた。雑談は議論に変わり、次第に議論が白熱し始める。

地下への干渉方法をあれこれと並べたて、討論を始めた二人の魔法使いを横目で眺め、レミアは一つ欠伸をすると、神社へ行くために図書館をあとにした。



図書館の卓上は、時ならぬ期末進行^{デスマーチ}の最中であつた。

積み上げられた書籍の山は、幻想郷の内外を問わず通信に関する知識を記したもの。傍らには黒板が立てられ、呪文の構文が書いては消され、四目に及ぶ討論の結果がメモとして貼り付けられている。書架をどけて広げられた作業台のあちこちでは十を超える作業用人形達が工房長人形の指導のもと忙しく動き、検証を繰り返していた。

テーブルのひとつには大きな水槽が設置され、それを取り囲むように人形達が各々の配置に着き、逐一記録を付けている。

嚴重に封のされた水槽の中身は、近くの間欠泉から回収してきた地霊たちだ。

念話の魔法を封じた紙人形を、捕まえてきた地霊と一緒に水槽の中に封じる。紙人形には五

秒ごとに簡単なメッセージを発する術式をこめ、それに防護を施して通信の強度を保つ実験だったが——いまだ三十分も術を維持することもできず、その進行は控えめに言っても捗々しくない。

進まない研究と停滞した思考。倦んだ空気の中で萎れた食べかけのサンドイッチを脇へと押しやり、アリスは目元を擦りながら冷めた珈琲を啜って顔をしかめ、耳慣れない単語に眉間に皺を寄せた。

「——河童？」

「ひゅい!？」

胡乱な表情でアリスが振り向いた先には、ひとりの見慣れない少女の姿があつた。部屋の隅に縮こまった彼女は、叱られでもしたかのように帽子の上から頭を抱え、おずおずとアリスの方を見上げてくる。

水底の藻を思わせる青緑の髪と、幾分低めの鼻筋の回りには、雀斑の痕も残る。肌の色は白いが決して不健康な印象はなく、むしろ十分に鍛えられた力強さも感じられた。あちこちにポケットの付いた作業服には、ところどころ煤や油污れの痕も見える。そのポケットにもぎゅうぎゅうと物を詰め込み、背中には一抱えもある大きなリュック。

辺りに漂う水気と、かすかな水草の香りは、彼女が確かに水妖に属するものであることを示していた。

けして器量良しとは言えないが、外見だけなら大きな目が可愛らしい、少なからず好印象を持たせる娘だった。

それを、怯えた態度が全て台無しにしている。

（河童つて、陸の上だと息ができない妖怪だったかしら）

明らかにいっぱいいっぱいの様子で小悪魔の背中に隠れ、目深にかぶった帽子の下からおずおずとこちらを窺っている少女に、そんなことまで思う。

「……なかなか個性的な子ね」

「河童の河城にとり。山の妖怪だそうよ」

一向に喋ろうとしない彼女に変わり、パチュリーが紹介する。

彼女個人に覚えはなくても、河城という姓にはアリスも聞き覚えがあった。

妖怪の山の山麓、そこに広がる水系に住む河童のなかでも多くの工房を所持し、大きな集落をつくる一族だった筈だ。それを名乗ると言う事は、彼女がすくなくとも、コミュニティの外で部族の名前を負うだけの妖怪だということになる。

その気弱な様子からは、とてもそのように実力のある妖怪とは見えなかったが――

いずれにせよ、何故ここに部外者が紛れ込んでいるのか分からず、説明を求めようとアリスがパチュリーを見れば、彼女もまた詰まらなそうに――いや、内心の不機嫌を苦勞してねじ伏せたような面持ちで、黙って首を横に振る。

アリスはそつと席を立ち、パチュリーの傍に歩み寄った。

「……どういうこと？」

「魔理沙に話をした時にね、紹介されたのよ」

こればかりは自分も想定外だとはかりに、パチュリーは肩をすくめた。

一昨日、いつもの調子で図書館に侵入した魔理沙を、本格的に稼働させたトラップで捕獲した。パチュリーは、以前からの盗難被害について淡々と請求書をつき付け、件の地底探検の話を持ちかけた。

幸い魔理沙は嫌がるでもなくそれを引き受けたのだが、その時に協力者として推薦されたのが、彼女、河城にとりだったのだと言う。

「魔理沙とは最近、友人になつたらしいけど……魔理沙は随分彼女を買つてゐたい。河童の技術は凄いから、手伝ってもらえば効率がいいって、大分強く押し切られたわ」

苦々しげにパチュリーが呻く。

なんで、と非難の声を上げそうになるアリス。——さすがに本人を前にして口に出す訳にはいかなかったが。

アリスの内心の憤懣を察したかのように、パチュリーも顔をしかめ、ごほごほと痰の絡んだ咳をしはじめていた。見かねた人形達がその肩を優しく叩き、机の上の吸入器を取りに走る。

喘息の薬を渡しながら、アリスはさらに声を潜めてパチュリーに耳打ちした。

「彼女、信用できるの？」

「……………」

同じ妖怪といえども、河童は科学や技術を好む種族であり、魔法使いとは相容れない相手なのだ。さらに彼等は奇矯な振る舞いで知られ、経緯を抜きにしても警戒をせずにはいられない。

さらに言えば河童は妖怪の山の側の代表的な勢力だ。天狗の下に組み込まれ、妖怪の山の権勢争いに加担しているという噂もあった。

「あ、あの！」

「……………なにかしら」

頭痛を覚えながらアリスが視線を向ければ、にとりは黒板に張られたメモを、一枚一枚興味深そうに覗き込んでいた。

「え、ええと。魔理沙に聞いてるんだけど、二人は地下との通信方法を作ってるんだよね。どんな方法か聞いてもいいかな？ ……これが通信の式なのかい？」

「……ええ。使い魔の原理ね」

遠隔地とのリアルタイムでの双方向通信というのは、言葉にするほど単純なものではない。

短時間ならともかく、探索行の間をすべてカバーできる程度となると、コストも難度も大きく跳ね上がる。

その解決策として、パチュリーは魔理沙を疑似的な使い魔にする方法を提案していた。

魔法使いが使役する従者の中で、主人と感覚や記憶を共有するものをファミリアと呼ぶ。本来の契約では動物のような、知識を持たないものを用いることがほとんどだが——契約の儀式を調整することで、人間と種族魔法使いの間での主従契約関係を実現しようとしたのである。

「ふうむ……」

にとりはしばし難しい顔で構文の記されたメモを見つめていたが、やがてポケットから取り出した複雑な計算尺のようなものをすさまじい勢いで弾きだした。

テーブルの上のノートを断りもなく破り取ると、床にどかりと座り込んで、紙片に次々と式を書き殴りはじめた。彼女は黒板とメモ、手元の計算尺を何度も見返しては、しきりに首を傾げ、眉をよじらせる。

「……どうかしたのかしら？」

怪訝な顔をするアリスに、にとりは振り向きもせず計算尺を弾きながら、

「えーと、あのさ、私の知る限りで間違つてたら済まないけど……魔法での使い魔の契約って、感覚の共有ってことは、主人の意識が端末側にも混じっちゃうんだよね？」

「ええ」

主人と使い魔、二者間に精神のリンクを確立し、両者の意識を解レースさせる。それが使い魔の原理である。

そう答えたアリスに、にとりはますます顔をしかめ、がりがりと頭を掻いた。

「うん。確かに双方方向通信ってのは良いと思うんだ」

早口で黒板を指差しながら、河童は計算尺を弾き、その結果を黒板に書きこんで見せる。

「でもさ、つてことはそれって、契約した人間って、半分は魔法使いとおなじだよね？ それって厳密にはもう人間じゃないんじゃないかなあ。妖怪が地下に行けないってことに抵触するんじゃないかねえ？」

「……………」

「……………」

アリスとパチュリーは思わず顔を見合わせる。

指摘されれば、確かにその通りだった。主人は使い魔の五感を通じてものを見聞きし、思考を共有し、感覚を借りて遠隔で魔法を使うことも可能だ。いちやもんに近いレベルではあるが、契約中の使い魔は、主人である魔法使い本人であると言うこともできる。

思わぬ指摘を受け、呆然となるアリスの隣で——パチュリーは検算のため計算尺を弾きなおしているにとりに訪ねる。

「なにか、あなたには改善策があるの？ 心当たりのあるような口ぶりだけど」

「あ、えとっ」

聞かれ、河童の娘は計算尺を取り落しそうになりながら慌てて背中のリュックを降ろした。大きなリュックの中に身体を半分突っ込むようにして中身を掻き回しはじめる。

「えーと、これだつ」

いくつもガラクタを床の上にぶちまけ、とりが取り出したのは片手に乗る程度の大きさの装置だった。ガラスのような面と、いくつかのボタンを組み合わせた端末を、アリスとパチュリーは揃って覗きこむ。

「これで、遠くからでも会話ができるよ」

「……こんなもので？」

何が出てくるのかと身構えていたところに示されたのが思いのほか安っぽい外観をしていたことに、二人は眉間に皺を寄せる。

「早苗に古いのを貰って、とりあえずそのままガワだけ真似てみたんだけど……あ、これをそのまま使おうってんじゃないから安心しとくれよ？」

再現できるかどうか怪しいってのが本音だけだね、と続けるにとり。

「うん、ええとね、なんでも外だと普及してる技術らしいんだ。有線じゃなくて無線でねえ、何公里も離れた場所と通信が可能なんだって。しかも一台、一揃いとかじゃなくて、何千何万つて数の端末が、それぞれ個別に通信し合えるみたい」

「……本当なの？」

「俄かには信じがたい話ね……」

にとりの説明によれば、これは外の世界で普及しているという通信装置だった。アリスも名

前だけは耳にしたことがあったが、目にするのは初めてだった。

姓名と住所を提示し、わずかな金額を支払うだけの簡易契約で、魔力も使わずに無尽蔵に通信が可能であるというのは魔法の常識から見ると理解し難い非等価交換である。

「なんでもアンテナつてのが立たないと届かないらしいけどね。……多分、途中で通信を経由する中継点みたいな場所をたくさん設けてあるんだ。通信機はそのどこかに通信できれば、たくさんの中継点を経由して離れたところとも通信ができるって寸法さ。それならこれ一台は大きくならず済むし、出力も少なくて済むわけだ」

にとりの提案した方法はこうだ。魔理沙にあらかじめ、複数の中継ポイントを設定した子機を複数持たせておく。魔理沙は地上と交信しながら地下を進み、子機を所要所に配置してゆく。通信内容は一番近い子機から順繰りに中継点をリレーさせることで、地上と地底とを結ぶ。

この方法であれば子機も端末も大きな出力を必要とせず、帯域の確保や防護に十分な対策を施す事ができると、にとりは締めくくる。

「でも、実際にはまだ必要な部品もたくさんあるし、中継のテストも出来てないんだけど……ん……あ！ ご、ごめんよ！……なんだか勝手に色々言っちゃったみたいで——私の悪い癖なんだ。こういうのを見ると、すぐに見境なくなっちゃって——」

慌てていいわけを始めた河童に、パチュリーは静かに首を振る。

「いいえ。謝るのはこちらの方、どうやら、非礼を許してもらわないとならないのは私達のよ

うだもの」

「え。え。な、なんだいいきなり!!」

「……パチュリー」

「ええ」

顔を見合わせて、魔法使いたちはお互いに頷き合う。

にとりの示した案は、二人の魔法使いをして素直に称賛できる内容だった。

「さっきの言葉、撤回させて。あなたと、河城の一族を不当に貶めてしまったことになるものね。紅魔館の顧問魔術師として、正式に謝罪するわ。そして、あなたを正式に客人として迎えたいのだけれど」

「ひゅい？　ちよ、ちよと待っておくれよ、なんだか話が——」

深々と頭を下げたパチュリーに、にとりはますます混乱するばかりだ。立場と言うのは厄介なものだなとアリスは苦笑し、三人目の仲間を迎える準備を人形達に命じていた。



一週間が過ぎた。

「アリス、この前の通信珠の話だけど、どうなったかな。事前にチェックしておきたいことが

あるんだけど——」

「今、持ってこさせるわ」

「さんきゅ。……うん、うん……成程」

にとりは勢い込んで計算尺を弾き、手元の帳面に次々と構文を書き込んでゆく。勢い余って紙面を飛び出したペン先が、テーブルの上にまで字を連ねていった。

すでに会合も3回目を重ね、三人での会話もすっかり慣れたものだ。

最初の頃の怯え具合はどこへやら、にとりは既に勝手知ったるとばかりに卓上をはみ出さんばかりに図面を広げ、あれこれと作業を進めている。

短い付き合いだが、分かったことがいくつもある。彼女は河童の例に漏れず、いわゆる技術屋の天才肌らしいということ。

時折口籠ったり、息継ぎも忘れてまくしたてるほどに饒舌になったりするのは、彼女の思考に言葉が付いてきていないためらしい。作業中にふと浮かんだ疑問に熱中して、設計図の隅に数式を書きなぐり始めたり、魔理沙に会った時に何を話せばいいのかと思ひ悩み始めたりと、実に脱線も多い。

それでなお、彼女の勤勉さは凄まじいと、アリスも認めざるを得なかった。図書館で夜遅くまで図面を引き、討論を重ね、作り出した検討課題を手になぐらへと戻り——翌朝になってここを訪ねてくるまでにはもう、それらを改善するための案をいくつも用意している。

妖怪として休息を取らないままでは、効率も落ちる。それでお彼女には一向にそんな様子が見られないのだから、彼女は生来このような毎日を送っているのかもしれない。この数日で、アリスは彼女が人見知りという前評判は誤りだと理解していた。彼女は他人との距離を測ることに長けていないだけだ。知らない相手にはひどく余所余所しいが、一度見知つてしまえば親しげに明け透けと話してしまうのだ。

それが河童という種族全体の特性なのか、彼女本人の気質かまでは分からないが、ともあれ新たな友人の言動には、アリスは強い新鮮味を覚えていた。

「ここはどうしようもないよねえ。仕様って事で魔理沙には勘弁してもらうしかないか。だよ、パチュリー」

こんな物言いもそのひとつ。力の及ばない事、不可能な事をあつさりと晒してしまう彼女の態度は、魔法使いの在り方とは相容れない異質なものだ。

魔法において重要な事は、『秘する』ことだ。種も仕掛けありません——そう宣言すること、ただの器用な指先が、魔法となるように。魔法使いが出来ない事を認めてしまえば、不確定性の可能性が不可能ひとつに収束され、魔法には及ばない領域となってしまう。ゆえに優れた魔法使いほど物事の断定を避け、「そうかもしれぬ、そうでないかもしれぬ」と語の真意を言葉の奥に隠す。

認めねばなるまい。確かに、にとりはこれまで魔理沙の周りにはいなかったタイプだ。

「……ねえ、アリス」

「なに？」

「あの子、魔理沙に似てるのかしらね」

問われて改めて、そうなのかもしれない、とアリスは頷いた。日々試行錯誤を重ね、分からないと思ったことは尋ね、必要だと思ったものは躊躇なく取り入れてゆく。

にとりと魔理沙、性格こそ違えども、未知に対するスタンスは確かに良く似通っていた。
……そして。

発端となったアリスとパチュリーの図書館での会合から十二日目の夕刻。

紅魔館地下の図書館に急ぎよ設けられた仮設工房では、いよいよ、地底との交信を可能にする新たな理論に完成の目処が付きはじめていた。

「根本は、紫のこの通信珠をベースにするって事でいいかしら」

「——本音を言えば業腹だけど、これ以上贅沢は言えないわ」

「ええと、二人とも、ちよつといいかい？」

「？」

改まつての物言いに、交信システムの概要をまとめていた。パチュリーとアリスが振り向けば、にとりは少し離れた本棚の陰から手招きをしていた。

人形達と小悪魔をその場に残し、招かれるままに二人がそちらに向かえば——にとりはしき

りに周りを気にしながら、靴の爪先をぐりぐりと床に擦りつけ、もじもじと身をよじる。

「……なにかしら？」

「ええとね。うん、その……あのさ。……こうやって、当初の目的にも大体目途もついたことだし、私から一つ、提案があるんだけど」

言いくそうに宙空に視線をさまよわせ、硬い唾を飲み込んで。

「……ここから先の、魔理沙をサポートする方法は、別々に作ることにしないかい？」
にとりは早口でそう切り出した。

「あ、あのね！ 別に、これまでの事を嫌だと思ったり、疎ましく思ってる訳じゃないんだ。アリスにもパチュリーにも、すぐく世話になったのは間違いないから。だから、私のこれは、ただの我儘なんだ。でもね、できれば、怒らないで聞いてくれると、嬉しい……かな」

反応を待つように言葉を切り、帽子を押さえたにとりはわずかに顔を赤くして、視線を床に落とす。

「これから実際に地底にいくのは魔理沙だ。これまでの異変解決にも沢山出掛けてるんだから、私達があれこれ考えるより、一番勝手が解つてるのは魔理沙だと思う。それは間違いないよね？」

「……ええ」

パチュリーが頷く。だろう？ とにとりは勢い込んで何度も頷いた。

確かに道理ではある。しかし、それは本来、自分たちが地底の妖怪達との交渉にイニシアチ

ブを握るといふ、本来の目的を逸脱する発言だった。魔理沙はあくまで、地上にいるアリスたちの代理として地底に赴かねばならない筈だ。

アリスが異論を挟むより前に、にとりは言葉を継いでいた。

「それで、だとするなら、魔理沙にどんなものでもいいのか、選んでもらえたら良いんじゃないかって思ったのさ。3人で一つのものを作るんじゃないかと、3人が別々に作ったものの中から、魔理沙が一番いいって思ったものを選んでもらう。……どうかな？」

「……………」

「あ、あのね！ たぶん、私とお二人さんたちのやりかたは、すごく違うものなんだと思うんだよね。魔法について私は詳しくないし、アリスもパチュリーも、私ほどには河童の科学については知らないだろう？ それに、同じ魔法使いだって、お互いに流儀も信条も違ふし、譲れないやり方や信念があるはずなんだよ。そうすると、そのうちややこしいことがきつと次々出てくるはずさ」

にとりはいつも以上に饒舌だった。

言い辛いことを、懸命に口に出すように――彼女が早口になる時は夢中になる時か、言いにくいことを言い繕おうとする時なのだと、アリスはここ数日の付き合いで知っている。

「それぞれに違う流儀のある個人が、一つ所に集まって、一緒に一つの事をしようっていうのはとても難しいものなんだ。広い見解が出て意見は活発になるし、それで新しい発見もたら

されると思うけど、その調整や取りまとめにも時間や労力を割くことになっちまうよね？ これまで一緒にやってきた経験があるわけじゃないから、猶更だ。誰かがリーダーになって、全体の道筋をつけないきや、治まりがつかなくなることだって起きかねない。ええとね、私が言えた事じゃないけど、河童には偏屈なのが多いから。無理にチームを作るよりは、それぞれが好き勝手にしてる時の方がマシだったこともあるくらいさ。その、だから、それで——」

「それは河童としての見解なのかしら？ 三人で、別々のものを作るべきだ、というのは」

「え……うん……」

頷こうとしたにとりだが、そこで彼女は思い直したように、強くぶるぶると首を横に振った。

「ごめん、違う。……私情だよ」

帽子の下に隠れた彼女の顔が、赤くなっているのに、アリスは気付いた。

「その。正直に言うね。……私は、盟友の……魔理沙の力になりたい。……他の誰よりも、一番に。」

その為には出来るだけいいものを作りたいんだ。……今回のことも、私一人じゃ無理だと思っただから、魔理沙にお願いして、手伝ってくれる人たちを紹介してもらったんだよ。二人にはいっぱい助けてもらっておいてその上でその、こんなこと言い出すのは、良くないって思ってるけど、でも……」

「……ええと、聞いていいのかどうかかわからないけど、あなた、魔理沙の事——」

「うん……。好きだよ」

顔を耳まで真っ赤にして、にとりは頷いた。

河童は妖怪の中でもとりわけ人間に友好的な種族だ。彼等は総じて、人間を盟友と呼び、友であらうとする。

だがにとりのそれは、それを考慮しても度を越したもので、魔理沙に対して個人的な感情を含んでいる事は明白だった。明け透けに本音を語る彼女の愚直さに――アリスは困惑していた。彼女が魔理沙と出会ってからまだそう間がないはずだが――いつの間にこんなに親密になったのだろうか。

「……………」

ちくりと胸の中にささくれ立つ感情を、理性でエラーだとねじ伏せて。アリスは極力平静を保とうとする。結果、黙り込んでしまったのは不自然だったろうけれど。

要するに。

にとりは、この場に居る三人が、皆ライバルなのだろうと、そう言っているのだ。

彼女は決して愚かではない。むしろ、自分の欠点を自覚し、それを回避する事を考えている。

自分を過信せず、慢心せず、欠点に自覚的だ。

それだけ、今回の地底の問題に掛ける情熱が強いということでもあるだろう。決して失敗できないという意志が透けて見え、それはそのまま、魔理沙への感情へと繋がる。

「あ、あのね。二人が嫌だつていうなら、もちろん無理を言うつもりはないんだ。信用できなくなつたなら、このまま表に放り出してくれたつて構わない！ 私情を挟むのは良くないって分かつてるけど、でも、このまま嘘を吐いてることの方がもっと良くないって、私はそう思つたんだ。だから、その……」

喋っているうちに、次第に支離滅裂になっていく。声を尻すぼみにしながら、にとりはどうとう俯いて黙つてしまった。

突然の告白に、魔法使い達は静かに黙考する。

「……………」

「……………」

アリスも困惑していた。どういう訳かよくそう誤解されるが、図書館の魔女はともかくも、アリスには魔理沙に対して特別な感情はない。一緒にされてしまうこと自体が迷惑なのだが——さてどう説明したものかと悩んでいるうちに、パチュリーが口を開く。

「魔理沙への個人的感情は置いておくとして——」

びくり、と身を竦ませるにとりに、小さく微笑んだような気がしたのは、見間違いだっただろうか。アリスが瞬きをする中、図書館の魔女はぱたんと本を閉じ、アリスに小さく目配せをする。

「提案そのものには一理あると思うわ。お互い、どうしても見せられないものというのは有る

ものよね」

「……そうね」

吐息と共に、アリスも頷く。

「効率的な面でも、その方が見通しが立ちやすいかしら。妥当な判断だと思うわ」
茶番だと思いいながらも、実に魔法使いらしく合理的に、そう呟いて。

かくして、お膳立ては整うこととなった。

「時間がそうあるわけではないし、すぐに魔理沙に伝えましょう。期限までにそれぞれの支援形態を完成させて、魔理沙に選んでもらう。期限は……そうね、今週一杯5くらいでどう？」
パチュリーの言葉に、アリスは短く了解を告げた。にとりも幾分硬い表情ではつきりと頷く。

——そして、五日後。

三人がそれぞれ持ち寄った支援形態の成果物を確認する品評会で、魔理沙はアリスの提示した人形による後方サポートを選んだ。

【三】 ルイス・キャロルの寵愛

ショット「レインボーワイヤー」

遠隔霊撃「リモートサクリファイス」

Spell Card Bonus 「御伽の国のアリス」



「むう……」

への字に曲げた口、しかめた眉。腕組みをして魔理沙はテーブルに並べられた人形と睨めつことを続けている。

自分の眼鏡にかなうものは、多少——相当強引にでも持ち去っていく彼女だが、そうでないものには態度を一転、そう易々と信用を置かない。魔理沙は普段のアリスの人形のようなものを予想していたのだが、想像と大分違っていたことに驚きを隠せない。

「前に聞いた時と話が違わないか？ 私はてつきり、上海みたいに自動で付いてきてくれるようなやつだと思ってたんだがな」

「きちんと説明したわよ。聞いてなかったのはそっちでしょう。主人あなたと同期もしないで機械的に射撃をするだけのオプションなんて使い辛いだけでしょ？ あくまで、この子たちの役目はあなたのサポートなのよ」

「それこそアリスが動かしてくれればいいじゃないか」

「ここからの遠隔操作で、地底とどれくらいタイムラグがあると思ってるのよ。後ろから撃たれたいの？」

通信機能により人形に中継させた情報はリアルタイムで地上のアリスも確認できるが、遠隔操作でいつもの精密な弾幕^{弾幕}を操るのはリスクの高い行為だ。

「ほら、背中向けて。魔力経路^スを繋ぐわ」

「うえ……どうも好きじゃないんだよな、それ。……手とかじゃダメなのか？」

「いざつて時に手が塞がってたらうまく飛べないでしょう？　これが初めてじゃないんだから、今更怖気づかないでよね」

魔理沙の弾幕のスタイルは箒による飛行と、茸や薬草を煮詰めて作った丹薬を用いるものだ。人形操作で手が塞がっていたら、サポートどころかかえって足を引っ張る結果にもなりかねない。何年と練習を積み、息をするように自然に扱えるのもなければ、それは避けるべきだというのがアリスの考えだ。

「本音を言えば、直接脳髓に繋いじやいたいんだけど」

「おいおい」

物騒な物言いに席を立とうとした魔理沙を、アリスの操った人形達が先回りして捕まえた。

「冗談よ。障害が残るようなことはしないから、安心しなさい」

「あんまり安心できないぜ……」

魔理沙の背後に回り、アリスは有無を言わずに魔力糸を縫合した。白いうなじにちくりとした感触を覚え、魔理沙は軽く身をすくませる。

「んうっ……」

「じつとして。すぐに繋がるから」

人形との接続を行う魔力経路は出来るだけ思考に近い場所にある方がいい。人形を操る事に慣れた魔法使いならばともかく、経験の少ない魔理沙には、指先からの伝達はあまり効率が良いとも言えない。そう考えての妥協点なのだという。

首筋の奥に打ちこまれた魔力系の先端には、ヒヒイロカネ製の細針が繋がっている。意志を介在する金属が、魔理沙の神経と繋がり同化してゆく。

「はい、おしまい。……まだ調整するから動かないでね」

そう言つて、アリスは糸の反対側をテーブルの上の人形に接続し、魔理沙への管理者権限の移譲と初回起動の設定に移る。

（簡単に言ってくれるもんだな）

アリスの背中を眺めながら、魔理沙はこっそりと溜息をついた。

他人の魔法を借りることに、頓着してはいないと思われていないというのが、そもそも酷く心外な話だ。パチュリー、アリス、幽香、レミリア……彼女達の魔法を模倣するたびに、魔理沙は、どうしても彼我の圧倒的な力量差を目の当たりにせざるを得ない。

それは、人間と魔法使い、妖怪という種族差以上に、大きな壁となつて少女の前に横たわっていた。

魔理沙は奴隷タイプの魔法が不得意だ。以前にあちこちの妖怪や人間相手にスペルカードを調べ、研究した時にも必要性こそ実感したもの、いくつか試作してみたスペルはみな満足とは言いがたい出来だった。

まして、本物の人間よりも精密な動作が可能なアリスの人形は、当然ながら繊細で緻密な操作を必要とする。以前に試させてもらった時も、早苗の事などまったく笑えない惨憺たる結果だったのだ。

魔理沙も全くの素人ではないが、自分の技量では精々1体を動かせれば御の字で、それも他の魔法と併用できるかどうかは正直言って自信がなかった。

(どうもアリスはそのところを理解してくれないからな。参るぜ)

実際、魔法使いとしての技量では人間の魔法使いと種族魔法使いの間には大きな隔たりがあり、アリスのそれは実に正しい態度なのだが——そこにもう少し感情を交えて理解してもらえないかと魔理沙は思う。

見事なお手本の隣に、明らかに劣っている自分の技量を晒して平然としていられるほど、魔理沙は太い神経をしていない。そのあたりの乙女心にあまり頓着せず、個人の力を数字や理論のように語るときのアリスが、魔理沙は少しだけ苦手だった。

「いいわよ、動かしてみて」

「……ん？」

とりとめもなく物思いに巡らせていたところを、魔理沙はアリスの声で現実に戻された。見れば既に接続作業を終えた人形が、テーブルの上にちよこんと腰かけている。

「動かさせて、どうすれば——お？」

魔理沙が口を大らかに開けたその傍から、人形はごく自然に身を起こし、ひらりと身を翻した。危なげなく歩き出し、魔理沙の前に進み出ると、ぴしりと胸に手を当てて優雅な一礼をする。

「おお……」

魔理沙の意志通り——いや、それ以上に滑らかな動作だった。

精度も確度も文句の付けようがない。以前にアリスの人形を借りた時に比べれば、まさに天地の差があった。右手、左手と順番に動かし、両足の具合を確かめるように大きくジャンプ。さらに逆立ちして宙返りまで見事にこなす。くるくると身体を丸めて着地した人形が、ぴしとポーズを決める。

「こりやすごいな。流石私だけ」

見事な演武を披露する人形に魔理沙は思わず拍手。

滑らかに動く人形達は、まるで十年來の技術のようにしつかりと身体に馴染む。ここまではと少し不気味なほどだ。

「いつのまにか人形操作まで覚えてしまったんだ？ 未恐ろしいな」

「そんな訳ないでしょう」

うそぶく魔理沙に、アリスは溜息。

「この子は動作を簡略化してあなたが使いやすいように調整した、あなた専用の人形よ。あなたの思考の一部を借りて動いているの。……そうね、もう一人の霧雨魔理沙だって考えてもらってもいいかもしれないわね。主人であるあなたの意図を理解して、基本的には考えるだけで動作してくれる筈よ」

「ほほう」

アリスが示した先、魔理沙の首筋と繋がった魔力糸がきらきらと輝きを放ち、目まぐるしく情報をやり取りしている。魔理沙が動作を命じると、魔力糸の発光がわずかに変わるのを見て取れた。

「精密制御はできない代わりに、あらかじめ設定した指手の中から状況に相応しい行動を取るように、大幅に操作を簡略化してあるわ」

アリスは本棚から分厚い本を二冊、魔理沙の手の中に押し付ける。

「なんだこりや？」

「ログなんだこりや？」

「棋譜と定跡集。コマンドリストこの子たちの説明書ね。しっかり隅まで目を通しておいて。できれば暗唱できるくらいに、ね。そうでなくちゃこの子たちは十全に機能を発揮できないから」

「……わかったぜ」

説明書と呼ぶにはいささか分厚すぎるようにも思えたが、有無を言わせぬ迫力で迫られて、魔理沙は黙って頁を開いた。隙間なくびっしりと書き込まれた構文が目飛び込んでくる。一冊は基本操作、もう一冊は実際の弾幕での運用に対応しているらしい。

「機能を大きく削つてゐるから、動作も単純化せざるを得なかったけど、あなたに繊細な操作はもともと向いてないでしょうし。その分だけ経路の容量は開いているから、複数の操作でも負担にならない筈。最大精度、連続稼働による負担を考慮したうえで、十分な安全率で帯域は確保してあるわよ」

「……これで単純なのか？」

説明書をめくりながら顔をしかめる魔理沙。アリスから渡された操作方法のコマンド群は、基本動作だけで二百近い。定跡の応用や変化展開を含めればそのバリエーションは千を超えるのが確実で、いったいアリスは普段からどれだけ膨大な情報を人形とやりとりしているのか、魔理沙には想像もつかなかった。

「——って待て。いま同時って言ったな。他にも動かせるのか？」

「8体用意したわ」

「ぶっ」

さらりと言われた驚愕の事実には冗談でなく吹きかけて、魔理沙は驚く。

「おいおい、それ全部動かさせてのか？」

「甘く見ないで欲しいわね。私だって伊達に人形遣い名乗ってないわ。あなたに負担はかけないわよ」

不敵に微笑んで、アリスは残る7体の人形を展開させる。魔理沙と最初に接続した人形から、7本の魔力糸が伸び、残る7体を繋いで相互に結線、一つの部隊を構築する。

製造番号は順に「02」から「08」。最初の1体を合わせてちょうど8体。チェスの歩兵を模した一軍のクラードである。

「この子——『ボーン01』が他の人形達のハブの役割も果たすわ。簡易的なものだけど経験を蓄積すれば動作の効率化と補助くらいはしてくれと思う。定跡にある中でなら実際の隊列操作もこの子が自動で指揮してくれるから、あなたは集中して他の作業ができる筈よ」

魔理沙が定跡集を開いて指示すれば、8体の人形がひとつの生命体のように、相互を補佐し合って陣形を組み上げる。まるで訓練された騎士団のような、巧みな隊列捌きは見事と云うほかない。お互いの魔力糸が絡まってしまわないのかと不思議になるほどだ。

陣形の基本は散会と密集。火力を集中させればその突破力は自分のレーザーさえも凌ぐだろうと魔理沙は推察した。

「それと、この子達は1体ごとに緊急回避の霊撃にも使えるようになってるの。原理はアーティファクトリファイス魔符に近いく、廉価版だしあそこまでの破壊力は期待しないで。それでも放出をレーザー式にしたから数秒は盾になるはずね。」

……少し問題があるとする、指手コマンドの伝達に必要な魔力かしらね。出来る限り効率化はしたけど、8体の同時操作にはそれなりの魔力を要求されると思うわ。本番では最初のうちは全部動かさずに、1体か2体で様子を見るべきね」

だが、これを完成品として出す以上、アリスはこの人形達こそが最適な解だと判断してのことでだろう。

人形自体が一つの霊撃として機能する以上、そのストックは多ければ多いほどいい。実にアリスらしい、合理的な仕様だった。

「成程な……。恐れ入ったぜ。こんなに使い勝手がいいんなら、私ももつと早く研究しとくべきだったぜ。色々応用できそうだしな」

「調子いいんだから。一から作って言ってみなさい」

現金な魔理沙に、アリスは呆れた様子で腰に手を添える。しばし魔理沙が人形達を動かし、動作確認をしていくのを見ていたアリスは、不意にほんと手を打った。

「そうそう。大事な事があるのを忘れてたわ。魔理沙」

「ん？」

「さっき、考えるだけで動くなんて言っただけど、思考や意志というのはそんなに単純なものじゃないのはあなたも分かるわよね」

「お、おう」

魔理沙に視線を合わせ、アリスは指を立て、その先端を魔理沙の鼻先に突きつける。

「よろしい。この子達を使っている間、急に、あなたが思っているのとは全然違う動作をすることがあるかもしれないわ。時にはこの子があなたをすることを止めようとしたり、逆に急かしたりすることもね」

言い聞かせるように、しつかりと。

「……いい？ 魔理沙、これだけはちゃんと覚えておいて。そういう時は普段は意識の下に隠れているあなたの別の思考や判断が表に出てきてるといふことなの。だからそういうことが起きたら、必ず何をしたいのか聞いてあげて。絶対に無視しては駄目よ」

いつになく真剣な表情で迫る人形遣いに、魔理沙は口を挟む事もできずにこくこくと頷くばかりだった。



鹿威しの音が涼やかに響く。

湿度の高い熱気が足元を撫で、肌にはしつとりと汗が浮かぶ。

竹を編んだ作りの脱衣所の前にはアリスの人形が四体、鎧を着こんで剣と盾を構えた完全武装で、隙なく浴場への出入りを見張っていた。物騒な人形を残していくのは防犯のためとアリ

スは言うが、霊夢が気付いたら営業妨害だと文句を言ってくるに違いない。

キャミソールの肩紐を外し、ドロワーズを脚から抜きながら、魔理沙はなんとも落ち着かない気分です。背後へ視線を向ける。

「……そんなに大事な魔道書なら金庫にしまつて鍵でも掛けといたらどうだ？ 普段から持ち歩いてるのに読みもしないなんて勿体ないぜ」

「無理やり連れてきておいて良く言うわね。使うためじゃないわ。手癖の悪い誰かさんに悪用されないように、いつでも目の届くところに置いてあるだけよ」

脱衣籠の中、警備の魔法が放つ淡い輝きに包まれるのは、ブックベルトを巻かれた古い古い装丁の魔道書。

グリモワール・オブ・アリス——あるいは単に「グリモワール魔道書」。その名にアリスの名前を冠するこの魔道書は、古代魔法と禁呪をぎっしり詰め込んだ、魔界第一級の禁書だった。幻想郷に比べてはるかに魔法の進歩した魔界でなお、禁書指定を受けたこの本は、本来なら所持しているだけでも罪に問われるものなのだと言う。

不埒者を一步も通さんとはかり、本の前に進み出た人形達が、じゃきんと槍を交差させてその前に陣取り——近づこうとした魔理沙をぎろりと睨んだ。

「おいおい、信用ないな」

「普段の行いがものを言うのよね、こういうときには」

くすくすと笑うアリスに、魔理沙は決まり悪そうに下着を脱衣籠に放り込んで、ゴム紐で長い金髪を背中にまとめて結い上げた。

地底探索の準備の合間を縫って、二人は博麗神社の温泉を訪れていた。渋るアリスを説き伏せての、敵情視察という名目である。

溜息をつきながらも、なんだかんだで付き合ってくれるあたり、アリスも気になってはいる事だったらしい。

お賽銭を入れると温泉に入れる——博麗神社に湧いた温泉は、最初のうちは物珍しさも手伝って、参拝客を増やしたという話だが、しばらくして間欠泉はここだけではなく幻想郷のあちこちに噴き出していることが判明し、最近ではすっかり客足も遠のいているのだとか。

「おお、貸し切りだな」

タオル一枚で一足先に浴場へと出た魔理沙のすぐ目の前を、青白い霊がふよふよと横切ってゆく。

よく観察をしてみるまでもなく、あたりには湯気に混じって無数の霊が漂い、生前の業のままだに暴れている。健康な人間であればさほど害はないだろうが、心身に気の塞ぎを持つような者には影響があるかもしれない。

「ふい……」

ばしやりとお湯を被って、湯船に踏み入った魔理沙は、肩まで深々とお湯に身を沈め、手ぬ

ぐいを頭の上に乗せる。一方、アリスはと言えばどこか及び腰で、浴槽の縁に腰を下ろし、怪訝な表情を浮かべて湧きだす温泉の具合を確かめているようだった。

「こんな得体の知れないお湯に、よく平気で浸かる気になるわね」

「温泉に罪はないぜ」

お湯の中に手足を伸ばし、大きく身体を反らせて深呼吸。

「それに、これくらいで怖気づいてちや地底なんかに行けやしないだろ？」

「そういう問題かしら」

湯気を立ち昇らせる露天の湯船は、縁から絶え間なくお湯を溢れさせるほどに豊富な湧出量をもっているようだった。天然石作りの浴場は急場で作らせた割にはぜいたくなもので、成程集客にはそれなりの貢献をすることだろう。

——この群れる霊たちさえいなければ。

「……あとね魔理沙。できればあんまりそういうのはして欲しくないんだけど」

アリスが不満げな理由は他にもある。魔理沙が頭の上に乗せた人形——ポーン01の扱いである。魔理沙は彼女も連れてゆくと言つてきかず、わざわざ人形サイズのタオルまで用意させていたのだった。

防水、耐熱の問題で流石に服まで脱がせてはいないが、魔理沙の頭の上にちよこんと腰かけたポーン01も、すっかり温泉を堪能している様子である。

「少しでも扱いに慣れておけって言ったのはアリスじゃないか」

「そうだけど」

「ほら、こいつも一緒に入りたいって言ってるみたいだぜ」

「はいはい」

そんなポーン01は、湯船に浮かべた洗い桶の中に飛び乗り、魔理沙と一緒にバンザイをして抗議の意志を訴える。ほんの数時間で彼女をすっかり自分の手足のように扱う魔理沙に、諦めたようにアリスはため息をついた。

「そんな神経質になってちゃ疲れるぜ。せつかくの温泉なんだ。ゆつくりしなきゃな」

「……本当にあなたは気楽でいいわね」

魔法使いであればこれらの霊から身を守ることは初歩の初歩だが、十全に防衛策を巡らせた上でなお、アリスは厭っているようだった。その慎重さ、言いかえれば臆病さは、無用なトラブルを避けることが信条の魔法使いとしては正しいものだ。

アリスは渋々といった様子で、十分に掛け湯をしてから湯船の縁に腰かけ、そろそろとお湯の中に足を入れてゆく。

魔理沙には丁度いいくらいの熱さなのだが、アリスには少々熱すぎるらしい。都会派の彼女には、肌の付き合いというのが苦手な部類になるのかもしれない。

「……………」

身体の前を覆うようにしたタオルの下から、ほんのりと色づいた白い肌が覗く。髪留めでまとめたふわふわのおくれ毛が、細いうなじに張り付いていた。

濡れたタオル一枚だけが覆う素肌は色白で、均整のとれたプロポーション、決して自己主張が激しいわけではないが、女性としての魅力を十二分にもつ柔らかさとしなやかさ。

ゆるくウェーブのかかった透けるような金髪。深い青の瞳。長いまつげ、整った指先。

「……神様は不公平だぜ」

「？」

タオルの下にほんのりと覗く薄淡い茂みも、女性としての象徴の一つだろう。まったくの無垢な幼さでもなく、かといって成熟した女性のそれとも違う、性と生の境界線上にある少女の理想形。色々と寂しいことになっている自分の身体が少し恥ずかしくなり、魔理沙は少し乱暴にお湯の中で足をばたつかせた。

「……もう少しおしとやかに出来ないのかしら」

ばしやりとお湯を被ったアリスが非難の声を上げる。

「いいだろ別に」

素っ気なく答えて、肋の浮き出る薄い胸をへた。たと触りながら、魔理沙はお湯の中に顔を半分まで埋めてぶくぶくと不満を口にする。

森の魔法使いの暮らしは、割合と不規則だ。魔法の研究に打ち込むあまり、日々の食事がお

ろそかになる事はしよっちゆうであるし、熱中して徹夜なんてことも珍しくない。お世辞にも健康的な生活とは言えないだろう。

魔法に必要な丹藥や触媒や、儀式のために特定のものを食べずにいなければならなかったり、正しい食生活を妨げる事も多く、栄養面的にも決して優れているとは言いがたい。

それでも家を出て森に一人暮らしをするようになってから、だいぶ腕も腰も、腿も太くなつた。……と言うよりは、その頃が細すぎたのだと言ふべきか。最低限の逞しさを得るとともに、日々実験を繰り返す指先にはあちこちに傷跡や薬品の跡が残っている。

それは決して引け目に感じるようなものではなく、魔法使いとして誇るべきことなのだと
思つてはいたが。

（不満に感じるようなことじゃ、ないはずなんだけどな）

自分よりもずっと身を削つて魔法へ人生をささげているはずのアリスの、少女の理想形のよ
うな肢体を目の前にしてしまうと、どうしてもそうは思えなくなるのだ。

アリスも都会派を標榜してはいるものの、魔法のための資材一切合財を全て購入しているわ
けではなく、野草や茸、動物の骨や鉱石と言つた天然資材はやはり森や山野を歩きまわつて採
取し、調達している。そのためには天然の魔法の迷宮メイジ・グランドとなつて森の奥深くまで踏み入らな
ければならないし、一度の採取が数日掛かりとなる事も珍しくない。

生きていく以上は針仕事、力仕事だつてしななければならないし、弾幕の研究や魔法の森に棲

む魔物たちから身を守るとの戦いだつて避けられないはずだった。

——それらを日常的にこなして、あの理想の体型を保っているのは、やはり人間と俗世から逸脱した種族魔法使いとしての在り方ゆえなのだろう。

お湯の中に手足を伸ばし、大きく深呼吸をして。魔理沙は頭に乗せたタオルの下から空を見上げる。まもなく春を迎えようとする幻想郷は、雲ひとつない快晴の青空を見せていた。

「なあ、この前の話なんだが」

「この前？」

「早苗と一緒に話しただろ、魔界の時の」

「……昔のことを訊かれるのは、あなただつていい気分じゃないでしょう？ ゴシツプに飢えてるのは天狗くらいにして欲しいものだけだ」

「……そうだな」

答えはしたが、魔理沙に諦める気はなかった。その気配はアリスも感じているらしい。

さらさらと流れる湯音の間に、逃げられるかもなと思った矢先。アリスは先んじて湯船に身を沈めてくる。

「……何を聞きたいの？」

「はしやり。」

タオルに覆われた胸元から、白い肌が透けている。ほんのりと血色の良くなった肢体は、ま

るで蜂蜜を垂らしたミルクのよう。しなやかでありながら、みずみずしさと柔らかさを備えた理想の少女。

だからこそ。

人形を使わずとも、十分過ぎるほどに魔法使いとして一流のアリスに対して、魔理沙が抱き続けてきた疑問だった。

「どうしてお前は、幻想郷に来たんだ？」

魔理沙が本気であることは悟ったのだろう。深く、吐息をひとつ。アリスはお湯の中に手足を伸ばす。

「母を、知ってるわよね」

「ああ」

母——アリスがそう呼ぶのは、魔界の神にして造物主^{ライフメイカー}、神綺のことだ。

神社の裏手に固く閉ざされた『門』の向こう側の世界、魔界。

無限とも呼べるほどに広大な天地を創生し、そこに住まうあらゆる生命を一人で生み出したという彼女は、異変（当時まだこの言葉はなかったが）を解決せんと向かった魔理沙たちの前に立ちはだかった。

その力は、およそ人智の及ぶものではなかったと魔理沙は思い返す。

神綺は、神に相応しい途方もない慈愛で、自身の生み出した世界を、そこに生きるものすべ

てを愛していた。

魔界との騒乱は、魔界の観光業者を名乗る一団が、幻想郷観光ツアーという名目で幻想郷の侵略を企てたことに端を発する。後に判明した事だが、これらは明らかに神綺の命令を逸脱した行為であり、しかも彼女には無断で行われたものだったのである。

造物主の命に背く大罪を犯した彼等を、しかし神綺は見捨てることなく、幻想郷の全戦力を相手取ってなお戦い、守り通した。

打算や利害の入り込む余地のない、無尽蔵の愛。それが神綺の力の根源だ。そうでもなければ世界一つを作ることなんて夢のまた夢であると、そういうことかもしれない。

親の顔を知らない、魔界へと放逐された捨て子が憧れるには、十分だっただろう。

「――そんな母のように、なりたかったのよ」

憧憬を交えて、アリスは言う。

幼い頃にアリスにとって、神綺は理想の女性だった。

少女であり、母親であり、魔界全ての生物の造物主。その偉大さゆえにアリスは何度もちっぽけな自分自身を思い知らされたという。

「何度も嫌おうとしたけど、できなかったわ。どれだけ落ち込んだか分からない。でも、それだけ母の事を尊敬していたし、好きだったから。」

……どうしたの。変な顔して。そんなにおかしい？」

「ああいや、……少しな、意外だった」

そんな風に、アリスが誰かにあこがれているなんて、考えてもいなかったから。魔理沙が素直にそう口にする、アリスは不満げに頬を膨らませた。

「私だって、いろいろ思うところがあるのよ、あなたには。……正直に言えばね、あの時あなたに二回も負かされて、悔しくて、恨めしくて……本気で、殺してやりたいと思ってたの」

「……おいおい、冗談きついな」

「恨んだのは確かだもの。自分が人間だって知って、ママが本当のママじゃないって分かって。それでも姉さん達に負けないように一生懸命魔法の勉強をして——立派な魔法使いになれたと思っただけな矢先よ？ いきなり魔界の外から、どこかの馬の骨だかわからない怪しい魔女が乗り込んできて大暴れしてるっていうんだもの。それで、黙ってられないって自信満々で挑んだら信じられないくらいに完封、ボロ負けよ？ 少しくらい文句も言いたくなるわ」

くすりと微笑みながら、アリスに言われて。魔理沙も言葉に詰まる。

「どんなに強力な魔法も、どんなに凶暴な魔界の魔物をけしかけても、全然通じないし。データもいい所だったじゃない。本当、どうなったの？ アレ」

「あー……。まあ、昔の事だからな。忘れたけど」

ごによごによ言葉が濁し、魔理沙は顔をそっぽに向ける。

アリスが魔界の書庫から持ち出した禁書クリムソナルをもつてしても、当時の魔理沙にはまるで相手

にならなかったのは事実だが——あの時の魔理沙は、半分いかさまをしていたようなものだったのだ。そのまま事実を言うには心苦しい。

「それで——異変が落ち着いてね。魔法使いになるために留学させて貰うことにしたのよ。魔界はとっても居心地が良かったけど、私が欲しいものを手に入れるのは、やっぱり自分一人の力でやってみたかった。……たぶん、我儘ね。反抗期らしい反抗期もなかったし、今になって、っと思うけどね」

お湯の中で膝を抱えて、アリスは深く吐息。

「それで、苦勞してこっちにやって来てみたら」

アリスはじろりと、据わった目で魔理沙を見る。

「どういう訳だか知らないけど、私を指先一つで吹っ飛ばした子は、こんな具合に腑抜けてるし。その上、私の事をロクに覚えてもいなかったのよね」

「はははは……」

もはや笑うしかない魔理沙。もう一度深く吐息をしたアリスは、ゆっくりと湯船の中で背伸びをして、最後にそんな理由よ、と付け加えた。

「……そろそろのぼせそうね」

「先にながたっていいぜ。もう少し残る」

「……そう?」

赤い顔をタオルで拭い、魔理沙はのんびりと答える。それじゃあお先にと立ち上がるアリスに、湯桶の中のポーン01も手を振って、湯船から上がるアリスを見送った。

「……………」

彼女の姿が脱衣所の向こうに消えたのを確認して、さらに百を数え。魔理沙は湯船から出、浴槽の縁に腰かける。少し長湯をしすぎたか、頭がくらくらした。

泉温は高く、湯量も豊富なためあまり長風呂をしていられるような温度ではない。我慢比べでもなければ無理に浸かっている方が身体を害するだろう。たとえば――脚湯のような楽しみ方のほうが恐らく向いている。

冷水に濡れたタオルを絞り、顔を拭い――魔理沙は茹だった顔の熱を振り払う。
温まりすぎて高鳴る鼓動が、耳奥でうるさいほどに鳴っていた。

「――なあ、アリス」

あの時。決して魔理沙は彼女の事を覚えていなかったのではない。

幻想郷から春の消え失せたあの異変の中。終わらない雪の中で再び見えた彼女^{アリス}の姿は、魔理沙の記憶にある幼い少女^{アリス}のそれとはまるで違うものだったから。

魔理沙には、それが誰なのか、本当に分からなかったのだ。

魔界での異変から、春雪異変での再会まで、約1年。

「たったあれだけの時間で、お前はいったい何歳、歳をとったんだ？」

答えない問いは、湯気と水音の中に空しく消えていくばかりだった。

【四】 忌み嫌われた弾幕（前）

君はこの扉を開けてもよいし、開けなくてもよい。

開ける——14へ

開けない——EDへ

Spell Card Bonus 「箱庭型シナリオ」



幻想郷は東北東、妖怪の山の麓。

人払いの結界が張り巡らされた昼なお暗き森の奥には、まるでそこにだけ地面が存在するのを忘れてしまったような巨大な風穴がある。剥き出しの岩のあちこちにへばりついた苔は、何十年という時間をかけて少しずつこの大穴を侵食していたが、それでも対岸まで五〇メートル近い黒洞を埋め尽くすにはとても足りない。

藁と藪に遮られた大穴には滅多に日が差し込む事もなく、数十秒も潜ればたちまち光源の失せる孔の内側の岩棚には、湿った空気と澱んだ埃がびっしりと積もり、黒々と闇を蟠らせていた。

動くものと言えば岩肌に棲み付く陰気な妖精くらいのもの。少し鼻の利く獣であれば、結界などなくともここに近づこうともしない。多くの者たちがその存在すら忘れ、それ以外のものもそのヤバを悟って忘れたふりをしている、幻想郷でも指折りの危険地域。

そんな大穴の中に進んで飛び込むのは、やはり多少なりとも気の触れた連中である。

「……いつまで続くんか、この穴」

姿勢制御だけを残して箒の浮力を全て切り、重力に身を任せた自然落下。寒さ対策に着込ん

だ外套が足元からの風圧にはためき、頭からすつ飛んで行きそうになる帽子を押さえて魔理沙はぼやく。隣で追隨するポーン01も、姿勢を崩してはくると宙返りを繰り返していた。

近づいてくる地霊を、広げて配置した人形のレーザーで薙ぎ払い、魔法の矢で撃ち落とす。

大穴の中へと身を躍らせてはや半刻あまり。地底へと繋がる縦孔は、いまだに途切れる気配もなく続いていた。

ときおり、気圧差で押し出される生ぬるい空気の塊がひゅーと吹き抜け、箒の穂が気流を掴み損ねてがくんと揺れる。弾幕ごっこで鍛えた三半規管もそろそろ音をあげそうで、いい加減落ちるのは飽きたとばかり、胃の中身が喉までせり上がってくる。

喉奥の熱い塊を無理やり飲み込んで、魔理沙はうええと顔をしかめた。

延々と続く代わり映えのしない光景が、次第に速度を麻痺させてくる。湿った風の反響は巨大な生物の吐息に聞こえ、魔理沙は鼻先に皺を寄せて笑った。

「なんだか喰われちまいそんな気分だな」

文字通りの人跡未踏の地の底、同じ妖怪からも忌み嫌われた悪鬼どもの住処に挑もうと言うのだ。途方もないばかりものの口の中へ潜り込んでいるのではないかという想像は、さほど外れたものではないかもしれない。

さざ、と通信役の人形が声を上げた。

『馬鹿なこと言っていないで。何があるのか分からないのよ』

「地下迷宮ならあんのくらの妖怪は棲み付いてるもんだろ」
地上からのアリスの通信に答えて、魔理沙は肩をすくめた。

縦孔の中で、既に魔理沙は地底の妖怪と接触している。

最初が釣瓶落とし、次が土蜘蛛。地上に近い場所に棲んでいるだけあって、侵入者への対応は慣れたものだ。人跡未踏とされている地底の入り口だが、誰も侵入り込んだことが無いというわけではないらしい。

二匹とも数回の交戦で、魔理沙が本気を出すまでもなくあっさりスペルカードを引つ込め、撤退したところを見ると、今回の異変にはさほど関係はないのだろう。

ごう、と風が揺れる。地下から吹き上がる気流に、洞窟の壁にこびりついた苔と砂が舞いあがり、視界を塞ぐ。

目に入った砂に顔をしかめた魔理沙は、そのまま何度かくしゃみをした。わずかに赤くなつた鼻を袖で拭い、眉をよじる、

「どうも埃っぽくてかなわんな」

『やめてよ、病気なんて』

相手をした妖怪の一方、土蜘蛛は病毒を操る事に長けている。弾幕ではさほど効果のある力を出さないようだったが、スペルカードに紛れこませてそうした種類の妨害をしてくる事は考えられる——というのが、アリスの推測だ。魔理沙やアリスのしようとしていることは、地底

に緊張をもたらすことに間違いなく、それを嫌がる妖怪達が真つ当ではない手段で妨害を仕掛けてくる事はある話だった。

「一応対策はしてあるぜ。気休め程度だけだな」

答え、魔理沙は外套の上からぽんぽんと腹をさすってみせる。

毒や病気に抵抗力を高める薬草と茸、数十種を煮詰め、発酵させた特性の解毒丹。事前に服用しておくことで、血の中に抗生物質を流し込んでおくのと同じような効果を持つ。

霧雨魔法店の数少ない商品の一つであり、副作用と効能が強烈過ぎて作成者以外には服用は勧められず、ほとんど売れることはないままに棚で埃を被っている一品だ。

もともと魔理沙は瘴気溢れる魔法の森に日常的に出入りしている娘であり、この類の毒への耐性・対応能力は並み外れて高い。……人間にしては、という注釈は付くだろうが。

逆に言えば、事前に対策のできないような剣呑な病毒を撒かれてしまえば、どのみちお手上げだった。気に病んでもしょうがないぜと答えた魔理沙に、アリスも諦めたように話題を切り替える。

『人形はちゃんと動いてる?』

「ああ、順調だぜ。見えてるだろ?」

応えるように人形達——ポーン01から06までが武器を掲げ、氣勢を吐く。

人形を介した通信は、地下数百メートルを隔てても問題なくリアルタイムでアリスと魔理沙

を結んでいる。地底で遭遇するトラブルや異変に備え、アリスは万全の態勢でバックアップを試みる手筈だ。

現在、魔理沙が使役している人形の数⁰¹は6体に増えている。指揮役のポーン^{ダイアゴナル}を挟んで広がる5束の魔力糸を周囲に展開、人形達は魔理沙の指手に従い定跡どおりに斜めに配置され、魔理沙を囲むように陣を組んで索敵と周囲への警戒を間断なく続けている。

最初はぎこちなかった複数の魔力糸の操作も滑らかになり、人形同士の連携も従前とは比べ物にならないほど向上していた。アリスの人形達の出来栄えはつい素人であることを忘れそうになるほどで、魔理沙は内心舌を巻いている。

『分かったわ。でも、横着しないでちゃんとチェックしておいてね』

「へいへい。もう耳タコだぜ」

『それでもよ。瘴気の濃度も上がってきてるわ。地霊の憑依汚染が起きないように十分な防護はしてあるけど、常に十全の機能を発揮するかは確認しなきゃダメ。制御系が乗っ取られたら後から撃たれる羽目になるのよ？ マーカーに異常があったらその人形はすぐに破棄してね』

大穴へのダイブ以前、地上での打ち合わせの時から何度も繰り返されたやりとりだ。少々病的——もとい、慎重すぎるとも言えるアリスの主張だが、今回ばかりは魔理沙も専門家の意見を優先せざるを得ない。事前に頭に焼きつくくらい暗記した定跡集を思い起こし、人形達の動作を確認、簡易チェック項目を埋めてゆく。

もしパチュリーやにとりがこの通信を聞いていたら、口を揃えて言うだろう。

そんな誤動作を起こす可能性のある人形達を連れ、未踏の地底に行くなんて自殺行為だと。

「……………」

それでも3人の中で敢えてアリスの支援を選んだ理由は、魔理沙の中ではつきりとしている。アリスが保障すると断言するなら、確実だからだ。人形が誤動作するかもしれない確率はゼロではないだろう。だがアリスがその危険を危惧しているのなら、そもそもあの場で魔理沙に支援体制を選ばせるような事などしない。

その程度には、魔理沙はアリスの腕前を——いや、その性格を信用している。だが、それはいま口に出す事ではないだろう。普通の魔法使い、霧雨魔理沙のささやかな矜持だ。

『そう言えば』

弾幕戦の話題になってアリスがふと思い出したように言う。

『魔理沙、スペルの話だけど』

「ん？ 私が弾幕で苦戦するとかあり得ないぜ？」

そう嘯く魔理沙に、人形が硬直し、通信が一瞬沈黙する。アリスが向こうで頭を抱えたか何かして溜息をついたのだろう。音声はなにも拾わなかったが、仕草ははつきりと想像できた。

『もっと手強い相手が出てきた時の話よ』

地底は未知の環境だ。そこに住んでいる連中の事は、まったくと言っていいほどに情報が無

い。スキマ妖怪は何がしか知っているような様子だったが、取引を試みたところでどうせいつものあやふやな物言いであり切り切られるのが目に見えているため、積極的に交渉は持っていない。せめて棲み付いている妖怪達の傾向でもわかればとアリスは愚痴っていたが、魔理沙は別段いつも通りだと取り合わなかった。

『分かってると思うけど。緊急回避に魔砲なんて撃とうと思わないでね。射線が少しでもずれたら確実に生き埋めなんだから』

「まあそうだろうなあ」

改めて魔理沙は、風穴の周囲に視線を巡らせる。ヒカリダケのランプに照らし出される視界は、おおよそ直径四〇メートル強。

狭い——弾幕こっくに興じるには十分なスペースだが、それでも決して広いとは言えない縦孔を見渡して、魔理沙は苦笑する。マスタースパークの射程は直線距離でおおよそ五〇〇m、十分な貫通力を保っている範囲でも三〇〇mを越える。逃げ場のないここであら、強力な切り札になりえるだろう。砲撃の角度さえ間違えなければ。

『スペルカード、今回何枚用意してるの？』

「おいおい、乙女の秘密をそうそう簡単に訊くもんじゃないぜ」

『……いいから、はぐらかさないで真面目に答えて。今回はパートナーなんだから』

軽口を叩いてみせるが、アリスは気分を害したようだった。通信越しの音声は語調を強める。

「どうやら、アリスも感づいているらしい。」

「分かった分かった」

降参だぜ、と肩をすくめ、魔理沙は人形の耳に顔を寄せた。真剣な表情で内緒話でもするよううに声を潜める。

「……実を言うとな、持ってきてない」

『はアあ!』

珍しくアリスが声を裏返らせる。きいん、と人形が甲高いハウリング音を響かせた。

咄嗟に耳を塞ぎかける魔理沙だが、タイミング悪く脚元から強い風が吹き付ける。両手は乱れた気流の中を下降する箒の操作に手一杯になったため音量調整もできず、耳奥できんきんと反響する高音に眉をしかめ、魔理沙はぼやいた。

「馬鹿でかい声出すなよ」

『そんなこと言ってる場合!』

通信担当を務めるポーン02が抗議を訴えるように激しく手足をばたつかせた。事実上の指揮権は魔理沙にある筈だが、内部に仕込まれた通信珠とやらの影響だろうか。

アリスは努めて冷静な声を保とうとしているようだった。一語一語を区切るように、人形が魔理沙の前に詰め寄ってくる。

『……ちよっと待って。どうということ、魔理沙。説明して!』

「だから、持ってきてないぜ」

『……………っ！』

テーブルに突っ伏したアリスの声なき呻きが、呪詛混じりの文句になって通信を揺らした。正確に言えば。ヒヒロカネ製のミニ八卦炉はいまも魔理沙の懷にきちんとあつて、懷炉のように吹き付ける外気から魔理沙に暖を与えている。

だが、魔砲を撃つために必須な『弾丸』、高純度連鎖燐核発生体の丹薬は、現在魔理沙の手元には存在してない。当然ながら、スペルカードも用意していなかった。

「と言うわけで撃ちたくても撃てないってわけだ。安心したか？」

『するわけないでしょうがっ！』

「うお!? やめるアリスっ、危ない、危ないってのに!」

アリスの激昂を表すように、人形が肩を怒らせる。飛びついて来たポーン02はまるっこい腕でぽかぽかと魔理沙の頭を叩いた。中身の大半は綿と粘土を焼いた陶器なので、そこまで痛いことはないが、容赦なく額に降り注ぐ人形の抗議に、魔理沙は箒の操作を誤りそうになる。

未だに底の見えない縦孔の中で。箒から落ちればそのまま真つ逆さま。空の上はいつもの事とはいえ、さすがに背中が冷える。

『何が危ないよ適当なこと言わないで! ねえ、あなた正気なの!! 何をどうしたらそんな馬鹿げた判断できるわけっ!?』

「だーっ！ 分かったから離れる！」

顔に張り付いて来ようとする人形を無理やり引っぺがし、その襟首を掴んで魔理沙はぜえぜえと肩を上下させる。通信の向こうのアリスの焦躁を示すかのように、ポーン02も律儀に息を荒げる仕草をしていた。

『……………』

「……………」

しばしのにらみ合いと、沈黙。なおも垂直に降下する箒の上、じつと対峙する二人の魔法使いは、やがて同時に大きく息を吐いた

とりあえず、表向きだけでも先に落ち着きを取り戻したのは、アリスの方だった。

『…………もう一度、確認するけど。冗談でも嘘でもないのよね？』

「ああ。嘘ならもうちつと愉快的な嘘を吐くぜ」

今回の探索は未知の領域である地底の探索であり、地底の妖怪達がきちんとスペルカードに則った命名決闘法に応じてくるのかは不確定要素である。幻想郷では常識として罷り通っている決まり事だが、地底に隠れ潜む妖怪達が、地上の取り決めなど知った事かと無視して襲ってくる可能性は十分にあり得ることだった。

そこまで極端な事はなくとも、たとえばデッキの構成や制限コストを無視して、禁じ手の攻略不能スペルを繰り出してくる可能性だってある。そんな時、対抗手段として魔理沙の高火力

スperlは非常に有用だ。

先程の遭遇を見る限りでは余計な憂慮とも思えるが、九分九厘確実なことだとしても、実戦ではどうなるかは分からない。そのためには常に万全の準備を備えておかねばならない。それがアリスの主張である。

アリスの感覚では、恋符^{あのスperl}はたとえ不要であろうと、他のスperlを犠牲にしても必ずデッキの中に準備していなければならぬものだ。実際に使わなくとも構わない。手札の中にその符があると言うだけで、戦術は大幅に広がるはずなのだ。

しかし魔理沙はわざわざその手を捨てたという。それがアリスには信じられない。

『……理由、聞いてもいいかしら。納得できるとは思えないけど』

「心境の変化だな。詳しくは乙女の企業秘密だぜ」

『……………呆れた』

心底呆れたと、分かるほどの深い吐息が聞こえてくる。魔理沙は軽く帽子のつばを引き下げ、努めて軽く答えた。



「……………やれやれ、面倒な相手だったぜ」

すっかり心許なくなつた残弾を確認し、魔理沙はぼやく。地底攻略に当たつて用意した瓶詰め星型弾薬の半分近くが、雪の旧都での鬼との交戦で失われていた。

煤けた顔をぬぐいながら、隣でポーン01がまったくばかりに頷く。

星熊勇儀と名乗つた彼女は、アリスの言葉通り最後まで悠然と遊んでいたようだった。

朱塗りの盃になみなみと汲んだ酒を煽り、雪に煙る旧都の街並みにがらがらと雷鳴をとどろかせて宙を駆ける。足の一踏みで分厚い岩盤ごと地面をぶち割り、拳の一振りですぐに四階建ての朱礼門をひっくり返すその姿は、魔理沙が良く知っている鬼とそっくりの荒ぶり方。

出くわしたてから延々と、地底一の歓楽街を端から端まで駆け回り、魔理沙が道中ずつと張り付いて撃ち込み続けた魔法の矢を雨霞と浴びながら、なおケロリとした顔でスペルカード戦を挑んできた彼女は、なるほど確かに地上では持て余されること間違いないの妖怪だろう。幻想郷における魔理沙の弾幕ごっここの経験はちよつとしたもので、対戦回数なら五本の指に入ると自負している。その中のどれを振り返っても、彼女よりタフな妖怪はちよつと見たことがない。

千を超える弾幕の着弾を延々と浴び続けてなお平然とした顔をしていたその姿に、魔理沙も鬼の評価を改めざるを得ない。最初に知り合つた鬼が神社で居候を決め込んでいるものだからつい忘れがちになるが、彼等がかつて妖怪の山を圧倒的な力で支配していた、幻想郷でも並び立つものの少ない強力な妖怪なのである。

とは言え、本気を出せば旧都とかいうあの街を壊滅させるくらいのはしてのけるであらう彼女は、魔理沙を興味深い遊び相手としてしか認識していないようだった。少なくとも今回の異変の中心人物ではないということになる。

「山を追われた恨みとかは、割とありそうな線だったんだがな」
外れた予想に腕組みをして、魔理沙は独りごちる。

鬼がそれを嘆き憤るような種族ならば、今の妖怪の山はとくに疎密を操る酔鬼に比喻でもなんでもなく根こそぎひっくり返されているだろう。かくいう勇儀も萃香とは旧知の間柄らしく、久方の再会を望んでいるようだった。

——で、あるならば。この異変の犯人はいったい誰なのか。

「ま、次に行きやわかることか」

振り出しに戻った探索行だが、同時に強力な手掛かりもある。

勇儀の話によれば、地底の事に何よりも詳しい者が、旧都の先に住んでいるらしい。無事鬼との対戦を切りぬけた魔理沙は、一路その首謀者の住まい——地霊殿を目指していた。

廢墟となつて打ち捨てられた旧都の街並みを離れるにつれ、ちらつく雪は次第に弱まり、賑わう燐火の灯りも背後に小さくなって、辺りには濃い闇が満ちてゆく。

魔理沙は一旦閉じていた腰のランタンの窓を開けた。筒状の苗床に増殖した発光茸の灯りが周囲に青白い輝きを生む。しかし風穴に比べても遥かに広大な地底の大空洞の暗闇の中では、

かなりの光量を保っていたはずのランタンの灯りもいささか心許ない。

濃い闇に取り囲まれて自然、箒の速度が鈍る中、ポーン01がひよいと魔理沙の前に飛び出した。弱気になった主人を先導するように、勇ましく武器を構えて速度を上げようとする。

「……あー、わかったわかった」

魔理沙は肩を竦め、ポーン01に従った。慎重に進行方向を見極め、洞窟の奥へと箒の速度を上げる。

冷たい風に煽られながら四半時も飛んだだろうか。やがて進行方向に見えた小さな輝きが、次第におぼろげな輪郭を伴って姿を見せる。

荒野のように荒れ果てた洞窟の中、突如出現したのは色褪せた木々の生える庭。あまり手入れが良くないようで、噴水の水は藻に濁り、東屋のペンキはあちこち剥げ落ちて、駆られていない芝生には枯れた落ち葉が積もっている。伸び放題の垣根は棘だらけの茨に囲まれ、そこここに赤と青の花を咲かせていた。

旧都とはうって変わって西洋式の庭——どことなく紅魔館を想像してしまうのは、魔理沙の良く知っている洋館があそこだからだろう。正門らしき場所も見えたが、そこに午後の居眠りを決め込んでいる門番の姿は当然のように見当たらず、庭の向こうには大きな邸が見えてくる。窓の中にはぼつりぼつりと、薄赤い照明が灯っていた。ひとまず、まるつきり無人の館というわけではないらしい。

「……鬼が嘘を吐かないってのは本当らしいぜ」

勇儀の話によれば、この地霊殿の主であれば温泉と地霊の異変についても知っているだろうという。いよいよ事態の中心部に飛び込んだ手ごたえを感じ、魔理沙はぺしぺしと頬を叩いて気を引き締めた。あたりを漂っていた灯魂を叩き落とし、邸の周辺をゆっくりと旋回して、侵入できそうな経路を物色する。

「いよいよラスボスのお出ましか。どんな奴がいるんだろうな」

『……………』

「おい、アリス？」

『……、……………』

繰り返すが、返答はなかった。

先程のスペルカードの件で機嫌でも損ねたかと訝しみ、魔理沙は通信の帯域を変更して再度、地上のアリスに呼び掛けた。しかし変わらず応答はなく、通信担当の人形は沈黙を守るばかり。

ポーン01と顔を見合わせ、その顔の前に手を翳し、ひらひらと振ってみるが、ガラス球のように澄んだ瞳は、何の反応も返そうとしなかった。

「ふむ。……電波の調子が良くないのか？」

受信位置が悪いのかと箒を蛇行させ、高度をとったり低空で飛んだりもしてみるが、通信は途切れたまま、アリスの声は一向に聞こえてこなかった。別の人形にアンテナを広げさせ、受

信帯域を確認したり、軽く叩いてみたりもしたが、返ってくるのはノイズばかり。

地上でのテストの時はあれだけの悪条件にも耐えたはずの通信が、完全に遮断されてしまっているようだった。ポーン01がお手上げたたとばかりに首を振る。

「しょうがないな」

通信珠が伝えるかすかなノイズにしばし耳を傾け、魔理沙は肩をすくめた。幸いにして人形の操作には支障が無い。アリスの助言が得られないのはそれなりに面倒だが、そもそも普段は一人でやっていることだ。

「ま、なるようになるだろ。いくぜ相棒」

「任せろと胸を叩いて、ポーン01が速度を上げ、魔力糸を展開。7体の兵士人形を先行させて鎖^{ボンドチェイン}状陣を組んだ。連携を密に、定跡を選んでゆく。

随行する相棒の先導で、魔理沙は広大な敷地の周辺を巡る。

通信が回復するまでこの場で待機するという選択肢もないことはなかったが、魔理沙は積極的にそれを無視した。ぐるりと邸を半周して、結局最終的に魔理沙が選んだ侵入経路は――

「邪魔するぜ！」

正々堂々の正面突破。

挨拶もそこそこにドアにめがけて人形達のレーザーを集中させ、マジックミサイルをまとめてぶち込む。巨人でも出入りできそうな大きなドアを箒ごとの体当たりでぶち破ると、魔理沙

は邸の中へと身を躍らせる。

地霊殿の邸内は外部同様、洋風の作りだった。床は白黒の市松模様、ステンドグラスの彩りも鮮やかな、広大な空間。紅魔館にも似ているが、ここはそれよりもけれどひっそりとした静寂に満ちていた。

そのくせ、周囲には明らかに無数の気配が息を潜め、気配を殺して隠れているのがわかる。物陰からじつとこちら凝視しているような厭らしい視線を感じ、魔理沙は軽く背中を震わせた。「悪いが急ぎの用なんだ、入らせて貰うぜ！」

廊下の奥へ声を上げると、返事も待たずに箒を進ませる。突如の乱入者に反応して、邸内のあちこちから妖精や怨霊たちが湧いてくる。魔理沙は慌てず騒がず人形達を定跡通り前方へ展開、低速移動で箒を左右に振りながら、レーザーの照準を拡散させた。魔力糸の同期をとって滑らかに動いた人形達は隊伍を組み、戦^{バスターボーン}列となつて弾幕を展開。乱れ飛ぶ糸のように虹色の細光が怨霊を薙いでゆく。

——アリスとの通信が回復したのは、不吉に行く手を塞ぐ黒猫を追い払った時だった。びくんと跳ねた人形が、それまでの滑らかな動作を一転させて小刻みに震え始める。

『……沙……、魔理沙？』

「お、なんだ、どうしたアリス？」

『……交信が……強度……』

ノイズ混じりのひどい通信。魔理沙は雑音に眉をしかめながら人形の位置を操作し、アンテナを広げさせた。あまりもたもたしている余裕がないのは承知の上で、箒の速度を落として思い切り高度を上げ、交信帯域を確保する。

「もしもし、こちら霧雨魔法店。今日は雨か？」

『……やつと繋がった。どうしたの？ ずっと返事が無かったけど——』

「そりゃこっちの台詞だ。さっきからうんともすんとも言わなくなってたぜ？」

『……本当？ おかしいわね、接続出来ないような距離じゃない筈なんだけど——』

アリスの声にはありありと動揺が浮かんできた。彼女が冷静さを崩すとなると、よほど想定外の事態らしい。

『魔理沙、人形に異常はないかしら。指手コマンドの反応が甘いとか、戻り値が遅いとか変化はない？』

「いんや。大丈夫だ。特別問題はないぜ」

ありのままを報告したのだが、通信には少なからぬ間があった。まさかまた接続が切れたのかと魔理沙が疑問に思ったところで、やや苦いものを孕んだアリスの応答がある。

『……魔理沙』

「ん？」

アリスはどうやら、向こうで状況の確認をしているらしかった。不安定な通信帯域を圧縮した情報が目まぐるしく行き来する。

『ごめんなさい。私のミスかもしれないわ。思っていたより地底の瘴気が濃いみたい。人形の防護が間に合わなくなってるのかも。地霊の数も多くなってるみたいだし、通信不良はそのせい——だと思っ』

「そうなのか？ 今は繋がってるから大したことない気がするけどな」

答えながら、魔理沙は人形達を使って、行く手を阻む怨霊達を切りはらってゆく。

通信の向こうで、アリスがかぶりを振る気配があった。

『いいえ。たぶんこれは一時的なものよ。またいつ切れてもおかしくないわ。本当に人形に不調は無い？ 場合によっては一時撤退も——』

「いや、こいつらはすこぶる好調だぜ。このまま続行する」

『でも……!』

真剣な様子のアリスに、魔理沙も茶化すのはやめにして反論した。

「おいおい。慎重なのはいいが、不測の事態はいつだってある事だぜ？ はじめっから何もかもわかって進んでるわけじゃないんだ。今回は終わらない夜の時みたいになら何度もやり直せるって訳でもないんだしな」

それは、何度となく異変の解決に挑み、多くの妖怪を向こうに回して戦い抜いてきた霧雨魔理沙の、確かな経験に裏打ちされた言葉だった。博麗の巫女と共に無数の危機をくぐり抜け、機微を嗅ぎ分け、肌で感じてきた——弾幕における心理、精髓のようなもの。

異変に挑むに当たっては相手の能力が未知なことは当然であり、一度や二度のトラブルに引つかかるたびに諦めていては話にならないというのが魔理沙の持論である。

しかし、アリスは違う。彼女の戦い方は、まず相手を調べ抜き、不確定要素を極限まで排して、それに対する最善手を打つこと、それに尽きる。

勝てる手段が不明ならばまず様子見に回り、慎重すぎるくらい相手の手の内を読む事に集中する。その上で相手を見切れればよし。読み切れないと判断したならば、実力を見せないまま早々に投了する。

常に『次』を見据えて戦うアリスの戦種は、この場限りの勝負には決して有利ではない。事前に相手を熟知することで、頭脳ブレインの弾幕は最高の真価を発揮するのだ。

「第一今から戻って、もう一度ここまで来るまであちさんが大人しく待っててくれるのか？ 私にやそうは思えないぜ」

そうだそうだと、人形達がめいめいに武器を掲げ、抗議する。

『……………』

まだ不満そうではあったが、アリスは最終的に実働している魔理沙の判断を優先することにしたらしい。

『……わかったわ。交信の帯域を絞って、音声と会話だけ最優先で残すわ。処理密度を上げて、帯域を確保するにはそれが一番いいと思う』

「そうか」

『だから、チャンネルは現状を保持してできるだけこまめに連絡を入れて。こっちからあなたの様子はほとんど分からなくなるから』

「了解だぜ」

答えた魔理沙だが、既に彼女はその言葉を聞いてはいなかった。

もっと優先すべき事態が他にあったからだ。魔理沙は箒を強く握り締め、生返事のままじつと前を凝視する。

地霊殿——それが正式な名称であるのかどうかは知らないが、ともかく地底の住人たちにそう呼ばれるだっ広い屋敷は、魔理沙も良く知る吸血鬼の館に良く似ていて、けれどいくつか決定的な差異があった。

薄汚れていること。目に見える距離と実際に進む距離に齟齬が無いこと。侵入するなりナイフが飛んでくるようなことが無いこと。群れ騒ぐ妖精メイドのような人出がないこと。つまり、これはこの館に咲夜のような優秀な従僕がいなことを意味している。

で、あるならば。

床上に薄く埃を積もらせた廊下の向こうで、ぎいと大きな扉を押し開ける相手は、従者ではなく、本命の館の主であることに疑いはない。

「誰かしら？」

ぺたぺたと、緊張感のない足音でスリッパを引きずり現れたのは紫の髪をした少女。滅多に訪れもしない来客に、面倒臭そうに応じているといった気配がバリバリの、鬱陶しげな視線が魔理沙を見上げる。

歓迎されていないだろう事は予想できたが、魔理沙は少しばかり拍子抜けする。この小柄な少女はなんとも、ラストダンジョンの最奥にはいかにも相応しくない。

「人間……？ まさかね、こんな所まで来られる筈がない」

眠たげな少女の視線——その下、少女の胸元で、ぎろりと瞼が開く。彼女は胸に空いた三つ目の眼で、じろりと魔理沙をねめつける。

——古明地さと。り。

地霊殿の主はそう名乗った。



「——私には見える。心を読む第三の目があなたの心象を映し出す！ 戦いの心象——それにあなたは苦しめられるといいわ」

『魔理沙、気をつけて。そいつは人の心を読むわ！』

瘴気濃度が跳ね上がる中、ノイズ混じりのアリスの警句が弾幕戦開始の合図となった。

覺り妖怪の象徴たる胸元の第三眼が強烈な輝きを発し、魔理沙を襲う。輝きは糸を縫り合せるように収束してレーザーとなり、縦横無尽に虚空を旋回する。誰もが胸に潜ませる疾しい心を暴きだすスポットライト。ここが尋問の場たとばかりに、さとりは初手のスペルを宣言した。

——Evoker「Terrorize Sovereign」。
想起「テリブルスーヴニール」。

渦を巻くように踊り狂う閃光が煌めき、バラ撒かれる光弾粒弾の隙間から邸内を焼き焦がす。回避優先で人形達を背後に下がらせ、箒を斜め前に滑らせた魔理沙の胸元に、赤い印が点った。

「おっと！」

魔理沙は外套の胸に集中した赤い光点から逃れるように、箒の柄先を真下に蹴り飛ばした。がくと高度を落とした箒が、斜め前方に弧を描いて跳ね上がる。

レーザーはその輝きを増幅させる直前に、空間の塵にぶつかって像を結ぶ。魔理沙はその予告線を見て射角から離れ、座標をずらしたのだ。

最短距離で標的を貫くレーザーは、どんな高速弾よりも最速に放たれ、対象を撃ち抜く。——正確には、レーザーとは発射点と着弾点を火力線が結ぶ現象であり、他の弾幕と違って速度のある弾を「発射」するわけではない。たとえば妖怪の中で最速を誇る天狗でも「撃たれた」のを見てからでは回避できるような代物ではない。

白黒の魔女服を靡かせながら宙を疾走する魔理沙の背後で、収束した輝きが空間を焼き焦がした。十本近いレーザーが、たった今まで魔理沙のいた場所を貫き、床を焼き裂いて遥か後方の壁に突き刺さる。

同時に、照射の余波で生じた熱量が埃の舞う広大な空間を焦がし、胸の悪くなるような匂いを立ち込めさせた。

回避した、と安堵する間もなく、再び魔理沙の胸にレーザーの照射点がポイントされる。レーザーの旋回を逆に切り替え、回避パターンを作らせない念の入れようだ。さらにさとりは大小赤青の弾幕を交えながら、回避行動を阻害しつつ魔理沙にレーザーの収束点を集める。

これが初めての弾幕とは思えない、巧みな戦法だった。

「……心を読まれるつてのが、こんなに鬱陶しいもんだとはな！」

さとりがくすりと笑う。

そう、古明地さとりが地底に潜んでいた弾幕巧者なんかであるわけがない。彼女の武器は寛り妖怪の本質、相手の心を読む程度の能力だ。

弾幕ごっこは心理戦である。目の前の危機だけでなく相手の手札、耐久力、スペルのコストに配分、自分の状況にまで気を配りながら、数手、数十手先を読み切って戦うものだ。

今の魔理沙は、その全てを丸裸にされているのに等しい。

『――魔理沙っ！』

「悪い、お喋りは後だ！」

人形達の武装の中には盾がある。耐弾幕コーティングを施されたシールドであれば、レーザーでも数秒は遮る事ができるはずだった。そう助言しようとアリスが通信に割り込もうとする。しかし語気も荒く人形に怒鳴り、魔理沙は籌を繰る事に集中した。

もはや下手に考え込むのは悪手だと魔理沙は悟っていた。何千という実戦経験で身体に染み込ませた反射神経と、頭と使わない脊髄反射。無意識に身体を委ねる強引な回避方法で、魔理沙はさとのスperlに對抗しようとしたのだ。

「考えてる事が分かるってんなら、ややこしいこと考えても無駄だな！」

通信を遅延した理由は二つ。この状況で人形に割く注意力なんてまるで残らない。そして、地上にいるアリスの思考すら、さとりは人形を通じて読み込んでしまう。それを防ぐためだ。

「ッ」

極限状況での回避では、当然ながらわずかな油断すら隙になる。汗に滑る指先がわずかに籌の操作を誤り、避け損ねたレーザーが魔理沙のスカートを深々と裂いた。さらに次々と赤い予告線が少女の胸に灯る。

歯噛みする魔理沙を庇うように、人形達が即座に反転した。武装も放り出し、主人の身体を突き飛ばして直撃状態から回避させる。

それを見てさとりがわずかに表情を動かした。が、すぐにそれも消えうせ、いよいよ激しく

弾幕を打ちだす。

煌めく閃光が踊り乱れ収束する中、息のつまるような数十秒。

それを乗り切り、魔理沙は大きく息をついた。一枚目のスペルをクリア。意外そうな表情を見せるさとりは、不敵に笑って汗をぬぐう。

「表裏なく正直に生きてきて良かったぜ」

軽口と共に短く呪文を詠唱、ポケットに手を突っ込み、右手に握り込んだ丹菓を一包みぶち撒ける。魔力を流し込んで丹菓に着火すると、連続して弾ける碧の輝きが、鏝となつて迸った。

魔理沙の魔法の矢は、連射力とコストパフォーマンスを高める代わりに本来の追尾性を犠牲にしたものだ。有効打を加えるには慎重な位置取りと照準を要求されるものだったが、それは今更魔理沙に欠けているものではない。

魔理沙の反撃が立て続けにさとりに着弾。被弾の衝撃に眠そうな目がわずかに開く。

さとりは澱みない動きで次のスペルカードを抜いた。

が、

「——空白？」
ブランク

本来、符名とそれを示す絵が記されたカードには、何の絵柄も浮かんでいない。スペルを籠める前のまったくのブランクカード。「命名」決闘法において名前のないカードには当然意味もなく、効果も発揮しないし、罨を仕込んでいたとしても有効とはみなされない。

これはさとのミス——と思えた、刹那。

「さあ、これからが本番よ！ 眠りを覚ます恐怖の記憶で眠るがいい！」

さとりが高らかに宣言した。

切り出した空白、からっぽのスペルカードに鮮やかな絵柄が浮かび上がる。

— Evoke “The Kyoto Ball”
想起「春の京人形」。

『私のスペル!!』

「器用な事するもんだな！」

さとの周囲に、十を超える人形達が出現する。美しく着飾り、乱れ一つない黒髪をした優雅な京人形だ。艶やかな舞いを披露する京人形達は、魔理沙の周囲へと展開、早春の若葉を模した粒弾が乱れ飛ぶ。

忘れもしない。春雪異変の時にアリスが一度だけ披露した高難度スペルである。

さとの想起はまさにその再現だった。しかもアリスの使うそれとは微妙にタイミングや細部が異なる。単純な鏡映しというわけでもないらしい。人形の完全な操作まで再現できないのかもしれないし、あるいは魔理沙の記憶に基づくスペルというなら違って当然だろう。さとの放つ弾幕は、魔理沙の心に強く焼き付いた弾幕なのだ。

「ち」

魔理沙の判断は迅速だった。

帯域を絞って残っていた通信を強制遮断。地上との通信に使用していたなけなしの帯域を人形への操作へと振り分け、できた空きチャンネルから人形達へコマンド指手を流し込んだ。定跡通り密集陣形を取らせ、虹色のレーザーを広域に発振しながら弾幕の隙間へ強引に身体をねじ込んでゆく。

左翼のポーン03、04を前方に展開。斜ダイアゴナル陣の定跡を意識してばら撒かれた弾幕を切り拓く。二体の歩兵人形は、構えた盾と騎士槍で弾幕を弾き、主人の身を守って突破口を切り開いた。が。

さとのりの周囲を巡る京人形達は艶やかに身を翻し、03、04の突進を回避。反撃の弾幕を魔理沙の周囲に撃ち込んでくる。一瞬コマンドが遅れたポーン04が集中砲火を浴びて沈黙。

魔理沙は耐幕コーティングの剥がれたポーン04を手元に引き戻し、弾幕をぎりぎりのところで回避する。

「さあ、どこまでもつかしら？」

さとりがぐすりと笑みを見せた。右翼に空いた隙を見逃すことなく、京人形たちが攻撃を集中。弾幕が一気に密度を増す。

「っ……」

とつさに身を反らす魔理沙だが、想起されたアリスの弾幕は、魔理沙の手癖を嫌というほど見抜いていた。撃ち落とそうと範囲を広げた虹色のレーザーは容易く回避され、マジックミサイルの照準も絞らせない。いつしか魔理沙は人形達に取り囲まれ、孤立していたぞくり。

死覚となる右後方からの攻撃を辛うじてグレイズした魔理沙の背筋を寒気が走る。心の底を見通すさとの視線が、少女の心を丸裸にしてゆく。

戦い慣れているからこそ、目前に迫る危機を逃れようと、魔理沙の身体は反射的に動いていた。

魔理沙の手が素早くスカートへと伸びる。そこにあるのは八角形の呪物、切り札となる高火力スperlを使うためのミニ八卦炉だ。

だが、今のこれはただの空調装置。魔砲を撃つ役には立たない。

(まずった……！)

下手を打ったと思った時には、既に遅い。わずかな動作の遅れだが、弾幕に周囲を包囲された状態での動揺は、集中を乱すには十分すぎた。京人形達が優雅に舞い踊り、乱れ咲く新緑の弾幕が、堰を切って魔理沙を包み込む。

逃げ場のない人形達の連携に、魔理沙が被弾を覚悟したその時。

《情ケネーナ。コノ程度デギブアップカ？》

突如聞き覚えのない声が響いた。

同時、単純な固定照準を繰り返していた人形達のうち、ポーン⁰⁵、⁰⁶の2体が大きく武装を変更。それまで使っていた騎士槍を放棄し、抜剣して敵陣を迎撃する。

お手本のような前陣速攻。^{ベストポーン}鋭い踏みこみと見事な連携で、間近に迫っていた京人形達が次々撃墜されてゆく。

「うお!？」

驚く間もなく、魔理沙は首の後ろに繋いだ魔力糸を思い切り引っ張られた。慌てて箒にしがみつく魔法使いは引きずられるままに弾幕の包囲網から引き上げられる。それを行うのも、魔理沙の支配下にあつたはずの人形達だ。

ちりちりと首筋にむず痒さ。自分以外の意識が、貸し与えた脳の一部を乗っ取って、勝手に次々とコマンドを吐き散らす。

とん、と帽子の上に軽い感触。

何が起こしたのか分からずに呆然となる魔理沙の眼前に、上下さかさまになったポーン⁰¹の丸っこい顔がアップで映った。

《ドーシタ、マヌケナ顔シテ》

アリスのものでも、魔理沙のものでもない声で、口の悪い人形が檄を飛ばす。
魔理沙は目を丸くしていた。

「お前、喋れたのか？」

《当タリ前ダゼ》

ひょいと魔理沙の帽子から飛び降りたポーン01は、魔理沙の傍で胸を張ってみせた。突然の展開についていけず、呆然となる魔理沙の背中を、人形が強く叩く。

《ボヤボヤスナ、来ルゾ！》

言われるまま、魔理沙はほとんど意識せずに、前へ出た。同時にポーン01の指揮のもと、人形たちがさとの想起弾幕を迎撃してゆく。

魔力糸がこれまでにない輝きを明滅させていた。定跡にない指手を次々と組み替え、8体の兵士たちが複雑に戦場を走りまわる。一手のレーザーが二体の京人形を同時に照射し、回避行動を見据えての連携で次々と弾幕を押し戻した。

《雑魚ハ任セロ！》

「……こりや、頼もしい味方ができたもんだぜ」

人形達の援護を受け、帽子を押さえ、魔理沙は箒の尾を膨らませて一気にさとりへと迫った。至近距離で張り付き、星型弾薬を投げ付けるようにマジックミサイルを撃ち込んでゆく。狙いを過たず標的を穿つ魔法の鏃は、射手の腕のまま碧の軌跡を残して覚り妖怪に着弾する。

「く……！」

わずかに表情をゆがめたさとの弾幕が乱れる。

スレイブ・タイプ

奴隷型の弾幕使いへの定跡、主人への直接攻撃だ。さらに人形達も魔理沙に追隨した。至近距離からの虹色レーザーを集中させて撃ち込まれ、指揮を乱された京人形達は次々撃墜されてゆく。

さとりは表情を変え、次の一手を宣言した。

— Evoke “Straw Doll Kamikaze.”
— 想起「ストロールドールカミカゼ」。

空白のスペルカードに描かれた絵面が変わる。

さとりはどこからともなく想起した人形達を、広い空間に向けてばら撒いた。無造作なヒトガタを取らされた藁人形はぴたりと空間に張り付き、おぼろげな空洞の眼で一斉に魔理沙を見る。

直後、胸に撃ち込まれた五寸釘ビーコンのガイドラインに従って、魔理沙に狙いを定めた人形達は自ら魔力炉の内燃槽に着火。黄色の炎を引きながら、高速で宙を疾走する。

カミカゼ・アタック
自爆特攻。

簡素な藁の化身は内部には呪詛と爆薬をたっぷり仕込んだ人形爆弾。悲劇的な宿命を持った人形達の悲哀すらも、着弾の威力を高めるための触媒になるのだ。

作られてすぐに使い捨てられることの悲哀と、嘆きを叫びながら、人形達は魔理沙に狙いを

定めて特攻を繰り返す。

魔理沙の対応も素早かった。展開させていた兵士人形を即座に回収、割り込まれないように魔力系の回路に封鎖をかけ、回避に徹する。大きく左右に迂回する魔理沙のすぐ耳元を、高速で人形達を通り過ぎる。自爆薬人形の波状攻撃は、地霊殿を大きく揺るがし、なお止まらない。

《ヒデー抜イダナ。雑ナ人形ダカラッテ粗末ニシヤガッテ!》

立て続けの爆風にポーン01が憤る。

「……おまけに実体が無いってのがタチが悪いぜ!」

薬人形が標的を定めるには、その内部に標的との呪詛リンクを持つ触媒が必要になる。魔理沙も魔法使いのはしくれとして、爪や髪を他の魔法使いには奪われないように手入れには気を使っている。そうそう強力なリンクなど手に入らない筈なのだ。

が、想起ゆえに弾数制限などないのか、さとりは次々と人形を繰り出してくる。アリスのスペルの再現だとするなら、あの薬人形達に仕込まれた魔理沙本人との霊的な繋がりを持つ触媒も、そのまま再現されているのだろう。

標的座標を追尾しながら特攻を繰り返す人形達を相手に有効な反撃が見つからず、魔理沙はストロードールをギリギリまで引きつけてグレイズ。標的を反らされた人形達は背後に着弾、爆炎を撒き散らす。そうしてしばし、白黒魔法使いはじっと防戦に回っていたが――

「……………」

やがて魔理沙は小さな違和感を覚え、眉をしかめた。

何故だろう、さっきまでの京人形に比べて、やけにスペルの照準が甘い。

人形自体の特攻速度が速すぎて、五寸釘ビーコンによる追尾性能に追いついていない——それならば話は分かる。アリスがこのスペルを使いたがらないのは、標的との呪詛リンクをもつ触媒を十分に用意しきれないからだ。物質リンクの不十分な呪詛は、標的を狙いきれないどころか、術者本人にも跳ね返る。

だが、こちらの記憶を呼び起こして想起されているスペルなら、魔理沙が一番苦手とする間合いやタイミングで仕掛けられてきてしかるべきだった。事実、ひとつ前の想起はそれを可能にしていた。

だが、このスペルは違う。

（そういやトラウマつてくらいだから、もつと悪いのが他にあるはずなんだが、案外大したことはないな）

さとのりの想起が、魔理沙の苦手と思う意識の具現化だとするなら、手加減はあり得ないはずだった。

そしてさらに妙なことに、さとりもその状況を測りかねているらしい。動揺を抑えようと無表情を貫いているが、スペルの制御にわずかな動揺が見て取れる。

「……なんだか知らんが、チャンスだぜ！」

《行クゼ野郎ドモ!》

わずかずつ生じたずれが、ついにさとの弾幕のパターンを大きく乱す時がやってきた。展開する藁人形の布陣が崩れ、それまで弾幕が埋め尽くしていた空間に大きな空隙ができる。感情の薄い少女の瞳が、動揺に揺れたのを魔理沙は見逃さない。

相手の事情に頓着している暇はない。魔理沙は背中に退避させていた人形達への命令経路を解放し、一斉にコマンドを打ち込んだ。

覚えている布陣の中から最も有効な定跡を選び、人形達を配置させる。七色のレーザーが乱れ飛び、さとの身体を拘束してゆく。

さらに魔理沙は人形の一体を隊列から外し、魔力糸を大きく繰り出し、陽動を伴ってさとの懐深くに突出させた。ストロードールの対象はあくまで、内部に仕込まれた呪詛リンクで類似性を保った魔理沙本人。人形単体を止めるすべはない。

突出した人形が十分にさとりまで迫ったのを確認して魔力糸を切斬。遠隔操作に切り替わった人形は即座に覚り妖怪を捕捉。虹色レーザーで標的との距離を測りながら、まっすぐに敵陣を突破してゆく。さとりは動揺を見せながら自爆人形の数体をそちらへと振りむけるが——もう遅い。

その時点で魔理沙が魔力糸を切り離してから3カウントが経過。人形はあらかじめ仕込まれたコマンド通りに内部魔力炉を暴走・増幅させた。

——遠隔靈撃「リモートサクリファイス」。

人形がその内部に搭載した火薬を核に、魔力を介して爆発を引き起こす。

人形内部に仕込んだ火薬を用いた、破壊力重視の特殊靈撃だ。爆発の威力を類感させて靈撃の威力を上げ、同時に魔法の効きにくい相手を直接吹き飛ばす効果もある。

靈撃は狙いたがわず、まだ十分に余力を残していたさとのスペルを相殺させた。

人形を用いた打撃において銀メッキを施した武器を用いるなど、魔法の弾幕に物理的な火力を兼ね備えさせるのが、アリスのスペルの特徴だ。

単純に魔法の巧みさの優劣を競うことの多い魔法使いの弾幕戦において、魔法に対して強い抵抗性を持っている相手でも物理的な火力で有効打を与える事ができる、実に合理的で容赦のない戦闘スタンスだった。

「……よつと」

破損した人形を回収すると共に、腰のポーチから予備の人形を取り出し、魔力糸を結んで再展開のスタンバイ。スペルブレイクと共に吐き出された魔素を回収し、わずかながら回復の手立てに変える。

勢い付いた魔理沙は、力を使い果たした人形を回収しさとりの前に躍り出る。

「さあどうした、次はなんだ!？」

「……………」

さとりは頭を抑え、半ば気押されるように三枚目となるスペルを宣言した。

——Evoke “Return to Innocence”
想起「リターンイナニメトネス」。

次に浮かび上がった空白カードの絵面をにらみ、魔理沙は会心の笑みを浮かべた。

「……………」

意図せずして掴んだ覚り妖怪の攻略法だった。

深層心理の想起——つまり、心に根付いた心的外傷を掘り出すと称してはいたが、さとりは決して狙った通りの記憶を呼び起こせるわけではない。魔理沙本人すら意識していないような心の底のトラウマは、簡単には読めないのだ。

初手の「テリブルスーヴニール」は水面に石を放り込むようにして心を波立たせ、その奥に潜むトラウマを読みだすためのものだったのだろう——生憎と、完全に効果を發揮しているとは言い難い。

いまやさとの想起は、魔理沙が今一番強く印象に残っているスペルを読みだしているにすぎない。アリスの弾幕は数多く、扱う人形の戦種も千差万別。最も苦手なスペルで攻め続けら

れば、魔理沙もあっさりと敗北していただろう。

まして、アリスには人形を用いた魔法以外にも強力な魔法をいくつも覚えていた。手札にたくさんのおくり札を揃え、その上で余力を残す——「おくり札を切らない」ことで戦場をコントロールすることに長けているのだ。

さとりにはそれを真似することはできない。読み出せるのはあくまで、相手の記憶にある弾幕だけ。使うスペルが、魔理沙の記憶にあるものに限定されるのであれば、対応は十分に可能だった。

「そうと分かりや怖くないぜ」
デイトエンズ

防 御 中心の布陣から、攻 撃 へと定跡を転換。人形を広く左右に展開し、さとりをレーザーの交点へと捉える。

さとりも想起した人形を使って爆炎の弾幕を張り、それを遮ろうとするが——スペルカードを使う側が防戦に回っている時点で、もはや勝負はついたものと同じだ。

心を読むさとりの特殊能力自体は脅威だが、決して彼女本人は戦いに長けている訳ではない。想起を用いたスペルの再現も、厄介ではあれど致命的なものではない。なにしろこちらの心の中にある恐怖を読みだすのだから、駆け引きも読み合いもへったくれもない。ただ強力なスペルを連打してくるようなものだ。

心理の裏側を読み、弱点を的確に突いてくる戦術は、言い変えてしまえば単に必ず不意を打

てる程度のことではない。何百、何千という数の弾幕ごつこを経験し、異変解決を日常の生業としてきた魔理沙には、十分に対応可能なものであった。

「人形縛りじゃ、アリス本人には適わないよな」

首をすくめて爆風から身をかわし、吹き飛びそうになる帽子を慌てて押さえ込む。同時に撃ち出したマジックミサイルの斉射が、さとりの身体を直撃。

碧の鎧はスぺルブレイクの快音を響かせて、地霊殿の主を地面へと撃ち落とした。

《マダマダナ！》

撃破音の中、ポーン01と手を打ち鳴らし、魔理沙は勝利への確かな手ごたえに拳を握る。

「……………」

さとり自身が強力な妖怪であれば、弾幕ごつこの経験の有無も、慣れのハンデも、ものともせずに攻め込んでくる事もできただろうが——生憎と、覚り妖怪は、その忌み嫌われた出自と比例するほどに精強な妖怪ではないのだ。

魔理沙ほど多くの弾幕に触れている少女もそう多くはないはずだが、さとりの想起がもつばら、アリスの弾幕再現に集中している事も、地霊殿の主が弾幕戦に慣れていない事を露呈していた。

「痛……」

避けた服の胸元を押さえ、多少なりとも悔しさを滲ませて、さとりは両の目と、胸の第三眼で、じつと魔理沙を睨み付ける。

「そういうことね、……道理で、やけに読みにくいと思つたわ」

その視線が、魔理沙の傍らに浮かぶポーン 01 に向けられる。

ややあつて、さとりはふつと肩に張り詰めていた気を抜いた。強めていた視線を、元のよう
に眠たげな細目へと戻し、魔理沙に背中を向ける。

「行きなさい」

「お、いいのか？」

もう一戦くらいやるはめになるかと思つていたところに肩透かしを食らつて、魔理沙は多少
拍子抜けする。

「ええ。あなたの目的は私を倒す事ではないのでしょうか？」
鬱陶しげにつぶやき、さとりは中庭への道を指し示した。

【五】 忌み嫌われた弾幕（後）

目的のために手段を選ばないことは
意外と難しい。



「うぷつ……」

こうこうと吹き荒れる瘴気の向こうには、燃え盛る炎の熱波が迫っていた。

高い地霊密度に、動作不良を訴える人形達がエラーの羅列吐き出す。人形達のフィードバックが魔力糸を通じて魔理沙の首筋に痺れを走らせる。白黒の魔法使いは片目を閉じて額を押さえ、鈍い頭痛に首を振った。

業火を噴き上げてうねる炎の海から、火柱が吹き上がる。まるで炎の大蛇が鎌首をもたげたように襲い来るのを、盾を構えて陣形を組んだ人形で弾き、レーザーで吹き消し、時には自爆の爆風で吹き飛ばして。

魔理沙は業炎の中を進んでゆく。

「熱い、熱いぜ……熱くて死ぬぜー」

足元でうねる炎の輻射熱に、じっとしているだけでも体力が奪われてゆく。全身を覆う外套がなければ、肌が真っ黒に焼け焦けてしまってもおかしくない。

編み込んであるのは汚れや湿気を避ける初歩の初歩である基礎的な付与魔術であるが、それでもあるとないとは段違いだ。

《ドーシタ、モウ弱音カ》

ポーン 01 がくると魔理沙を振り返った。

「そんな事はないぜ？ いい汗かいた後には温泉が待ってるからな」

口調だけは虚勢を張る魔理沙が答えた直後、ごうと熱風が押し寄せてきた。

これまでとは桁外れの怨霊達が、密度をもって押し寄せ、人形達がかたかたと震えだす。

同時に通信珠が突如、声を発した。

『…理……魔理沙……！ 返事……！』

混線ではない。ざりざりとノイズを混じりながらの、ひどい通信状態だが、それは確かに地上との通話だった。

「ん？」

『魔理沙……話……異常……！ 早く……！』

「アリスか？」

通話の向こうでアリスは必死に何かを訴えている様子だったが——ほどなく声は途切れる。

「……何だったん——ぐえッ!？」

《ヨソ見シテル場合カ!》

思い切り首をひねられた魔理沙が、絞められた鶏みたいな声を上げる。

頭の上の人形たちがべしべしと魔理沙の帽子を叩き、警告を加えていた。その先には、ひと

きわ高く噴き上がる巨大な火柱。

「うお!!」

巻き起こった風は炎を巻いて吹き荒れる。魔理沙はミニ八卦炉の出力を全開にして冷気を放射し、辛うじてその隙間を潜り抜けた。

同時、ポーン01が立て続けに指手を進める。変形の突撃^{ファイアンケット}。横一列に戦列を組んだ8体

の人形達が、まるで一つの生命体のように巧みに宙を滑り、構えた騎士槍を一齐に繰り出す。ずがんと金属同士の擦れ合う激しい音の中――

《外シタゼ》

揺らめく炎の視界の先には――

歩兵槍に貫かれた猫車を構え、牙を覗かせる火車猫、火焰猫^{かえんびょうりん}の姿があつた。



黒い耳、長い尻尾、口元からは白い牙。道中、何度も遭遇しながらもずっと行く手を塞いできた火車の手から、壊れた猫車が落下し、眼下の火の海に飲み込まれてゆく。

「お姉さん、やるねえ!」

「……またお前かよ。さっき、止めて欲しい奴がいるみたいな事言つてたじゃないか」

「悪いねえ、こつちも色々事情があつてさ」

答える燐の顔色は悪い。これで魔理沙との対峙は4度目だ。彼女は既にかんりの被弾をしており、動きも精彩を欠いている。

それでもなお、燐はぎらぎらと双眸に光を漲らせていた。ついさつき、敗北を認めたのが嘘のようだ。そこまでしてなお立ち塞がる理由が分からず、魔理沙は困惑を隠せない。

「地獄の底で死ぬとみんな焼けて灰すら残らない。死体が欲しけりや、やっぱりあたいがお姉さんを仕留めないとね！」

謳うように言うと、頬の血をぬぐった指先をぺろりと舐め、燐は形相を鋭くした。

牙を剥き、獣の本性も露わに、両手を地について身体を低くする。スカートを跳ねるように高く上げた腰から、二本の黒い尻尾が逆立って天を指した。

「殺^{シヤ}——ッ！」

ぶるると身を震わせ、火車の吼え声が地底にこだまする。

その声に換気されるように、炎が舞った。

——妖怪「火焰の車輪」。

青輝と深紅、どちらが高温なのかも考えたくなくなるほどの炎が、入り乱れ混じり合い、次々

に吹き付ける。

死体を運ぶ火車は、妖怪の中でもトップクラスの危険度を持つ妖怪だ。その本性もあらわに、
 燐は魔理沙へと飛び掛かってくる。

耐火を施した外套がちりちりと焦げ始めた。炎の性質を弄ることで、単純な耐火炎能力を無視するのだ。死者の罪業をも焼き尽くす地獄の炎を借りたスペルだった。

「くっ」

獣性を滾らせ、燐は次々と鋭い視線と吼え声を叩きつけてくる。

妖気をそのまま形にしたような殺気は、少なからず魔理沙の動きを阻害した。押し寄せる熱波に数度、身体を煽られ、体力がみるみる削られてゆく。

「悪い、頼む！」

《任シトケ！》

人形が跳ねるように前へ出た。己のサイズも顧みず主人を庇わんとするように手足を広げ、炎に立ち向かう。到底遮蔽にはなりえない大きさだが、人形はそのまま内部の魔力炉を暴走させ、自らに自爆コマンドを決行。

爆風とレーザーが火炎を吹き消し、押し戻す。

霊撃が作りだしたわずかな数秒の遮蔽の中で、魔理沙は澱みなく燐のスペルを看破し、打開の一手を探る。

「つは、すごい、すごいねお姉さんっ！」

攻撃の手は一切緩めぬまま、燐が歓声を上げる。衰弱した身体は飛び跳ねるたびに血をこぼし、彼女の傷が浅くはないことを教えていた。このまま放置していれば、放つておいても時間切れで自滅するだろう。

それでもなお、燐は生命を燃やし、魔理沙の前に立ち塞がる。

「——わかったぜ、相手してやるっ！」

「そうこなくちゃね！」

燐は鋭く左右に跳ね、狙いを絞らせないようにしながら魔理沙へと襲いかかってきた。誘導弾が不得意の魔理沙が狙いを定めるには直接照準を合わせねばならず、燐の高速起動はそれを見越したうえでの回避動作だ。

魔理沙が攻撃を当てるには人形達を広く展開させて、レーザーの密度を薄めてでも広い弾幕に切り替えねばならない。燐もそれが被弾を減らす一番いい方法だと理解しているのだろう。

先日スペルカードを知ったとは思えない身のこなしだ。獣ゆえに、本能的に相手の苦手を探る事には長けているのかもしれない。

「殺^シ」

「ッッ！」

姿勢を低くした燐が、因縁をたっぷり乗せた咆哮を上げると、周囲には無数の怨霊の群れが呼び起こされる。火焰の中に現れた怨霊達は、破壊を撒き散らしながら一斉に魔理沙へと襲い

かかってきた。

自らの恨みを増幅された怨霊達は、繰り出した人形に掴みかかり、一斉にその中に潜り込もうとする。それまで形を持たず、ただただ怨念だけをたぎらせていた怨霊達は、自らの身体を手に入れるや否や、狂喜して自分の望みを実行しようとした。

すなわち、自殺。

魔力糸を通じて自衛コマンドを流し、呪詛汚染を防ぐための防壁を展開する魔理沙だが、8体いた人形のうち2体が手遅れとなった。

自責の念を過剰に増幅させられ、濃密な呪詛濃度に耐えきれずに動作を停止、主人の命令も無視して自分自身の自壊コマンドを実行する。自ら首を吊って破損する人形達の残骸を、魔理沙は辛うじて回収。しかし破損した人形達は自壊の呪詛汚染に蝕まれ、再稼働を試みるなりすぐに再び自刃しようとする。

「後ろ向きな死に方しやがって！」

幻想郷随一の人形師の手による、精巧なヒトガタだ。生前の怨念をそのまま再現するには最適だったのだろう。火車に死体を運ばれたものは、閻魔の裁判を通り越して地獄行きとなる。それゆえの怨念もひとしおなのだ。

《気ニスンナ！ 行ケ！》

「言われなくてもッ」

魔理沙は箒の上に立ちあがり、身を低くして炎の中を掻い潜る。精度重視の回避では間に合わない。気合いに物を言わせた高速移動で、波と押し寄せる赤と青の炎を避け、燐へ迫る。

左右にステップを切り跳ねる黒猫へ、魔理沙の弾幕が吸いこまれるように打ち込まれ、ワイヤーを延長して大きく繰り込んだ人形が、燐の鼻先に霊撃を叩き込んだ。

閃光が瞬き、轟音と共にスペルブレイクの撃破音が響き渡る。

「……あー……ここまでかあ……ごめんな、お空……」

少女が漏らした小さなつぶやきは、ごうごうとうねる地獄の炎の中に飲み込まれ、魔理沙の耳までは届かなかった。

爆発の中、がくりと少女の体が傾く。

道中も含めて四回もの間、延々と魔理沙の前に立ち塞がって、燐の身体はとつくにボロボロのはずだった。精根尽き果てた彼女の姿は黒猫のものへと変わり、そのままバランスを崩して、足元の炎の中へと降下してゆく。

「つて、おい!？」

既に燐は意識を失っているようだった。魔理沙は箒を翻し、燃え盛る火焰地獄すれすれまで高度を落として、燐を掴もうと手を伸ばす。

——が。

業火の中に飲み込まれんとした彼女を捕えたのは、魔理沙の手ではなく、風を切って飛来し

た大きな影だった。

「——よくも……」

ばさりと大きな翼を打ちならし、丸くなった火車猫の身体を胸に抱いて。

「お隣に、ひどいことしたな！」

長い黒髪をした彼女は、憎しみに満ちた目で魔理沙を見下ろした。



地底の屍喰キヤリオンクローウ鴉は、靈鳥路空れいうじうつほと名乗った。

(旧・灼熱地獄の管理人ってわけか……)

その腕に抱いた猫姿の隣をいたわるように、彼女は強い視線を魔理沙に向ける。もともと長身である上、大きな黒翼を包むマントが大きくはためいて、その姿はまさに威風堂々。王者の風格すら漂わせていた。

「強い力だ？」

「そうだ、究極の力。地上を全て溶かし尽くす最後のエネルギー」

空はうつとりと、自身に満ち溢れた仕草で翼を打ち鳴らした。ごう、と強烈な熱風があたりを吹き抜け、眼下に燃える火柱を揺らめかせる。その胸では赤々と輝く巨大な瞳が、炎のよう

に揺らめいていた。

既に無視しきれないほどの熱量を滾らせる空に、魔理沙はしっかりと視線を合わせる。

「私の究極の核エネルギーは全てを溶かし尽くす！ どうやって私を倒すつもり？」

空の胸に輝く赤い瞳が、爆発的に力を高めた。少女の右手に、虚空から出現した六枚のプレートが接続され、2 m近い砲身が出現する。

左足には砲台を支える大きなウェイト。指先にはコロナを纏う黒点を象徴した証印を掲げ、空はその身体にため込んだ力を解放した。

「……こいつは……」

喉がひりつくほどの緊張感が、魔理沙の胸を締め付ける。

人形に組み込まれた計測機器が、針を一気に跳ねさせる。どうやらこれまでの熱波は、本当にただの身じろぎのようなものであったらしい。

人形がかすかなノイズを挙げた。アリスとの通信は未だに回復していない。

「やれやれ、結局一人か。いつものことだけだな」

《オイオイ、頼モシイ味方ヲ忘レンナ！》

両手を挙げて抗議する人形たち。魔理沙は苦笑して、そうだなと頭上を振り仰いだ。鳴り響く警音音が決戦の合図となった。

——核熱「メガフレア」

空の弾幕はごく単純かつ、強力なものだった。獣の本能で被弾を避けようとしないう。精々旋回する程度の緩やかな軌道で、火球を次々と打ち放つ。燐とは対照的だった。

直径数十メートル、およそ数万度を超える火球が、轟音と共に撃ち放たれる。

弾幕の火力については一言あるつもりでいた魔理沙のそれを、遥かに上回る圧倒的な出力。無造作にばらまかれる火球の一つ一つが、十分に用意し練り上げた魔力で放つ溜め撃ちをゆうに数倍したものだ。

熱かい悩む神の火——

人と良く似た姿をしているが、あれはまさに大自然の、天変地異の力に他ならない。漲り燃え盛る神の焰——それが溢れだした垂迹なのだ。

《ボサットシテンナ、燃エチマウゾ！》

「お前も気をつけろ！」

人形に応え、魔理沙は火球の隙間を潜る様に箒を操る。

溶岩の上を跳ねた火球は、広い地底の天蓋を穿ち、爆音と共に蒸気を撒き散らした。

岩盤を塵にまで粉碎させ、蒸発すらさせる圧倒的な高熱——吹き荒ぶ炎と爆熱、岩柱と天蓋が溶け落ち、溶岩へと落下する。

（制御は大した事ないな——力押しか！）

出力任せに辺りを薙ぎ払う、単純だがそれだけ小細工の利かない弾幕。自分と似たようなものだ、パターン構築はそう難しくはない。

だが、その数が凄まじい。

「このっ」

魔理沙が大きく箒の先端を引き上げて急上昇、天蓋すれすれをくぐり抜けて空に向けて複雑な軌道を実つ切る。遠心力に負けぬようしがみ付いた魔理沙の足元をかすめて火球が天蓋を立て続けに穿つ。

崩れた天井が真っ赤に焼けた岩塊となって、空を直撃するが——彼女は背のマントを軽く打ち払うだけでそれをあつさりと蒸発させた。

もはや彼女の身体は放たれる火球よりも高熱のものとなっているらしい。

「うへえ……」

異変の中心にある者は同じように、巨大な力を振るうものだが——しかしそれは多く、信仰や宝具に依るものであったり、大きな儀式などに根差した力であることがほとんどだった。不老不死の月の民も、人を死に招く亡霊もその例に漏れず、力の源は己の他にあった。最強の幻想種である吸血鬼ですら紅い月の下での恩寵を受けていたのだ。

境界に潜む大妖怪、八雲紫とてそうだ。事象の境界自体を弄る彼女も、力そのものを持って

いるのではなく、概念を操作することで桁外れのエネルギーを呼び起こしているにすぎない。

だが、空は違う。まさに異変の根源とも言える地底の太陽は、彼女自身と同一なのだ。

空は大きく背中に広げた羽根を打ち下ろす。高熱を纏う空の翼は、羽ばたくだけで膨大な気圧差を生み、嵐を呼び起こした。

押し寄せる高熱の熱風。魔理沙は直撃の寸前に顔を伏せ、息を止める。迂闊に吸い込めばそのまま肺が焼けかねない。

「ぐっ……！」

それでも袖で覆った鼻と口が焼けるように熱い。叩きつけた風に打ち下ろされ、燃えたぎる灼熱地獄の炎のすれすれで踏み止まり、魔理沙は必死に高度を保ちなおした。

単純な力の総量において、空が今まで対峙したどんな相手よりも上回っていることを、魔理沙は認めざるを得なかった。

ごくごく単純な、力任せに繰り出されるスペルはどれもこれも荒削りではあるが、威力が桁外れ過ぎて隙がない。掠るところか至近まで近づくだけで被弾する太陽のかけらを、無造作にバラ撒くのだ。

「まさに力、パワー、ストレングス。最強の三要素か。恐れ入ったぜ」

《全部同ジジャーカ》

ポーン 01 が盾で赤熱した瓦礫を弾き飛ばしながら、律儀に突っ込む。

「しかし、だ。弹幕はパワーが信条の魔理沙さんが見たところ、そいつには欠点もあってな」
同じ戦種だからこそ分かる、物量で攻める弹幕の致命的な弱点。

エネルギー切れ、だ。

高火力・高出力の攻撃は長時間続ける事が極めて難しい。スペルカードとして強化・特化させてなお、その使用には制限が生じてしまう。そして当たり前の話ではあるが、回避不能な弹幕はそもそもスペルとして認められない。例外的に、天狗を追いつかう時などには使われる事もあるが――基本的には意図せずとも、どこかに避ける場所ができるものだ。

つまり、ひたすら避けていけばやがて相手は自滅する。

「問題は、それが人工太陽に通じるのかってところだが――」

思わず苦笑が漏れる。

「ぶっちゃけ今回は、それくらいしか頼るところはないな」

《タヨリネーナ》

人形の毒舌に苦笑しつつも、魔理沙は巨大な火球の隙間を潜り抜ける。莫大な熱量を持つ火球はその速度自体は遅く、間を抜ける事はさして難しくない。だがそれを妨げるように、高速で撒き散らされる小さな火球が飛来する。

巨大な火球で移動と回避の経路を塞ぎ、そこを高速弾で狙い撃つ――弹幕の基礎の一つだが、あの鴉が意図してそれをやっているようににはあまり見えなかった。どこか力に振り回されてい

るような、あるいはもう一つ、別の意志が弾幕を形作っているような。そんな感覚。

いまの空は意志ある太陽だ。魔理沙を睨むように視線を強め、制御棒をなお振り上げる。

「くらえ！」

（やば、つ）

危ない、と思う暇すら与えられなかった。閃光が瞬き、乱れ飛ぶ光球が魔理沙を襲う。肥大して重力すらもつ火球を回避しきれず、光球のひとつが魔理沙の脇腹に被弾。衝撃に肺の中心が絞り出され、手足がへし折られそうだ。

凄まじい熱量と痛みを意識を持つて行かれそうになりながら、ギリギリのところで踏みとどまる。

「ぐあ……ッ」

被弾1、……残機0。

たった一撃で気力の大半を削り落される猛烈な威力。あと2発耐えられるとは思えなかった。
《シャキットシャガレ！》

ポーン01が自動操作で繰り出した人形が霊撃を発動させ、追撃の巨大火球をどうにか押しとどめる。太陽の炎であつても、制御を離れて撃ち出されたものであれば一時的に相殺することは可能らしい。問題はこちらの霊力に限りがあるのに対し、相手方が無尽蔵であるということ。

「むう……っ」

魔理沙が撃墜されなかったことに、空は鼻に皺を寄せて顔を歪めた。羽虫を叩きつぶし損ねた不快そうな表情で、苛立ちのままに力を振るう。

「じゃあ、もつとでっかいので撃ち落とすっ」

——「地獄極楽メルトダウン」

ばさりとマントを翻し、空は眼を輝かせて制御棒を掲げる。

唸りを上げて青い燐光を走らせ、その内側に力を蓄えてゆく。そのエネルギーは僅か半秒で

魔理沙の マスタースパーク 恋 符 の最大瞬間出力を超え、5秒で総出力をあつまり凌駕した。その上さらに爆発的に膨れ上がった火球が、広大な灼熱地獄を照らし出す。

炎はもはや燃えるというよりも、輝くばかり。張り巡らせた障壁と、マントの下でフル稼働の コールドインフュエル 冷却 却 魔術すらも一瞬で消しつくさんばかりの、莫大なエネルギー。

「うあ!？」

しかも、それが二つ。

視界ほとんどを埋める巨大な火球は、信じられないことに宙空に固定され、そのまま安定し、暴虐的なまでの熱量を吐き出し始めた。

入念に準備を整え、星辰の巡りを待ち地脈の力を総動員して引き出せば、魔法でも一時的に

あの威力を生み出すことは不可能ではない。しかし、それを固定したまま維持するなど常軌を逸していた。

しかも空はそれを二つ同時に成し遂げているのだ。

「消し飛べーっ！」

挙句、空の顔にはまだ余裕すら見て取れる。太陽がその力を振るうのに、なんの苦労があるうか。歩くように、息をするように、熱と輝きを発するのだ。

巨大な二つの太陽に挟まれ、魔理沙はついに身動きすら取れなくなる。範囲外に逃れようとする魔理沙の周囲を、太陽から漏れ出した炎が上下左右前後構わずにとり囲んでゆく。

「こいつは、なんというか……」

乾いた唇を舐める。汗などもう出なかった。熱波に煽られる端から水分は蒸発し、手足が干からびてゆくような錯覚すら覚える。

事実、すでに指に力が入らなくなってきた。叩きつけられる熱は、もはや壁のように魔理沙を取り囲み、逃がさない。

（グリルの焼き魚はこんな気分なのかね。……今度からもう少し大事に食うとするか）

人形達があくあくと震え始める。警報を上げ続けるポーン01に、辛うじて薄れかけた意識が引き戻された。

そう言えば彼女達は内部に火薬を仕込まれている筈だと言うことに思い至り、魔理沙は慌て

て彼女達を外套の内側に引き寄せた。この状況でどちらかの太陽に飲み込まれたら確実に爆死だろうが、それでも誘爆の危険は少しでも低い方がいい。

（……どうする？　こりゃ割とマジでそんなにもたないぜ？　人形達を全部突っ込ませて霊撃を叩き込むか？）

それなら空にダメージを与えることはできるかもしれないが、スペルの火力を相殺できるかと言うと激しく疑問だ。しかも彼女はまだ余力を残している風がある。人形達の魔力を使いきった状態で、単身挑んで勝てるかという、果てしなく怪しい。

「耐えるしか、ないな」

《無理スンナ！》

「こんなの、霊夢のスペルに比べりや大したことないぜ」

言い聞かせるように――多分に空元気の混じった強がり、自分を鼓舞する。

こちらから有効打を撃ち込まずに、ひたすらに防御に回る――スペルカードの攻略法としてもっとも初歩であり、なによりも難度の高いもの。

魔理沙の苦手とする戦い方だが、今は贅沢を言っていられない。

地下に煌めく太陽の表面が剥がれおち、魔理沙の傍をかすめた。対熱加工を済ませていなかった懷のポーションが、沸騰して蓋を弾けさせた。噴き上がるガラス瓶を慌てて投げ捨て、魔理沙は手に浴びた熱湯に顔をしかめる。

「……………くそ、っ」

毒づいて、手のひらにこぼれた薬液を舐め取る。今なお蒸発する液体は、それでもわずかながら、魔理沙の喉を潤した。

箒を揺らし、高度を取り、狙いを散らすため穂を左右に振りながら、澱みなく四方に気を配る。目で捉えようとしてはならない。リズムを掴み、広く、より広く視点を持つ。五感を身体の外に広げ、戦場全体を捉える。

「これでもまだ避けるのか！」

空がさらに出力を上げた。

さらに膨らむ二つの太陽の、重なった縁。魔理沙はそのぎりぎりへと追い込まれてゆく。

揺れる視界の中で眩暈がし、吐き気がこみ上げる。これ以上水分を失う気にはなれずと、気持ちの悪い酸っぱさをむりやり喉奥に飲み込んで、ちかちかと瞬く視界を必死に見開く。箒の柄もいまにも発火しそうに焼け焦げ、手袋も燃えだしそうに熱い。手のひらから水分が絞り取られ、服の薄い部分を通り越して突きささる熱波が肌を焼いてゆく。

魔女の軟膏があるおかげで火傷には至っていないようだが、それでも容赦なく、叩きつけられる熱は魔理沙の体力を奪ってゆく。

しかし、気持ち切ることなく箒を操り続ける魔理沙の視線はむしろ鋭く、その小さな身体のうちには魔力が漲り始めていた。凄惨な表情を見せる少女の口元には、いつしか小さな笑み

すら覗く。

二つの太陽がさらに輝きを増した。直径は既に二〇〇mを超え、表面を舐める炎がフレアとなつて吹き上がる。二つの恒星が重力によって手を繋ぎ、その間に逃げ続ける魔理沙を押し潰さんばかりに接近する。

だが、なお魔理沙は心を折らない。

「……………」

唇を噛み、ぎりぎり歯を食いしばつてふらつきそうになる意識を保ちながら、荒い呼吸を胎の底に飲み込んで魔力を研ぎ澄ます。反撃の機会を見据え、じつと、地底の人工太陽を睨む。

長い長い対峙の果て、ついに音を上げたのは空だった。

軽快な破裂音と共に二つの太陽が突如として消失した。

膨大な熱量が瞬時に失われ、急激に冷却された虚空に暴風が吹き荒れる。炙られ続けた身体が急激に冷やされ、魔理沙の手足は疲労を叫び鉛のように重くなる。

「——は、っ、はあ、はあ……………」

息が荒い。空気が焼き付き、酸素を貪る喉が焼けるように熱い。瞼が腫れぼったく、視界が狭い。目が乾き、睨む空の姿が霞む。

際限なく膨らむ膨大な熱量に、魔法の防護の限界を超えて、少女の身体が悲鳴を上げる。

「ぐ……………」

空は焦っているようだった。

鳥頭の彼女とて、デッキの残りのスペルカードの枚数を見て、明らかに優位に立っているはずの自分が、いつの間にか追い込まれていることに気付いたのだろう。

これが命名決闘法。いかなるものにも、打開策と解決策を与える、幻想郷の決闘方法だ。「当たらないならッ」

すう、と空が背中を反らし、大きく胸を膨らませた。

特大の攻撃が来る——もう十分には開かない目を無理矢理見開いて、魔理沙は身構える。「全部飲み込んでやるッ！」

——「地底の人工太陽」

産まれたのは。星だった。

空の胸の目を中心に、溢れた輝きが地底の大空洞を飲みこんでゆく。

彼女はスペルカードを解除し、溢れた熱量全てを自分を中心に吸収したのだ。さっきまで二つに分かたれていた太陽の力を、ひとつに集合させ、さらに高める。

一度は地下全てを飲みこまればかりの勢いで膨れ上がった人工太陽は、しかしある一点で、その莫大なエネルギーに耐えかねて拡大を止めた。

膨らみ続ける出力に比例して拡大する自重が、太陽自身を押し潰し始める。

魔理沙はいつしか、その巨大な太陽を見つめているうちにそこに吸い込まれてゆく感覚を覚えていた。

それは錯覚や気のせいではない。まるで地面の下が、そこになってしまったかのように。魔理沙の身体は、人工太陽めがけて引きずり込まれ始めていた。

「うおおお!!」

膨らむ重力のままに風が吹き上げ、音が歪み、何もかもがそこに向けて引き寄せられていく。否、墜ちているのだ。

まさに、比類なき地底の人工太陽。サブタレイニアン・サン神の火が天井知らずにその出力を跳ねあげる。吹き荒れる太陽風と、重力が魔理沙に絡みつき、見えない腕で引き寄せる。

全力で距離を取ろうとする魔理沙だが、箒の速度を全開にしてもなおその引力は振りきれず、じりじりと火球との距離は縮まってゆく。

「……く、あ……」

太陽が身じろぎをするたびフレアがざわめき、旧灼熱地獄を吹き荒れる。その一撃一撃が、並みのラストスペルに匹敵する威力だ。磁力を伴ってうねる熱波は地下の大空洞を削り、分厚い岩盤すら溶かしてゆく。

輻射熱が髪を焼き、顔や手の剥き出しの肌がじりじりと焼かれる痛みを訴えた。瓶詰めにし

ていた残りわずかな残弾が、ポケットから滑り落ちて猛る炎に飲み込まれる。たちまちカラフルな爆発が閃き、それもすぐに太陽の表面に飲み込まれてゆく。

「つ……」

個人の弾幕ごっこに用いるには、あまりにも莫大な、無尽蔵のエネルギー。

帽子からはみ出した金髪の端がちりちりと焦げ始め、炙られるままに火を発した。慌ててそれを打ち払い、制御を失った筈がまたぐんと火球との高度を落とす。

フル稼働の冷却魔術すら文字通りの焼け石に水だ。ミニ八卦炉もはやオーバーヒート寸前、噴き出す冷気はストーブのよう。空の振るう底無し之力、果ての無い威力に、魔理沙の意識がふっと遠のく。

《ビビテンジャネーゾ！》

意識を失いかけた魔理沙の頬を、が強く張った。頬の内側に広がる血の味と痛みに我を取り戻し、魔理沙は唇をかみしめた。

人形達が盾を広げて遮蔽を作り出す。

ミスリル製の盾すら表面を炙られ、じりじりと高温になつてゐる。耐熱コーティングが悲鳴を上げて蒸発を始めていた。まだ融点の高いミスリルの盾自体が融けるほどにはなっていないが、盾が無事でもそれを保持している人形達の方が保たない。このまま太陽に引きずり込まれてしまうか――

「いんや、その前に火薬に引火して大自爆か。……参ったな」

帽子のつばを下げ、魔理沙は視線を遮る。

恐怖から目を反らす訳ではない。癖のようなものだ。

普通の魔法使い、霧雨魔理沙。弾幕ごっこが怖いかと聞かれれば、そんなことはないと答えるだろう。

だが、恐怖を覚える事はいつもある。そもそも人生なんて、一つ間違えば、死んでもおかしくないものだ。

だから――

魔理沙は胸に手を添え、帽子を深く引き下ろす。炎に撒かれて煽られる大きな三角帽子で視線を覆い、じつとつぶやいた。

Watch your back

「油断するな。

Shoot straight

迷わず撃て。

Conserve Spell Card

スベカを切らすな。

And never ever cut a deal with a DRAGON

――龍神には手を出すな。」

弾幕ごっここの警句を、己に言い聞かせるように呟いて、魔理沙は静かに自分を鼓舞する。

人智を超えた太陽に対して、魔理沙がとる戦法はひとつ。——いつも通りの、正面突破。

「いくぞ！」

《イイ度胸ダゼ！》

魔理沙は箒を全速力で走らせ、まっすぐに、太陽へと飛び込んだ。

残り少ない丹薬をすべてばら撒き、ありったけの魔素を絞りだす。練り上げた魔力を全てマジックミサイルに乗せ、空に向けて叩き込む。お詔え向きなことに、空はもう避けようもない。——自分の作りだした人工太陽の重力が巨大すぎて、すでに身動きが取れないのだ。太陽の表面を穿ち着弾の衝撃がフレアを棚引させる。

連射、連射、連射。

雨垂れが石を穿つかのごとく。魔理沙が撃ち放つ魔力の鏃が、立て続けに吹き上がるフレアの柱を貫いて、巨大な太陽の表面を揺らした。

種族魔法使いですらない、人間の少女が使う魔法が、太陽に疵を付けたのだ。

「……………!？」

空が顔色を変えた。同時、魔理沙はありったけの攻撃コマンドを全て人形達へと注ぎ込む。

「いけええ!!」

残る全てを振り絞って、魔理沙は叫ぶ。吹き荒れる炎の余波に煽られて、じゅうと喉が焼け、嫌な音を立てた。

ポーン01から08、8体の人形全てを眼前に展開。鏃型の突撃陣形を組ませると同時に魔力炉のリミッターをカット。暴走させた魔力をそのままレーザーに変換して、眼前の人工太陽へと叩きつける。

人形の魔力炉など、太陽に比べれば塵ほどにも満たない。呆気ないほどに短い時間で、射出したレーザーが途切れてゆく。

三番、四番、六番魔力切れ。

「っ……………」

空になるまでレーザーを撃ち尽くした人形を切り離し、余ったチャンネルを残りの人形たちへの制御へ集中する。筈も出力全開、少しでも速度を緩めればそのまま真逆さまだ。

吹き荒れるフレアの爆発は避け切れず、まだ余力を残していたポーン07が魔力系ごと下半身を削り取られ、太陽へと落下していった。

《構ウナ！ 打テ、撃テ、討テ！》

熱波に巻かれ、焼かれた魔理沙の喉の代わりに、ポーン01が叫ぶ。

魔力系の維持だけに全力を回し、ありったけの攻撃コマンドを追加入力。チャンネルの限界を超えた処理に、魔力系が煙を上げ始める。ここまで過酷な動作テストは、アリスも行っていないだろう。

魔理沙の特技にも近い攻撃の中、空のスペルはなお力を増し続けていた。

途切れぬどころか、さらに熱量、重力を増す巨大な太陽——忌み嫌われ、地底に放逐された妖怪達が、求めた地上の象徴——それが、妖怪たちにとつてはやはり忌み嫌う太陽だったのは皮肉と言うほかない。

しかし。魔理沙はなお強く輝く太陽に照準を合わせ、残る丹薬を全て撒き散らして、魔力の鍬にありつたけの力を注ぎこみ、撃ち放つ。

《どのどいつだか知らないが、余計なコトしてくれたもんだっ！》

声にならない叫びを上げて。少女たちの遊びと言うには、あまりにも規格外な力に立ち向かい、それでも魔理沙は避け続け、撃ち続け、諦めない。

幻想郷の少女として。

弾幕ごっこに挑む射手として。

普通の魔法使いとして。

ありつたけの矜持を込めて、魔理沙は吹き荒れる太陽に、最後の一打を埋め込んだ。

緑の尾を引いて飛ぶ魔法の鍬が、地下に輝く人工太陽の黒点を捉え、大きく明滅。

次の瞬間、地底に生まれた人工太陽が軋み——燃え盛る神の火は、凄まじい衝撃波と共に、微塵に弾け飛んでいた。

【六】人形欠席裁判

できの良過ぎる作品は
欠陥品と変わらないものだ。

Spell Card Bonus 「報われない努力」



怨霊騒動も一段落し、幻想郷は日々春めいていた。

太陽が個人の手に渡るといふ一大事が起きながらも、幻想郷はそれまでと姿を変えることなく、日々は続いている。変化と言えればこれまで地底に潜んでいた妖怪達がちらほらと姿を見せるようになり、あちこちに湧いた温泉が好評だというところだろうか。

新緑まぶしいアリス邸で、魔理沙は今回の顛末を語っていた。

「——その八咫鳥つてのか？ そいつが太陽の力を持つてる神様だそうなんだ。で、そいつが——」

小さな身体はまだあちこち包帯だらけで、見ているのも痛々しい。

空との一戦では直撃の被弾こそ無かったものの、最後の最後で人形の一体が至近距離で誤爆し、その時に負った名誉の負傷だ。他にも間近で太陽の熱に曝された時の火傷がまだ治り切っていないのだが、これくらいの傷は日々の研究で日常茶飯事であると嘯うそぶき、べたべたに塗ったくった魔女の軟膏の匂いをさせて元氣に出歩いていた。

「つてことだな、どうも黒幕は早苗んとこっぱいぜ」

「……面倒な話ね」

うんざりと呻くアリスの前で、けは、と咳を挟み、魔理沙は紅茶を啜って顔をしかめる。見る影もないガラガラ声は、地下の人工太陽が間近で発する強烈な熱波を吸いこんで喉を焼いてしまったからだ。肺まで焼けなかったのは幸運と言うほかはないだろう。

鼻の上に張った絆創膏が気になるのか、魔理沙はしきりにそこを擦っていた。

「かくして、また幻想郷は新たな仲間を迎えましたとさ——か。結果的に、紫に良いように使われた気がするのがまた癪なのよね……」

新兵器を手に入れた地底の妖怪達の地上侵略——そんな未曾有の危機かと思いきや、蓋を開けてみれば山の神様主導の新エネルギー開発だったというのだから、脱力もしかたのない事かもしれない。

この所何かとお騒がせの守矢神社だ。山の上に建立された二柱を祀る社が妖怪達を中心に信仰を集めている事は把握していたが、まさか既に地底にまで影響を及ぼしているのは完全に想定外だったと言えよう。

にとりをはじめ河童たちは地獄鴉に与えられたという人工太陽に興味津々の様子だったが、ひとつ間違えれば地底どころか幻想郷そのものを危険に晒しかねない守矢二柱の行動は流石に目に余ったようで、さっそく霊夢が『異変解決』に向かっているという話だった。

前後して魔理沙も守矢神社を訪ねたのだが、生憎と新エネルギー計画の張本人とはすれ違いになり、無意識を操るさとり妖怪の妹と弾幕こっくに巻き込まれて諦めざるを得なかったとい

う。

そして、当の魔理沙と言えよ。

「なあアリス、こいつやっぱり返さないとだめか？」

「当たり前でしょう」

《イー ज्याネーカ、ケチケチスナヨ！》

「そうだそうだ！ もっと言ってやれ！」

「……あのねえ」

魔理沙の隣でまるっこい手をびしとアリスに突き付け、主人と一緒になって口悪く叫ぶポーン01に、アリスは大きく吐息。

地底の異変解決の間の貸与という正式契約があるのにもかかわらず、魔理沙はここにきて人形たちの返却を渋っていた。概ね予想できたことではあるが、改めて不満そうな魔理沙の前に、アリスは蒐集癖ここに極まれりねと天を仰ぐ。

「お気に入りにしてもらえるのは悪い気はしないけどね。最初に話してあったでしょう」

「そんな事言うなよ。なんならこいつだけでもいいんだぜ。……だめか？」

ポーン01を抱き上げ強気から一転、雨に濡れた子犬を拾ってきたみたいに眉を下げ、上目遣いの魔理沙に、一瞬心が揺らぎそうになるが——アリスは慌ててぶんぶんと言を振り、七色の人形遣いとしての面目を保とうとする。

「その子連れたままじやいつものスペルカードもほとんど使えないんでしように。今から人形遣いに転職でもするの？ 弟子なんて取るつもりはないし、メンテナンスは出来るのかしら。壊れたら誰が修理するの？」

「……まあそこはほれ、なんというか、な？」

《イダロ！ 減ルモンジャネーゼ！》

人間の魔法使いである魔理沙には、人形操作と高度な魔法の両立は難しい。それは魔理沙も把握しているようなのだが——一度愛着がわいたものを手放すのは忍びないのか、妙に頑固だ。わずか数日の間に、二人の間にいったいどんな友情が芽生えたというのか。十年來の旧友のような息の合い方を見て、アリスは額を押さえて天を仰ぐ。

しかし、契約は契約だ。

「パチュリーのところから持っていった魔道書、随分な数になるはずだけど、ちゃんと読めたのは何冊あるのかしら。まさか床の上で埃かぶったままってことはないわよね？ この前錬金術を始めたって言ってたけど、成果はでたのかしら？ そう言えばにとりとロケットを作るなんて事も話してくれたわよね？」

「うっ……」

立て続けに痛いところを突かれ、魔理沙は呻き、うなだれて両手を上げ降参の意を示す。

「……わかったよ、返す。返すぜ」

《シカタネーナ!》

律儀に追従する人形が、魔理沙によって準起動状態を解除され、待機命令を受諾した。

ポーン01が動きを止め、スリープモードでテーブルの上に座り込むのを確認してから、アリスは魔理沙の背後に回った。首筋に繋いだままになっている魔力糸の接続を切り、切断して巻き取ったモノフィラメントに高圧電流を流して焼却する。

「痛い……うー、慣れないぜ、これ」

「構造的にも繋ぎっぱなしは良くないのよ。人形との感覚が長時間リダイレクトされると自己の境界も曖昧になっちゃうし。下手したらこの子が被弾した衝撃でショック死するわよ?」

「うえ!?」

物騒な事を言われてぎよつとする魔理沙が、背中越しにアリスを非難する。

「は、はじめから言ってくれ、そういうのは!」

「嘘よ。そうでも言わなきゃ懲りないでしょ、あなたの場合」

魔理沙の脊椎に繋いでいたヒヒロカネの魔力針にも自死処置を施し、その上に治療用の符を張りつける。半日もすれば傷も残らずに回復する筈だが、首筋にまだ違和感を覚えるのか、魔理沙はしきりに頭の後ろを気にしていた。

回収したポーン01を腕に抱え、アリスはふと眉をしかめた。人形の腕に、明らかに自分のものではない継ぎ跡と縫い目がある。

「……魔理沙、この子を弄ったの？」

「ん？ ああ、途中で少しな。被弾で壊れかけてたから応急処置だけど。初めてにしちや上手くいってるだろ？」

「別に、処分しても良かったのよ？ 予備も十分にあった筈だし」

アリスにとつて人形は並行作業を行わせるための、使い捨ての端末だ。替えが利くことが第一であり、魔理沙が見せるような愛着などもたない。

「そういうわけにもいかないだろ。一緒に大冒険した相棒だ。怪我したくらいで見捨てられるわけないぜ」

アリスの手の中のポーン01の額をそつと撫で、魔理沙は柔らかく口元を緩める。既に動作を終えた人形の腕を取り、しつかりと握手を交わした。

「お疲れ様だ。ありがとな」

まるで親友との別れのようにこれまでの労苦をねぎらつて、魔理沙はくるりとアリスに振り返る。

「で、だ。これでパチュリーのとこの貸しはなしってことでいいんだよね？」

「……………」

「おい、アリス？」

呆けていたアリスは、魔理沙の顔が急に眼の前に近づいている事にも気付かなかった。

「え？ あ、……そうね。前回の貸し出し分はね」

「ん？ ちょっと待て、話が違うぞ！ 確かこれまでの魔道書が報酬ってことだったろ？」

「契約書はきちんと読みなさい。そんな事どこにも書いてないわよ。……第一、大図書館の損害を真面目に計算したらあなたが一〇〇人、一生ただ働きしたって半分も返済できないわよ」

「そんな、横暴だぜ！」

ほんとテーブルを叩く魔理沙に、お前が言うなとばかりアリスは肩を落とす。

魔理沙は埒が明かないと椅子を蹴飛ばし席を立った。

「あー、もういい！ 直接パチュリーに交渉してくるぜっ！ アリス、邪魔したな！」

「はいはい」

魔理沙は壁にかかっていた帽子を掴み、ドアを飛び出すなり箒に跨って地を蹴る。瞬く間に流星の尾を引いて、白黒魔法使いは空に舞い上がる。

玄関に見送りに出たアリスを箒の上から見下ろし、ポーン01を指さして、魔理沙はにっと笑顔を見せた。

「アリス、またいつか、そいつ貸してくれよ！」

「そうね」

機会があったらねとつぶやくアリスを置いて、魔理沙の背中が空の向こうへと消えていった。



.....。

.....。

「.....よし。.....動け！」

命令を与えると、ぎこちなく人形の目に明かりが灯る。

不格好でつぎはぎだらけの人形は、長さの違う足でひょこんと立ち上がり、ふらふら危なっかしい足取りで進みはじめた。

わたしを見つけて、こっちに歩いてくるように作ったはずの人形。けれど彼女はこちらを振り向きもせずに、まっすぐ立つ事もできないまま、数歩を歩いただけでぺたんこ顔から転んでしまう。

じたばたと地面をもがく人形は、力任せに起き上がりとして勢い余り、そのまま反対側に倒れ込んでしまった。

ぽろりともげた腕が地面を転がり、中身の綿を撒き散らした。

そのままがき、這いずって——やがて動かなくなる。あつという間に壊れた人形を見下ろし、わたしは大きく溜息をつく。

「……どうして、上手くないんだろ」

わたしが自分の手で動かしている時はまだいい。

けれど、いくら頑張って魔法を覚えても、わたしの手を一度離れた人形達は、すぐにわたしを見失い、まっすぐ歩く事もできずに転んで、動かなくなるばかりだった。

こんなことではいけないのだ。わたしが作りたいのは、自分で考えて、動いて話す人形。わたしと見分けがつかないくらいに精巧なものでなくちゃいけないのに。

思う通りに行かないことに苛立ち、地面に転がった人形を蹴飛ばす。ぽてんと力なく転がった彼女の顔から、目の代わりのガラス玉が外れてころんと転がる。

「落ち込んでちゃだめよアリス、諦めたら、そこでおしまいなんだから」
自分を励ますように言い聞かせ、大きくゆっくりとうなずく。

また、最初からやり直した。

壊れた人形をほいとゴミ箱の中に放り込んで、わたしはもう一度、お裁縫セットに向き直る。

何がいけなかったのか、何が良かったのか。起きた事をしっかり思い出し、メモを取って——十分にそれを読み直す。

魔法というのは日々の積み重ねだとママは言っていた。それも、同じ事をうまくいくまでただ繰り返すだけじゃダメで、どうしてそうなるのか、どうしてそうならないのかを考えて、次にするときにはそこを改善していかなくちやいけない。それが魔法を志すために一番大切な事

なのだと。

それでもたくさんさんの失敗作でそろそろゴミ箱は一杯になりそうだった。また夢子に片付けさせなきゃいけない。

わたしは再び針を手に、新しい人形を縫い始めた。

「何してるの、アリス？」

不意に声。

挨拶もなく部屋に入ってきたのは黒い服と白い服。ユキ姉とマイ姉だ。

できればあまり顔を合わせたくないのだけど、使用人の夢子や、旅行好きでしょっちゅう家を空けているルイズ姉と違って、ユキ姉とマイ姉はわたしと同じように水晶宮で暮らしている。どうしても顔を合わせなければならぬだけ、憂鬱だった。

どういう訳か知らないけれど、このふたりは何をするのも、いつもふたり一緒になければ済まないらしく、特にユキ姉は何も言わないマイ姉を引っ張り回していた。わたしが見ている限り、そんなに仲がいいというわけでもないのに。

ユキ姉はすたすたと歩いてくると、わたしの背中越しにテーブルを覗き込んできた。わたしは慌てて、作り掛けの人形を胸にぎゅっと押し付ける。

「……なにそれ？」

わたしが胸に抱いたものを見て、マイ姉がこくんと不思議そうに首を傾げる。

「……………」

わたしはふたりを無視した。馬鹿にされるところだ。どうせ姉さん達には、わたしのしている事なんておまじことみたいなもので、子供の遊びと変わらないのだ。

これはわたしの魔法だ。わたしだけの魔法だ。できれば他の人には関わって欲しくなかったし、なにより下手に興味を持たれて、一緒に手伝わなんて言われたら目も当てられない。

……だって、みんなの中でわたしが一番、魔法が下手なのは、嫌というほど分かっている。それなのに、姉さんたちにわたしよりも上手いところを見せつけられるなんて、たまったものじゃなかった。

これは、だれにも渡せない、わたしだけの魔法なんだから。

ユキ姉にも、マイ姉にも……うっん、ルイズ姉にも、夢子にも、ママにだって譲れないことなんだ。

「アリス、ねえ、ねえってばー！」

黙ったままのわたしに、ユキ姉はすこし気分を悪くしたようで、声を荒げて叫ぶ。

「……もういいわ。アリスなんて知らないんだから！ おやつも分けてあげないんだからね！」
きつとすぐに飽きるだろうと思っていたけれど、案の定、少し黙っているだけでユキ姉はわたしの人形について興味を失くしたみたいだった。

ひとりでふりふりと怒って、部屋を出ていこうとする。

けれど――

「マイ！ 何してるの、行きましよ！」

マイ姉だけは、じっとその場に残る。

感情の薄い眼が、わたしと――わたしが抱きしめた『それ』を見つめていた。

「……………」

わけもなく怖くなって、わたしは人形を背中に隠す。何を考えているのかわからない、光の無い目がじっとわたしを睨む。

「マイったら！ どうしたのよ。わからずやのアリスなんて放っておけばいいの！」

やっぱり、ふたりは一緒でないといけないらしい。つかつかと戻ってきたユキ姉が、マイ姉の手を掴んで強引に引きずってゆく。

けれど、今はそれが嬉しかった。邪魔な二人がいなくなるのを喜んで、わたしがそと作業の続きに戻ろうとした時。

「――酷い思い上がりね、アリス」

まるで冷たいナイフをお腹に突き込まれたみたいに、鋭い言葉がわたしをえぐっていた。

はっと振り上げば、ユキ姉に引きずられながら、マイ姉は――いつもの感情のない顔で、じっと――わたしの手にした『人形』と、ゴミ箱をあふれた人形だったものたちを、交互に見つめていた。

怖くなつて、私は思わずマイ姉から目を反らす。じつと息を詰めて、手の中の人形を握りしめる手に力が籠った。

やがて、小さな足音が遠さかつてゆく。それが完全に聞こえなくなるまで、じつと目を閉じ、耳を塞ぎ続けていた。

.....。

.....。



春となり、桜がちらほらと花を見せるようになって、今日も里の賑わいは変わらない。

早苗と共に市の外れを歩きながら、魔理沙はゆつくりと背中を伸ばす。焦げた髪を誤魔化すために鉢を入れた金髪がいまいちおさまり悪く、帽子の端をはみ出している。

徹夜明けの頭には、良く晴れた空の日差しは少々厳しい。ふああとあくびをかみ殺し、目元をぬぐう。

「.....でも、神奈子様も私に何も言わずにあんな計画を進めることはないと思うんですよ」

「お前は少し反省しといたほうがいいぜ？」

身体のあちこちに真新しい符を張りつかせたまま（霊夢の符はだいたい半日は剥がれない）、早苗がふうと頬を膨らませる。

霊夢の『異変解決』に付き合わされた早苗が、さして懲りた様子もなく口を尖らせるのに、魔理沙は苦笑。初々しかった守矢の風祝もここ数カ月ですっかりこちらの流儀に慣れ、幻想郷のふてぶてしさを身につけているようだった。

屋台の焼き串を口に運ぼうとした魔理沙の右手で、わっと歓声が上がる。

「んむ？」

鳥の香草焼きを口の中に飲み込んでそちらを見れば、市の外れではまたも多くの見物客の中、アリスの人形一座が劇を披露していた。

今回の演目は、先日の地底での騒動の顛末をまとめたものだ。無論、馬鹿正直になにもかもそのまま伝えるわけにもいかないもので、いろいろと脚色がされているが——アリスは隣や空、さとり達の人形まで作っての気合の入れようだった。

噂では、幻想郷縁起の改版に合わせて、人里にも広く異変について知ってもらおうという取り組みの一環なのとかで、稗田家や寺小屋も協力しているという噂もある。

小さな舞台に緞帳が下り、拍手の中でアリスがお決まりの口上を述べる。それに従う人形達が、揃って一礼した。

見物客がはけていったのを見計らって、魔理沙はよう、とアリスに声をかける。

「――あら。奇遇ね」

「二度目だけだな。相変わらず繁盛してるじゃないか」

「今回は奢らないわよ。やる事もあるし」

先んじて甘味屋への誘いを断られてしまい、魔理沙は渋い顔をする。

「……そう言えば聞いてくれよ、アリス。パチュリーの奴、全然こつちの話も聞かずに吹っ飛ばしてくるんだぜ？ 私は事を荒立てないように静かに入って、平和的に交渉しようつてのに、酷い暴力主義だと思わないか？」

「まだやってたのね」

先日の霧雨魔法店と紅魔大図書館の攻防、そして正当な報酬として受け取った魔道書の収穫の少なさについて、呆れ顔のアリスにひとしきり愚痴ってから、魔理沙はきよろきよと周囲を見回した。

「なあ、アイツは元気にしてるか？」

「ああ。ポーン01ね」

舞台の後片付けをしながら、アリスはふと、珍しくも憂鬱に顔を曇らせた。

「そのことで、あなたに謝らなきゃいけなかったの。魔理沙」

「ん？」

アリスは眉尻を下げて、トランクの中から真新しい人形を1体、取り出した。

「前に魔理沙が見たのとよく似ている——新品の、兵士人形。」

「調べてみて驚いたわ。あの子、完全に怨霊に乗っ取られてる状態だったのよ。憑依汚染もすごく進んで……よくあんなの使ってたわね。ほとんどあなたのいう事なんて聞いてくれなかったでしょ？」

「はい、とアリスは人形を差し出した。」

「だから、これはそのお詫び。受け取って」

「……………」

魔理沙が言葉を失う中、まったく悪気のない顔でアリスは一人、腕組みをして頷く。

「私も少し狭量だったかもしれないわね。あなたがきちんと人形を使ってくれるんなら、拒絶してばかりも良くないかなって思ったのよ。ちゃんと初期化してあるから、今度はあんな風に勝手に動きだしたりしない筈よ」

「……………」

黙ったままの魔理沙に、アリスは首を傾げる。

「……………」 魔理沙、どうしたの？ 前はあんなに欲しがってたじゃない」

「お前、それで私が喜ぶとでも、思ってるのか？」

「……………」 なんて？ それ、あの子と同じものよ？」

不思議そうに瞬きをするアリス。魔理沙は、自分の声が底冷えしていくことを自覚していた。

「アイツは……どうしたんだ？」

「どうって、処分したわよ？」

聞き間違いだと思った。

片手間に人形達を動かしながらのその返事があまりにも自然すぎたので、魔理沙は自分の耳がおかしくなったのだと思うしかない。

「……アリス」

掠れた声で、魔理沙は辛うじて唇を動かした。

「……冗談、だよな？」

「何が？ こんなことで冗談なんて言わないわよ。」

あなたはすいぶん愛着があつたみたいだけど、主人の命令も聞かないで勝手に動く人形なんて、危なっかしくて使えないじゃない」

「……なんだよ、それ」

間違いない。アリスは本気だ。そう確信する。顔を見ていることができなくなって、魔理沙は帽子を強く掴んだ。足元がふらつき、倒れこみそうになる体を、必死に支える。

耳鳴りがひどくなり、アリスの言葉がうまく聞こえない。

「良く解らないって言えば、どうしてあの子だけに異常があつたのかしらね。通信に異常があつた時点で気付くべきだったわ。……十分にテストしたつもりだったけど、不良品を掴ませちゃっ

たのは私の責任だし。責められても仕方のないことよ。本当にごめんなさい。魔理沙」

「やめろ、アリス……」

喉がひり付く。視界が滲む。声が底冷えしてゆくのが自分でもわかった。魔理沙は小さな声で呻く。耳を塞いでしまいたかった。

今からでもいい。全部でたらめでもいい。嘘でも冗談でも、いいから、どこからひよこつと顔を出したポーン01と一緒に、アリスが笑いだすのを期待する。

けれどアリスは本気だ。嘘でも冗談でもなく、真摯に、魔理沙に謝っている。

「あの欠陥のせいであなに害が無かったのは不幸中の幸いだったけど——」

「——っ！」

気づけば魔理沙は思い切り腕を振り上げていた。

ぱあんと乾いた音が響く。

アリスは——感情の薄い表情を変えぬまま、赤くなった頬に手を触れる。

眼に涙をためた魔理沙は、じんじんと痺れる手をきつく握り締めた。

「取り消せ！ アイツは、出来損ないなんかじゃないっ！」

劇も終わり、徐々に人が少なくなっていた市のはずれの広場では、静かなざわめきが波紋の

ように広がっていく。

何事かと足を留めた人々は、広場の中央に残るふたりの少女へと視線を集めていた。

「アリス！ お前、前に自律人形作るのが夢だつて言つてたじゃないか！ 嘘なのかよ、あれはッ！」

「……嘘じゃ、ないわ」

「じゃあなんでだよ！ あいつ、せっかく喋れるようになったのに！ ちゃんと自分で、一人で動けるようになったんだぞ！ それを、それをつ、どうして——っ！」

「……？ 何を言つてるのかよく解らないわ」

「はああ!？」

あまりの言い草だった。この期に及んでのアリスの台詞に、魔理沙は憤り、声を荒げる。

「お前、もう一度言つて——」

激昂し、もう一度手を振りかぶつた魔理沙に——今度は平手ではなかった——トランクの留め金を跳ね飛ばし、人形達がすさまじい速度で飛び出す。

主人を護るように武器を構えた人形達は、魔理沙を阻むように間に割つて入る。既に彼女達の手には、演劇用ではない本物の剣や槍が握られていた。

周囲にもどよめきが広がる。人里内での武装はよほどのことがなければ許されていない。

「意味が分からないと言つたのよ。私が私の持ちものをどうしようと勝手にしよう？ あなた

に指図されるいわれはないはずだけど。……それとも、報酬がそれ一体だけじゃ不足なの？」

「違う！ そんな事言つてないだろ!!」

魔理沙は激情のままにアリスの胸倉を掴み上げる。

人形達が色めきたち、一斉にその得物の切っ先を魔理沙へと向けた。しかし、鋭い切っ先の槍袈を前に、魔理沙も一步も引かない。

「……もう一度だけ、答えろ。アリス。私はお前の事を心底軽蔑するかもしれない。だから正直に、本当のことを答えろ。お前、本当に、あいつを捨てちまったのか」

「ええ」

わずかなためらいも、躊躇も、戸惑いすらなく。

今の時間を聞かれたように、アリスはあつさりとは答えた。

「どうしてだ！ お前にや愛着つてもんがないのか!!」

「道具に思い入れを持つということ——でいいのかしら。あまり論理的じゃないけど、長年の使用に耐えてきた道具を、精度が良いものと認識すると言うことよね。それならなおさらあの子を残しておく理由がないじゃない。使い勝手の悪い道具をわざわざ手元に残しておくの？ 意味がわからないわ」

「そうじゃない！ そうじゃないぜアリス！」

「……魔理沙。あなたの言ってる事は感情が混じりすぎてて理解し辛いわ。単純なことなのよ？」

欠陥品を使えば、それだけリスクが高まるのよ。合理的じゃないでしょう」

「……欠陥品？」

「ええ。壊れたら別のものを使うだけ。……私はなにか間違った事を言ってるかしら？」

聞き分けのない子供を諭すような調子で、アリス。

魔理沙は唸るように歯を軋らせた。

「確かにあの子は、勝手に動くようになってしまったけど。私はあの子をそうなるように設計していなかったの。魔理沙のサポートに必要な機能を持たせただけ。だからあんな反応をする時点で欠陥なのよ」

「ちがう！ 私はあいつに何度も命を助けてもらったんだ！」

「人に命を預ける判断は褒められないわね。魔法使いなら、自分以外は基本信用しちゃだめ。最初に言ったでしょう」

アリスの考える道具論は、魔理沙の思うそれとはまったく別だ。

彼女にとって、設計通りの機能を過不足なく十割、十全に発揮するものが最良の道具である。たとえば、実際の機能が設計の半分に満たなかったら？ それは欠陥があるということだ。

もちろん、理論通りの性能を十割きちんと出す道具など、そうそう存在しない。こればかりは実際に動かしてみなければ分からないことだ。

——では、設計以上の能力を発揮するとすれば？

それも、アリスには等しく欠陥品だった。

「過剰でも、不足でもだめ。意図しない動作をする道具は、使用者を裏切るのよ。だから不要リスクを避けるために、速やかに破棄すべきよ」

「あいつには欠陥なんかなかった！ アリス、お前はそうやって、これまでに人形を潰してきたのか!?」

「……ねえ」

睨み付ける魔理沙に、アリスはついに不機嫌そうに眉を寄せる。人形は使わず、自身の手で襟首を掴む魔理沙の手を払いのけた。

「どうして私がそんなことで、延々と怒鳴られなくちゃならないのかしら」

「……わからないか？」

「ええ、全然」

意地でも、虚勢でもない。真実、心の底から。

アリスは、魔理沙の憤りを理解していない。

「お前のことを、今日ほど本気でぶん殴ってやりたいと思ったことはないぜ」

「——そう。私も、あなたがそこまで未熟だなんて思ってたなかったわ」

静かに息を吸い——魔理沙は、アリスに対峙する。

「勝負しろ、アリス」

固めた拳を、しかし魔理沙はゆつくりとほどき、視線を上げる。白黒をつけたとき、幻想郷にはルールがある。

懷から引き出したスペルカードを示し、魔理沙はアリスをにらむ。

「出し惜しみは無しだ。本気で、私と戦え」

「……何のつもり。八つ当たりならよそでやってくれないかしら」

「とぼけるな！」

いや、と魔理沙も頭を掻き毟る。ぎりぎりどとどと縮めていた歯を、ありったけの自制心を引き出して緩め、静かに息を吐く。

「八つ当たりなのは確かかもな。——けど、これは譲れないぜ。私の、魔法使いの矜持だ」
魔理沙の見せた真剣な表情に、アリスもその本気を悟る。

「一死七符だ」

「いいわ。受けましょう」

被弾は1回まで。スペル数は七つ。

その条件で、アリスは命名決闘を受けた。

【七】 平行線上の魔法使い

諦めないこと。

努力すること。

友を信じること。

——勝利の役に立たない三原則。

Spell Card Bonus 「努力、友情、勝利」



スベルカード・バトル

命名決闘法において最初に宣言され、合意の前提となる条件は二つある。一つは残機数、もう一つは符の枚数だ。前者はいくつまでの被弾を許容するかという条件で、両者の間に生じるやる気の格差を是正するためのもの。よりフェアなスポーツとしての側面が強調され、異変以外の勝負で良く用いられる。

もう一つの符数は、勝負への本気度を示すものだ。両者の枚数は同じに揃えることが慣例とされ、多く提示された枚数のうち少ない方に合わせられる。常日頃から——ちよつとした散歩や買い物にまで——何十枚とスベルの用意をして持ち歩いている者の方が稀であり、これもまた多く公平さを保つための措置だ。

異変においては符の枚数がその異変への関係性が深いことを示す。異変の中心に近いものほど、軽々しく引くことができなくなるからだ。通りすがりであれば符数は2から3枚、首謀者かそこに近いものであれば符数は5枚以上であるのが普通だ。

魔理沙の提示した七符は気軽な勝負とはいえない難く、異変の最終局面——生命のやりとりに基づく可能性を孕んだ真剣勝負に近い。宴会の余興であれば多くは一符か二符。ちよつとした諍いの解決には三符ほどが用いられる。この辺りまでは、妖精でも強力なものになれば付き合うこ

とがあるかもしれない。逆に、強力な妖怪でもこれを超える枚数を常にデッキに用意しているかというところ、やや怪しくなってくる。

よほど根の深い問題であれば、事前に時と場所を決めて五符、ということもあるだろう。

無論、死数も符数も相手に合わせなければならないという絶対の規則はない。それでもこの場に七符を指定してくるというのは、それだけ魔理沙の憤りが深い事を意味していた。彼女が普段提示する符数は多くて四枚。常に携帯しているデッキ数もそのあたりだろう。

——そして、今日の魔理沙はそれだけ本気のようにだった。

スペルブレイクの快音が魔法の森に響き渡る。梢を揺らし飛び立ってゆく鳥を見上げ、アリスはわずかに唇を噛む。

初手は闇符「霧の倫敦人形」。一枚目に蒼符「博愛のオルレアン人形」。

ナイフを手に神出鬼没の殺人鬼も、聖女に率いられた騎士団の突貫も、魔理沙は手札を切らないままに避け切って見せた。

「そんなもんか！ くだらん手加減なんかやめろ、アリス！ それとも、まだ私が本気だって解つてないのか！」

凄惨なまでの表情。命を擦り減らさんばかりの気迫で、魔理沙は迫ってくる。

あんなに頭に血を上らせていればすぐにへばるだろうと考えていたアリスの目論見は、外さ

れることになった。

真正面から突っ込んできた魔理沙に、立て続けにスペルを攻略された事に一瞬焦りを覚え、デッキの3枚目に手が伸びる――

符を掴みかけたところで、アリスは我に返った。

残符はこちらが5、魔理沙が依然として7。冷静に状況を分析すれば、思いの外、白黒魔法使いの想いのままに戦局を進められているのだ。軽々な判断は致命的なミスを招く。

(熱くなりすぎたわね)

一度は宣言しかけたスペルを中断、間合いを取って様子を視る。

代わりに、魔力糸を展開して新たに12体の人形を繰り出した。自分自身の警護のために騎士^{ナイト}4体、僧^{ビショップ}正4体の計8体を残し、残る4体を大きく迂回させて戦場に配置。いざという時には背後から魔理沙を狙える位置に伏せを指示して、待機させる。

符数の多いスペルカードバトルは、攻守の入れ替わりにくい勝負だ。

弾幕戦は多くの場合、攻撃側がスペルを連続して宣言し、防御側が如何にデッキや残機を減らさずにそれを凌ぐかという一連の流れができる。この攻守の流れは一度決まるとなかなかひっくり返らない。

攻撃側してみれば一度先制を取った以上、相手に余力を残させたまま手持ちの札を減らすわけにはいかず、次々にスペルを繰り出して相手を損耗させなければならぬ。

一方守備側は、余力を残して相手のスペルに耐えきることができれば、いざ反撃に転じた時に圧倒的に有利な状況で相手を追い込む事ができる。

つまり、魔理沙が一枚も手札を切らずにアリスのスペルを2つ耐えきった時点で、彼女には十分過ぎるほどのアドバンテージが生じている。極端な話、残りのスペルを全て相殺覚悟で撃ち合っていたら、アリスは2枚分の差をただ避け続けるだけになる。そこに十分な威力と精度のある強力なスペルをぶつければ、勝ちを掴むのはひどく容易いのだ。

無論、勝負の規定によってデッキの構築には制限も加わるが、大原則は変わらない。

(自分で思ったより動揺している……みたいね)

まっすぐに突っ込んでくる魔理沙に、迂闊にもいつもの調子で応じてしまった。魔理沙が耐久前提でスペルを攻略することは滅多になく、普段より精度よく弾幕を回避するものだから、ついつい熱くなっていたらしい。

十分に間をとって、通常弾幕で様子を窺う。攻め筋が単調にならぬよう、機動力に長けた騎士人形にリーチの長い騎士槍を持たせ、交互に配置しての二重攻撃^{ダブルチェック}。

しかしアリスはそれ以上攻め手を進めず、小刻みに移動を繰り返して相手の出方を待つ。

熟練した射手^{シューター}同士の間では良く見られる、攻守交替を問いかける暗黙の間だ。攻守逆転の機会というのは、守備側にしてみれば有利不利、意図の有無にかかわらず魅力的なもので、先の見えない長期戦の中ではどうしても迷わざるを得ない選択だ。

アリスは十分に余裕を見せ、デッキ枚数に余裕のある魔理沙に、今度はそちらが攻めてみると挑発を込めて視線を飛ばす。

(……乗って来た！)

案の定、魔理沙は箒を素早く操り、符を抜き出した。

宣言は、彗星『ブレイジングスター』。星屑弾幕を周囲に撒き散らし、白黒魔法使いは箒の速度を上げる。瞬く間に輝きを纏った少女は、白い尾を引いてアリスへと突っ込んでくる。

時速二〇〇キロを超える高速移動で飛び回る魔理沙を狙い撃つ事は難しい。回避動作と一体になり、反撃を防ぐ役目ももつ高機動スperl。星を魔法のシンボルとする魔理沙の象徴的なスperlの一つだ。

だが、

「――それは悪手ね」

アリスの読みは的中した。彗星と化して奔る魔法使いを十分に引き付けて、最低限の回避行動でグレイズ。霊夢のようにとはいかなくとも、高速であればある程軌道は直線的になり、見切りも容易い。撒き散らされる星屑弾幕はそれを阻害するためのものなのだろうが、密度が薄すぎて妨害には不十分だ。

行き過ぎた先で見事な宙返りを切って反転、再度突っ込んでくる魔理沙。今度はゆるく螺旋を描くような軌道。少しは反省したようだが、まだ足りない。

先程とは対照的に大きく左に動いて、星弾の合間を抜ける。こちらの大きな回避行動を見て軌道を変えようとした魔理沙の死角から、配置済みの人形を襲いかからせた。

伏せからの奇襲。銀メッキを施された歩兵槍の穂先が、宙空に固定されて箒上の魔理沙を狙う。驚愕に目を見開き、魔理沙はギリギリのところまで軌道をずらすとするが——間に合わない。同時に攻めかかる騎士槍が待ち伏せを利かせていた。

「くそ！」

そのまま王手を狙う追い込み。毒づく少女の声と共に、箒が纏う輝きがかき消える。

スペルの解除——制限時間と耐久力を残して、スペルカードが攻略された事を示すものだ。箒の限界性能を超えていた加速が解除され、魔理沙は人形達の槍先を紙一重のところでもかわし切る。

「へえ」

「くそ、余裕のつもりかよっ！」

アリスがこぼしたのは皮肉ではなく、賞賛のつぶやきだったのだが——魔理沙にはそうは受け取られなかったらしい。視線も鋭く箒の上からこちらを睨みつけ、人形達を撃ち落とさんとばかりに魔法の矢を連射してくる。

いつもの彼女は、こうした状況に陥つてもスペルを解除せず、回避もこなそうと二兎を追いつけ、結果的に被弾して残機もスペルカードも失っていた。片方を手放してもう片方を守った

咄嗟の判断は、今日の魔理沙が高い集中を切らさずに戦闘を続ける、手ごわい相手であり、一筋縄でいかないことを表している。

符数は6対5。優位は縮まったが、逆転どころかイーブンですらない。気は抜けない、とアリスはローブの下から人形を繰り出す。

——魔光「上海人形」

上海人形は、人形達の司令塔となる上級人形を用い、直線的に収束したレーザーを放つスペルだ。人形を媒介に放たれる閃光は、組みこまれた魔力炉を出力の源とするため、見た目に反してほとんど使用者に負担を強くない。継続した砲撃となるため瞬間火力には劣るが、貫通力、透過力、飽和攻撃力については一角のものだと自負している。人形を介するうえ、反動も押さえてあるため射出方向の調節などの取り回しも軽い。

ブレイジングスターの宣言でばらまかれた星弾はまだ残っており、魔理沙はスペルの反動で高速回避は不可能。距離も十分に近いため、回避は難しい。

が、これで被弾は狙っていない。目的は、魔理沙のデッキにある可能性の高い、恋符「マスタースパーク」。状況によるが使いどころさえ間違わなければ、まずスペルによる相殺か被弾を強いられるあのスペルを、早い段階で使い潰させることだった。

上海人形のレーザーは直線的なものであるため、どうしても攻撃の軌道も単調なものになる。アリスはそこを囿に罫を仕込んだ。攻守を入れ替えると思せかけ、魔理沙にスペルの無駄撃ちを誘ったのだ。

出力の関係で、マスタースパークであれば上海人形を掻き消す事は容易いが、その逆は厳しい。ポーンとクイーンを交換するような打ち筋だ。しかし敢えてそれを示してやることで、魔理沙に不自由な二択を迫る。

単純な仕掛けだが、魔理沙がそれに乗ってくる確率は低くはないと踏んでいた。

反撃を控え、スペルを避けることに専念し続けるというのは、どうしてもプレッシャーになる。符数のアドバンテージを維持したまま手札一枚で相手のスペルを確実に攻略し、相殺——事によれば反撃できるとなれば、迷わざるを得ない選択肢である。

——だが。

(使わない?！)

ここで魔理沙は賭けに出た。スペルの撃ち合いによる相殺を宣言せず、アリスのスペルを攻略に出たのだ。

これを避け切れば再び手札の差は再び2枚。先程のミスを取り戻せるということか。

「舐められたものね」

多少の苛立ちと共に、アリスは人形に組み込んだ出力回路のリミッター、7つのうち4つま

でをカットした。人形が急速に周辺の魔素を吸い上げ、砲撃部分に充填。魔力炉が超過駆動の唸りをあげる。それでも足りない魔力を補填するため、人形は魔力糸を通じてアリス自身の魔力を吸い上げてゆく。

通常使用時の2倍近い出力で、上海人形の魔光が空を薙ぐ。分厚い雲に直撃した閃光が、渦を巻いて夜空を引き裂いた。

さらに、もう一体の上級人形に変形シシリアンでの攻撃を指示。弓兵と重騎兵を組み合わせ、上下から魔理沙の側面に配置^{ピン}。威嚇攻撃で回避のスペースを大きく削り、回避の方向を強制させる。

三十を大きく超える人形達を、リミッター超過で同時操作する、戦術級弾幕。無数の棋譜と定跡を網羅し、組み立てた指手が無慈悲に相手を追い詰めてゆく。

勝負には過剰な攻撃力も、機動力も、手数も不要。ただただ冷徹に駒を配置し攻め立てる。人形遣いアリス・マーガトロイドの本領だ。

「——ち」

しかしアリスは舌打ちする。

退避経路を大きく削られ、弓を雨と射かけられ、四方から槍袈に囲まれながらも、なお魔理沙は諦めない。これだけの弾幕を力押しで切り返すことなく、射眼を駆使してひたすらにグレイズし続ける。その集中力は普段の比ではなかった。

(……どういふこと?)

王手を掛けるはずの一手が躲され、詰めた駒が撃ち落とされる。魔理沙が負けず嫌いなのはいつもの事だが、それが実際の勝負にここまで影響を与えることはなかったはずだった。

「……………っ！」

動揺が、アリスの弾幕に乱れを呼ぶ。

空に打ち込まれる砲撃が、揺れ、たわみ、か細く掠れて――途切れた。

「っしやあ！」

薄れゆく「上海人形」のレーザーを掻い潜り、魔理沙が会心の笑みを浮かべた。

出力が失われ、連続稼働した魔力炉が熱に悲鳴を上げ、魔素をチャージするコンデンサが限界を訴える。制御弁が異常な内圧を感じし、砲撃を強制終了。レーザーは途切れ、虚空に静寂が戻る。凄まじい蒸気を放出し、冷却に入る人形が、次々にエラーを送りつけてくる。

アリスは歯噛みする。

魔理沙はどうとう、スペルを使わず被弾もせずに、「上海人形」のレーザーを避け切ったのだ。

エラーの奔流を記憶野から切り離れた区画にいったん隔離、思考能力を確保したうえで次の戦略を巡らせた。

(……まずい)

焦りがじつとりと、背中に嫌な汗を浮かべた。轟くスペルブレイクの快音にも関わらず、魔

理沙は全く油断を見せぬまま、さらに鋭くアリスの陣地へと切り込んでくる。それを歩兵人形の鎖状陣で牽制し、アリスは目まぐるしく思考を巡らせた。

再度、受けに回る？

いや、残り枚数を考えるにそのまま押し切られる可能性も出てきた。今の一枚でマスタースパークを切らせられなかったのが痛い。アレを相殺できる火力を持つスペルは、アリスの手元にはほとんどない。

(違う。無い、訳じゃない)

否定はするが、それ以上の事は出来なかった。

仮に、魔理沙が恋符をデッキに入れていないとしても。それ相応の高火力スペルが代わりに用意されていることは間違いない筈だ。現状の戦力を冷静に分析する限り、それを手持ちの符で切り返すのは、極めて難しいと言わざるを得ない。

アリスは魔力糸によるコントロールの精度を上げるため、魔具の指輪を破棄。人形への指令を指先に直接接続した魔力糸からのダイレクトコマンドに切り替える。さらに精度を増し、爆薬を仕込んだ特攻兵が魔理沙へ突撃を仕掛けるが――魔理沙は怯むどころか、破壊を撒き散らす爆風の中を、素晴らしい箒捌きで突っ切ってくる。

魔理沙のマジックミサイルが曲射でアリスを直接狙う。咄嗟に引き戻した人形達が盾を構え、着弾を反らした。紅色の火花が散り、耐弾コーティングがみるみる剥げ落ちてゆく。

「どうした！ ガラ空きだぜ！」

違う。まともな射手なら普通そんな場所を抜けてくる訳がない。

仮に考えても、その後の三重の防衛線を、繰り出される刃を全部避けるなんて、あり得ない。アリスが敢えてずらした攻撃のコマンドが、十分の一秒も遅れていたら、全弾被弾するはずだ。

（いつのまに、こんな——ッ）

アリスの見立てでは、彼我の力量は一〇〇〇近く開いていたはずだ。にもかかわらず、

魔理沙は素晴らしい打ち筋でアリスへと肉薄する。

アリスはきつく唇を噛み、歯を軋らせる。

多くの異変の傍観者であつたがゆえに、アリス・マーガトロイドは知らなかったのだ。強大な相手に立ち向かう時の、普通の魔法使い霧雨魔理沙の姿を。数限りない弾幕巧者と戦い、反則と言つていいほどに天才的な巫女の隣で、愚直に射眼を磨き続けた少女の事を。

「…………でも」

アリスは自問する。ここまで彼女が自分に迫る腕前を持っていたというのか？

魔理沙が事前に十分な時間をかけて、アリスの弾幕を研究し、スペルを解析し、戦術を吟味して、対策を整えて挑んできたのだというならこの結果は分からなくもない。だが魔理沙は人里でアリスと偶然出会い、その場で命名決闘を挑んできたのだ。そんな余裕は全くなかったはずだ。

それとも、人里でみせたあの激昂が演技だともいうのだろうか？ 今日この場で、アリスに挑むことを決めていて、その為の準備を整え、アリスが勝負を受けざるを得ないように仕向けたとでも？

（そんな筈、ないわ……！）

あり得ない。決して短いとは言えない付き合ひの中で、魔理沙がそんな器用な真似のできない娘だということは、アリスも良く知っている。

けれど、けれど。だとするなら。

（私じゃ、魔理沙に——勝てない？）

七色の人形遣いは、単純な実力で、普通の魔法使いに——劣っている？

ありえない。

だって、

わたしは、

そのために——

そのため、だけに……！

「——なあ、アリス」

弾幕の余波で吹き荒れる風の中、魔理沙の声はぞっとするほどはつきりと、アリスの耳に届いた。

「お前ひよつとして、また私がいかさましてるんじゃないかとか、思っていないか？」

「——ッッ！」

背筋が——

凍るか、と思った。

箒の上に立つ魔理沙の姿が、すぐ目の前にあった。

ゆらりと揺れる、白黒の魔女装束。三角帽の下髪が触れ合うほどの距離まで、普通の魔法使いの鼻先が迫る。

その気になれば一手でアリスを叩き落とせる密着状態のまま、魔理沙は何もせず、じつと——底知れない瞳で、静かにこちらの目を——否、心の底を覗き込んでくる。

「ッ……ああああああ！」

恐慌がアリスを支配する。

両手の魔力糸を弾き、両手剣と大斧を構えた人形達を魔理沙に突貫させる。さらにローブの下から予備兵力の18体の人形を全て繰り出し、箒上の魔理沙を狙い撃たせた。弾幕というにはいささか過剰すぎるほどの殺意と威力を持って、アリスの人形兵团は普通の魔法使いを戦空へと追いやる。

このままでは、負ける。

アリスの信条とするブレインの弾幕、冷静な戦術眼がそう告げている。

わずかな油断で、自分の全てが否定される。これまで感じたことのない恐れがアリスの思考を満たしてゆく。動揺と混乱が、冷徹な思考を乱し、七色の人形遣いが信条とするブレインの弾幕を、大きく歪ませてゆく。

「そこは私の距離よ！」

手斧を振りかぶった人形が左右から、微妙に間合いをずらして斬りかかる。右を避けて踏み込めば左に斬られ、離れて距離を取れば投擲斧がそれを追いつがる。そこにさらに弓兵の狙撃を合わせた三重攻撃。

魔理沙の戦種は後衛速攻。距離を取っての火力砲撃が主な構成だ。

そこでは先ほど突貫させた騎士人形が配置されたままになっており、槍を構え直した騎士隊は斧人形の双撃を嫌って引いた魔理沙の背後へ襲いかかる。

アリスはそのまま、なし崩しに符名を宣言。

——戦操「ドールズウォー」。

物理的な人形の攻撃を伴う弾幕だ。6体の上級人形を核に繰り出されるのは、格闘戦の相性

も持ち、それぞれに追尾、稼働、攻撃を行う60体超過の人形達の戦団^{レギオン}である。チェスボード3群に相当する人形達の蹂躪は、単純な回避だけでは避け切れない。それに対し、魔理沙も符を抜いた。

——星海「アステロイドベルト」。

またも好判断。取り回しの効きにくい高火力スperlではなく、連射力と拡散に上回る星屑弾幕で切り返してきた。微弱ながら引力を持つ星弾幕は、人形程度の重量であれば十分に影響を及ぼす。人形達の被弾は2割にも満たないが、戦列が乱れ、連携が崩れる。その隙間を搔い潜るように、魔理沙は回避を続けた。

だが、ここだ。

アリスは人形達の魔力系に、一斉にコマンドを送信。操作を指定した後に、魔力系に通電してワイヤーを焼き切った。

制御を離れた人形達が、それまでとは全く違った動作で魔理沙に襲いかかる。同時に、閃光が瞬いた。

——魔操「リターンイナニメイトス」。

幾重にも重なった爆風は、たがいに干渉し、反響し、増幅して膨れ上がる。高い空にこだまする爆発音が、びりびりと大気までを震わせた。

地底でさとりが再現した想起弾幕「アーティフルサクリファイス」の、さらに上位スペル。――相殺は間にあつていない。アリスは期待を込めながら、爆炎に飲み込まれた魔理沙の姿を睨む。やがて爆風の薄れるその向こうから、服を大きく煤けさせた白黒魔法使いのシルエツトが覗く。

（やった！）

……被弾1。大きくリードを奪った事に、アリスは内心で歓声を上げていた。

それが普段。勝ちに固執することを愚かしいと断じる自分にあるまじき行いであることに、アリスは気付きすらしていなかった。

だが。

魔理沙の鋭い視線と気迫は依然健在のままだ。いまの被弾は覚悟の上、集中力を乱すどころか、むしろ戦局を有利に進めるために必要な犠牲^{サクリファイス}だったと言わんばかり。降参^{リザイン}するなど、微塵も考えている様子はない。

「……………魔理沙、っ」

再びアリスの背筋を冷たいものが這い降りる。深淵よりゆっくりと姿を見せた得体のしれな

い恐怖が、冷たい手で七色の人形遣いの足首を掴んでいた。

残機数では上回っているが、符数では不利は明らかだ。

倫敦人形、オルレアン人形に続いてさらに3枚が攻略された。

残るアリスの手札は2枚。対する魔理沙の残符は5枚。比べるまでもなくその差は明らかで、戦局は極めて不利といえる。

追いつめられている。それも、圧倒的に。

冷や汗が顎を伝う。魔理沙は、最初のブレイジングスター以外、緊急回避以外でスペルを切っていないのだ。終始こちらのスペルカードを回避する事に徹底し、事実それで4枚が攻略された。弾幕ごっこによる地力で、こちらを上回っていると言わんばかりに。

(違う、魔理沙はもう残機が無いはず。もう一撃喰らわせれば、私の勝ちよ！)

動揺を抑え、冷静に戦況を読めと思考が囁く。弾幕は心理戦だ。その場の雰囲気飲まれることなく、惑わされずに結果を読み解き、事実だけを積み上げる。熱狂の中に勝利などないと、体に染みついたブレインの弾幕原理が叫ぶ。

(でも……)

5枚費やしてやっと奪った一機を、あと2枚でもう一度奪う事ができるのか？ 客観的な事実は、それ以上にアリスの不利も告げていた。今日の魔理沙は防戦にさえ徹すればアリスのスペルを十分に凌げるだろう。相性の悪いスペルであったとしても、アリスの1符を、魔理沙は

2符以上で迎え撃てる計算になる。

双方がスぺルカードを相殺で使い果たせば、残機数の残っているアリスの勝ちになるが——果たして、それが可能かどうか。一度浮かんだ不安はいくら振り払っても消えることなく、膨らむばかりだ。

脳裏をよぎる不穏な想像を振り払い、アリスは意識を集中する。

「どうしたアリス。もう品切れか？」

「うるさいっ！」

勝つ気満々の、箒上の少女に——後ろ暗い感情が湧き起こっていた。人間の分際で生意気だ。

ごっこ遊びに付き合っただけでいるのはこちらなのに。

苟立ちと共に薙ぎ払う虹色の閃光を、魔理沙は辛抱強く、大胆にかわし続ける。取るに足らない実践者、不死も不老も達成できていない程度の階梯で、炎や雷を使う程度の事で喜ぶ魔法の深淵すら知らない半端者が、勝敗を決するスぺルカードを喉元に突き付けんと、迫ってくる。

未熟ではあるが、彼女の弾幕に対する実力だけは認めねばならない。そしてそれができるからこそ、彼女はただの人間のくせに幻想郷の主役の一人だった。

吸血鬼も、殺人鬼も、亡霊も、永劫の姫も、堂々とそのルールで彼女に挑み、破られていった。

(……なら、わたし、は)

どくん、と。

心の中で、なにかが囁いた。

焦る指先は、しかし自分で主驚くほど冷静に精緻に動いていた。

ガウンの下のサブデッキから抜いた符を、残る2枚のデッキから袖口に落とした符と入れ替え、混ぜる。

もう何度もしてきた動作のように、淡々と、澱むことなく。
人形遣いの指がデッキにいかさまを施す。

——試験中「ゴリアテ人形」。

アリスの掲げた符と共に、ペジテの巨人が産声を上げた。



デッキに格納されていないゆえ、アリスはそれを手元には呼び出せない。完成の暁には質量と体積を『折り畳ん』で、常時は通常の人形と同じように使役出来る機能も組み込む予定だった

た。

だが今はそれも実現できていない。工房の地下、格納庫で眠りについていた巨人が雄たけびと共に起き上がり、外壁を砕いて姿を現す。

「うお!？」

工房の半分を破壊し、飛び出した巨人は身長12mと少し。森の木々からも顔を出す大きさの巨人は、邪魔な梢をへし折り、足元の木の幹を押し潰す。

アリスが、萃香との戦いをヒントに組んだスペルだ。大きければ強い——ごくごく当然な、それゆえに無視できない真理をついた帰結。頭が痛くなるくらいに単純なその発想は、しかし実現には想定外の困難を伴った。

単に資材の調達や動力機構の開発が難しいというだけではなく、巨人を巨人として動かすことは、小さな人形に精緻な細工を組み込むのに比べても遥かに困難で、無謀な試みだった。アリスの弾幕はあくまで精度と構力によって成り立つ。巨大なものを操作するだけのノウハウが全く足りなかったのだ。

それゆえの『試験中』。まだ完成もしていない、研究途上のスペルの一つ。

否、完成してなお、本当に手札に加わるかどうかとも怪しい。研究過程で一定の成果こそ出せてはいるものの、実働には遠く及ばず、凍結・封印指定として工房のデッドストックをひとつ増やすだけかもしれない。アリスは何枚も……何十枚とそうしたスペルを抱えていた。ゴリア

デもそうなるはずの一枚だった。

「なんだなんだっ!？」

ゴリアテが出現した時、ちょうど魔理沙はアリス邸を背にしていた。そこから衝撃で吹き飛ばされ、突然の事に魔理沙は状況を把握できていない。

地下工房で仮組みされた状態の、まだ装甲服も纏っていない姿。防塵衣の下着だけという、あられない姿で――巨人は、箒の上にしがみ付いた標的を見定める。

展開していたハブ用上級人形の操作が半自律に切り替わり、魔力回路にできた膨大な空きチャネルに、ありつたけのコマンドが突っ込まれる。神経回路に掛けられていた四つのリミッターのうち3つまでを外し、巨人が本来の反応速度を取り戻した。

「■■■■■■■■――!」

疾走は四歩で空気を割り、前傾姿勢の肩が風を裂く。身長12mの巨体が小型の人形と同じだけの精度で精密動作を可能にすれば、音速に迫る事は容易い。

ゴリアテは腰の鞘から、自身の身長にも届かんばかりの双剣を引き抜いた。無縁塚に流れ着き、苔生す鋼材から一番質のよい場所を選び、四ヶ月をかけて削りだした剣である。二対の刃が空を切り、抜剣と共に斬撃を刻む。ブレードはその先端に水蒸気の白い線を引く。音突き抜けた破裂音が連続して轟き、魔理沙の箒を狙い撃つ。

「うお……ッ!？」

音速超過の剣尖が森を薙ぎ、翻った剣が虚空に刃を引く。箒を跳ねさせた魔理沙をかすめ、さらに刃筋を返して地面を深く穿った。ゴリアテの振るう両刃剣は、西洋拵えでありながら押し斬ることに引き裂くことにも長けた、比類なき斬撃の担い手である。長さ8 m超の刃が空を踊るたび、鬱蒼と茂る森の木々が斬り飛ばされてゆく。

「つ……！」

引き戻されるブレードが梢を斬り飛ばす中、魔理沙は刃をかい潜って反撃のマジックミサイルを撃ち放つ。

練り込んだ魔力を飛ばす鏃は、しかしゴリアテの屈めた肩に弾かれた。巨人の纏う防塵衣には耐弾効果はほとんど無いが、単発の魔力弾では威力が低すぎてゴリアテの突進を止められない。防塵衣の肩口は裂け、装甲にはヒビも入って内側の機構も覗いていたが、その程度では巨人を撃ち倒すには到底及ばない。

如何に俊敏と言ってもなにしろ的が大きい。装備の不足もあり、防御力も十分とは言えない。それでもなお、この巨人にはマスタースパークやアースライトレイ、あるいはそれに属する高火力広範囲のスペルでなければ太刀打ちできないはずだ。

断言してもいい、だからこそアリスは、戦略上最も有効な指し筋として未完成の人形を動かしたと、魔理沙は確信する。分かりやすいほどの力押し、本来の主義主張を曲げてでも、魔理沙に有効打を与えるために。

「頭に血い昇らせてるくせに、こう言うところは嫌らしいくらい冷静だなッ」

吐き捨て——あるいは友人の手際を呪詛と共に賞賛し、魔理沙は箒を跳ねさせ、ゴリアテの刃の内側へと身を滑り込ませる。

しかし巨人は人ではなく、それゆえに人ではない動作を可能にしていた。振り切られた腕がねじれ、人間には不可能な向きに強引に畳まれ、両手剣の刃元が翻る。

眼前に迫る分厚い刃を、魔理沙は必死に避けた。

「くそ……!!」

人間と同じ数の間接を操作するだけでは絶対にあり得ない動き——それを実現するのに一体どれだけの魔力回路が必要なのか、考えるだけでぞっとする。

巨人はさらに動きを加速させる。翻る分厚い刃が、魔法使いを叩き落さんと宙を裂く。その切っ先が生み出す音速を超えた衝撃波だけで、森の木々がずたずたと斬り倒されてゆく。

だが——それでなお魔理沙は驚異的な集中力で、刃を掻い潜った。普段の彼女ならとつくに痺れを切らしている筈の意識を繋ぎ止め、ただ、ただ、ひたすらに避ける。

八卦炉に指はかかっていた。それでなお、彼女は得意の流星の射手の閃光を放つことなく、ゴリアテの繰り出す刃を避け、躲し、離れない。

それでもなお、魔理沙は避け続ける。

その狙いは明白——時間切れだ。

スペルには持続時間がある。当然のことだ。無制限に攻撃を可能にすることはそもそも不可能に近いが、際限なくいつまでも攻撃が続いていればそれだけで勝負が決まってしまう。

それゆえ弾幕³ここに用いるスペルには制限時間が課され、コストとして計上される。当然ながら持続時間が長いほどに高コストとなり、耐久スペルとして指定するとデッキに入れられるのは精々1枚。

つまり、スペルが強力なものであるほどそれを長時間維持するのはコストがかさむ結果となり、それだけデッキの総コストを制限を圧迫する。

そして、魔理沙はつい先日、太陽にも等しい無限のエネルギーをもち、桁外れの出力を惜しげもなく注ぎ込んで蹂躪の限りを尽くす地獄鴉と、地底で一戦交えたばかりなのだ。

弾幕における、ただ一つのシンプルな方程式。

避け続けていれば、勝つ。

その本義に従う限り、アリスの取った戦術は、致命的な悪手^{ブランドムーブ}だった。

真横に薙ぎ払われたブレードが魔理沙の脚をかすめる。グレイズとはとても呼べない衝撃。

そもそもこの剣自体が片方で数百キロはある巨大な鉄の塊だ。普段の被弾とは意味が違う。言わば音速で飛んでくる金床のようなもの。刃筋うんぬんを抜きにしても、掠めただけで足が膝下から吹き飛んでもおかしくない。それでもなお、魔理沙は符を投げ打つての緊急回避を取ろうとはしなかった。

放たれた突き of 切っ先が魔理沙の胸先を掠める。

果てしない緊張を強いられ、滲む汗で箒の柄をホールドする指が滑る。箒を握り締め直した、そんなわずかな隙ですらアリスは見逃さず、深く攻め手を撃ってきた

巨人が恐ろしい速度で踏みこみ、両手の剣を交差させて斬り上げ――振り下ろす。

掠っただけでもその質量で人体の半分は削り取る事が可能なはずの刃は、しかしわずかにスカートの端を破り取ったのみ。

ブレードの刃が鋭すぎたのが原因だ。顔が映るほどに歪みなく研磨された刃は、刃渡り8m近い長さにも関わらず、宙に固定されていない布を引き裂くだけの鋭さを兼ね備えていた。磨き込みが不十分であれば、魔理沙は剣先に引っかけられた服ごと絡め取られ、音速で宙を振り回されて良くて気絶、悪ければ脳の血管を破裂させるか酸素不足で廃人になっていたかもしれない。

「っ……は、っ」

急死の一生の中、魔理沙の口元には笑みが浮かぶ。

大きく裂けたスカートの下から太腿が大きく覗く。細くて白い肌には被弾の痕跡はない。

箒の穂を膨らませ、立ち乗った柄を蹴り飛ばすように真下へ。振るわれる大剣を掻い潜って軌道を跳ねさせ、回転半径5mの急速ターン。まるでゴリアテを翻弄するように魔理沙は飛び回る。

鋭い刃筋が幾重にも重ねられる中、箒の高速機動で振り回される魔理沙の懷から、ぱつと白い紙片が散らばる。

魔理沙の残符5枚——それらが全て宙に散る。

ポケットに納められていたスペルカードデッキが、グレイズのはずみで千切れ、中身をぶち撒けたのだ。宣言するための符を失うことは、それだけで致命的なミスになる。

弾幕ごっこの規範としては勝負を中断せねばならないハプニングだが、魔理沙はそれを顧みなかった。

「——え、？」

風に舞い散る魔理沙のデッキ——その内訳に、アリスは思わず目を擦る。

散らばった符のほとんどが、ただの白紙。

スペルを準備する前のブランクカードだった。

あまりのことに思考が理解を拒否する。しかし、事実は明白だ。魔理沙のデッキには、元から符がほとんど入っていなかった。彼女が用意していたのは、最初に切った「ブレイジングスター」と「アステロイドベルト」の2枚だけ。

その上で、彼女は——自分から七符を提示し、それに応じたアリスを、真っ向攻略するつもりだったことになる。

なぜ？

そんなのは決まっている。アリスに本気を出させるためだ。常に全力を出さないアリスに、これだけ手加減したうえで、それでもなお負けるのかとそう罵っている。

安い挑発だ。そう理解する。

——ふざけるな。

黒々とした怒りが湧き起こる。十数年しか生きていないような駆け出しの小娘が、この私を格下扱いか。

「アリス！」

アリスが歯を噛み締めた瞬間を見透かしたかのように、魔理沙の叫び。

なにひとつ後ろ暗いことなどないとばかりに、白黒の箒乗りは、王者の風格すらみせて堂々と宣言する。

「びびってんのか！ いいから本気で来いよアリス！ これで詰まらない敗北宣言なんてしてみやがれ。お前の家も工房も、次がないくらい徹底的にぶっ壊してやる！」

「……………、あなた、正気？」

声が冷える。

それは、魔法使いとして口にしてはならないことだ。それを言うなら、もう、戦争と同じことだ。お互いの領域に踏み込まないという、最低限にして最大の紳士協定を真つ向打ち破って、自分以外の魔法を認めないことを宣言する、魔法使い同士の最後通告だ。

「当たり前だッ！」

激昂とともに、魔理沙は弾幕を切り替えた。太陽光をたつぷりと浴びた光結晶がばら撒かれ、そこから煌めいたレーザーが前方に収束。ゴリアテの腕を狙いたがわず捕える。

通常弾こそ防ぎはするものの、今のゴリアテの装甲はそれ以外の攻撃には全く無力だ。対レーザーの儀装すら不十分な巨人は、肩を関節部分から両断された。振り回した勢いのまま、剣が腕ごと根元から千切れ、吹き飛んで轟風と共に森の木々を薙ぎ倒してゆく。

左右のバランスを大きく崩して傾いた巨人の膝めがけ、マジックミサイルが直撃。片足だけで体重を支えていたところに威力を逃がし切れず、巨人は膝を逆方向に曲げながら地面に倒れ込む。

「ゴリアテ人形」——スぺルブレイク。

あと、1枚。

アリスの技術を、魔法を、魔理沙の魔法が侵食してゆく。乱れ飛ぶレーザー、連射されるマジックミサイル。次々とチェックメイトが迫る。城塞も僧正も喪つて、残る手駒はわずかな騎士と兵士だけ。降参しろと理性が叫ぶ。

「アリス！」

凄まじい気迫にアリスは我に返る。

鬼気迫る表情で、魔理沙が迫っていた。

そうだ、あの時も——脳裏に記憶が奔る。輝く水晶宮の一室で、魔理沙は今と同じように、アリスを追い詰めた。繰り出した人形も、七不思議の魔法も、残らず踏み潰して——気持ち悪い笑顔を浮かべながら、容赦なく、アリスを害した。

魔理沙は魔女で、アリスは少女だったから。不思議の国の少女では、悪い魔女に勝てなかったのだ。

魔理沙が迫る。人形達にレーザーで迎撃を命じるが、既に酷使された魔力糸が熱を帯び、指手コマンドがエラーに塗れていた。魔力の伝達経路が熱を帯び、ロスが無視できなくなっている。限界が違い。いよいよ弾幕の密度が増す。人形が限界出力を維持し過ぎて熱を上げ、スペルの維持もできなくなつて詠唱の限界を叫び、補助回路に封じていた人工精霊の助力回数が見る間に尽きてゆく。

魔力枯渴のカウントダウンが迫る。残る数秒で仕留めきれなければ負ける。魔理沙も私ももう符がない。しかしアリスは一死、魔理沙は零死。これを当てても引き分けた、

あと二回、二回彼女を殺さなければならない。のこる数秒——あともう数射しかない。それだけの時間で、2回。二度、殺さなければ——

魔理沙が迫る。彼女の集中は未だ途切れていない。あと三枚、いや、五枚だつてこのまま避

け切つてやると、むしろ次が来ることを確信しているような表情。わたしがルールを破ると、確信しているような笑み。

背筋が凍る。

彼女の憤りが理解できない。

なぜ、自分はこんな所で、命にかかわる弾幕をしているのだろうか？ 理屈が合わない。意味が分からない。理解ができない。

ひりつくような焦燥感。歯噛みと共に、アリスは手元のブックベルトに指をかけていた。

魔理沙が迫る。胸が跳ねる、視界がくらみ頭痛が酷くなり、じわりと口の中に血の味。追い詰められる。符が暴れる。人形がガタガタ震えだす。煙と共に光線が乱れ、維持に回していた魔力が衰える。供給を断たれ確保していた魔素が急速に喰い潰されてゆく。予備も失せ、なけなしの回収機構も焼け石に水。あつという間に魔素が尽きる。わずか数フレーム。限界だ。鼓動が跳ね上がる。押さえこめない。残り数秒——いや、コンマ数秒。途切れる。魔理沙は避ける。細い隙間を、狭い空隙を、かすり、避け、身を潜らせ、まるで巫女のように——魔女のように。実体すらないかのように。

迫る、帽子がちぎれ、こぼれた金髪が風圧に飛ぶ。頬を血が奔る。人形が動かない。展開していた魔力系から、ずしりと重い手応えアリスを助けてくれるはずの人形達が力を失い、まるで鉛のように腕に、指に絡みつく。限界。力が残っていない。頭に血を昇らせたまま、全力を

振り絞ってしまった無様な末路。——否。私は慎重だ。いくらでも手段はある。切っていない手札はいくらでもある。負けない。最後まで、この勝負に負けても、私は——

「アリス！」

凄まじい怒号。その鬼気迫る気配に。アリスは涙と共に、恐怖と共に、ブックベルトを閉じる鍵に指をかけていた。厳重な封と見えた鍵は、わずか一撫でで解除される。

「ばさり、手に馴染む懐かしい感触。魔道書が風圧に押されて頁を開く。七色の魔法——不思議の国、御伽の魔法を記した、アリスの魔道書が——」

——ぱきん。

「え」

聞こえたのは、左腕に深々とヒビが入った音だった。



解放された魔道書は、ひとりでにその頁をめくり、風にはためくように無数の呪文構文を撒き散らしていた。どこからともなく喚起された魔素が目に見えるほどの濃密に入り乱れ、くる

くると火花の尾を引いて回り、表紙に充填されてゆく。

光を放つ魔法円が何重にも地面に浮かび上がり、あつという間に周囲を飲みこんだ。新聞記事でタラメに切り抜いて張り合わせたような呪力圏が展開し、物理法則までを塗り替えてゆく。

「あ……ぐ……、が……ッ」

がくがくと背中を震わせ、アリスは地面に突つ伏し、激痛にのたうち回っていた。頭に直接焼き鏝を押し込まれているような、言葉にするのも生易しい痛み、何度も何度も地面に額を打ち付け、悶える。口の中が鉄の味に満ちて、唾液が砂と混じって喉を削る。息がでず、代わりに何度もその場に嘔吐した。胃の中身などないはずなのに、臓腑がひっくり返ったように暴れまわる。舌を噛み千切るのも構わずに、歯ががちがちと震え、言葉もともに発することができない。

「アリスっ！」

遠くで、名を呼ぶ声が聞こえる。魔理沙だ。

彼女は少し離れた場所で、必死にアリスの名を呼んでいた。

見えない糸に手繰られるように、半ばほどで大きく割れたアリスの腕が持ち上がり、指先が宙空に円を描いた。

何もない場所に薄く線が引かれ、繋がってひとつの輪へと変わる。次の瞬間、輪の中には揺

れる銀色の水面が広がった。

《あーあ。また失敗か。稼働から四〇二四七時間——案外もたなかったなあ》

水面の向こうから、無邪気な声が聞こえる。

アリスが誰よりもよく知っている、少女の声だった。

同時、ぱきん、とアリスの左腕が根元から砕け、地面に転がる。まるで、力を使い果たしたとでも言うように。——アリスには出来ない事を、無理矢理行使した代償だとばかりに。

「つア——!？」

声にならない激痛に、アリスは地面を掻きむしった。みしみしと音が立てるほどに、自分で自分の頭を握り締め、地面へと叩きつける。

「アリス！ しつかりしろ！ アリスっ！」

駆け寄ってきた魔理沙の声が、何故だか途方もなく遠い。

それよりも頭蓋骨のなかの激痛があまりにも激しく、なにかを考える事すら億劫だった。早く楽になれるなら、このまま頭の中身を岩にでもぶつけて叩き潰してしまいたい。

《でも、最初の遠隔操作だしこんなもので上出来かな？ 御苦労さま、七番》

銀の水面が揺れる。接続された純粹鏡面^{アリスミラー}の奥から、飛び出してきたのは——まだ十歳に届くかどうかという、少女。

——その姿は、アリスが誰よりもよく知っているものだ。

小さな足音がさくりと地面を踏む。のたうちまわるアリスの前に歩み寄った少女は、地面を転がるグリモワールを拾い上げた。

主人として認定されたアリスにしか使えない筈の——魔界の禁書を。

魔理沙が目を剥くなか、彼女はにこりと微笑み——。

「久しぶりね魔理沙。……ちよつと、背伸びた？」

大きなリボンを揺らして、そう言った。

「……お前、誰だ」

「あら。数年会わないくらいでもう忘れちゃうわけ、魔理沙？ アリスよ」

口を尖らせ、友人の無礼を咎めるような仕草で腰に手を当てて、少女は言う。

「マーガトロイドではない、本物のアリス。」

魔界の造物主である神綺の娘にして、生粹の魔界人。生まれながらの魔法使い。死の少女、七色の魔法の使い手。

かつてのアリスと同じ姿をした少女は、そう名乗った。

「デタラメ言うな！ アリスはここに居る！——お前こそ誰だ！」

「なんだ、魔理沙までそいつのデタラメ信じちゃってるの？ 違うわよ。こいつはただの人形、

私の作った偽物のアリスよ。見てて？」

そう言って少女は笑い、手の中のグリモワールをばらばらとめくり始める。

上位コマンド。最優先で命令に割り込み。

製造番号七番の全管理権限の剥奪と、魔術リンクの閉鎖を実行。

最上位管理者権限「アリス」より、全人形の強制シャットダウン及びリブートを開始。

「つああああああ!!」

アリスは絶叫した。がくりと身体が傾く。繋がっていた魔力糸が筆り取られ、痛覚のフィードバックが脳を焼く。許容量を超えた激痛に魔力回路が感覚共有を制限、展開、配置されていた人形達がただの木偶人形になり下がって、次々と地面に転がる。

もぎ取られた腕からごっそりと熱が奪われ、折角充填した魔素が喪われてゆく。

「……ね？」

動かなくなったアリスの、折れた右腕を踏みつけて。

少女は魔理沙に誇らしげに胸を張ってみせた。

「ふふ、魔理沙まで騙せてたなら、ちよつとしたものだったのかな。もうちよつといいタイミングで種明かしできたら面白かったんだけど——まあ、しょうがないか」

「アリス！ おい、アリス！ 何やってんだ！ 立てっ」

「……む」。魔理沙？」

幼い口調で頬を膨らませ、少女は眉を寄せる。

ぱらりとグリモワールの頁をめくり、動かなくなったアリスを抱え起こそうとする魔理沙に向けて指を向けた。

どん、と噴き出したのは黄色の光。

周囲を薙ぎ払うように放たれた閃光は、魔理沙だけを選び、その場から大きく吹き飛ばした。

「失礼しちゃうわね。魔理沙、ちゃんと聞いてたの？ アリスは私よ。そこで転がってるのは偽物だっていつてるでしょ！」

幼い残酷さを覗かせて、地面を転がる魔理沙にくすぐすと微笑み、少女は地に伏せたままもかくアリスに向き直る。

「お喋りはこれくらいにしましよ。はやく済ませないとママにバレちゃうもんね」

わざとらしく溜息をついて、再びグリモワールを捲る少女に――

「――アリスから離れるッ！」

魔理沙は起き上がりざまに、懷から抜いた八卦炉を構えていた。

鋭い閃光が真横から、少女を直撃する。
が――

「んもう……さつきからアリスアリスうるさいなあ」

強力な妖怪ですら直撃は避けるであろう流星の閃光を、少女は回避する素振りすら見せなかった。少女の手にしたグリモワールから、次々と構文が溢れだし、防護障壁を構築。直撃の威力を吸収し、その高熱を完全に遮断する。

さらにグリモワールは自動で構文を編み上げて、魔理沙の撃ち放った魔砲を解析、魔素に分解して無力化してしまう。

「な……」

「いま、大事なところなんだから、魔理沙はちょっと黙っててよ」

最大スペルを無力化され、呆然となる魔理沙を、脚元から吹き上がった緑の輝きが包み込んだ。螺旋を描くようにうねる幾本もの緑の閃光は、目の細かい網のように魔理沙を取り囲む。肌を裂き肉を焼く鳥籠に阻まれ、魔理沙は再びその場を弾き飛ばされた。

「っ、アリス！ 起きろ！ 早く、逃げるんだ！」

手がじゅうじゅうと焼けるのにも構わず、魔理沙は箒を掴み、緑の魔法の編み上げた結界に体当たりする。しかしまるで鋼鉄の壁のごとく、魔法の牢獄はびくともしない。

「なんだよ！ なんなんだよ、お前っ！ アリスを離せ！」

叫ぶ魔理沙を無視して、少女が再度グリモワールが頁を宙に舞わせるなか――動かないアリスを庇うように飛び出したいくつもの影があった。

魔力糸で繋がった、アリスの人形達だ。濃密な魔素に動作不良を起こしながらも、人形達は陣形を組み、弾幕などという形式を無視して、目の前の脅威へと武器を叩きつける。

盾を構えた人形達は身を呈して前に飛び出し、人形達がアリスの身体を懸命に引きずって、少女の魔法から守ろうとする。

「邪魔」

少女が苛立つように呟くと、グリモワールが輝きを増した。凄まじい勢いで次々と頁が参照され、禁呪と古代語魔法を惜しげもなく注ぎ込んだ構文が組み上げられてゆく。

溢れだしたのは、青の輝き。

原初の七色に属する青、意味は支配。竜の顎のように鎌首をもたげた閃光が、人形達を打ち砕き、その牙でアリスを守ろうとした人形達を残らず噛み砕いてゆく。

「っ、やめ、ろっ！」

両手が血塗れになるのにも構わず、魔理沙は緑の光が織り上げた牢獄を掴み、声を振り絞って叫ぶ。残り少ない魔力を注ぎ込んで打ち込んだマジックミサイルも、全て牢獄の防護魔法に防がれ、もはや魔理沙にはアリスの名を叫ぶことしかできない。

「あ……あ……」

人形達が無慈悲に壊されるのを、肩を痙攣させながら、アリスはただじっと見ているしかできなかつた。手足が鉛のように重く、感覚すらない。痛みも薄れ、視界もぼやけてゆく。

自分の身体を動かしかたすら分からなくなっていた。

アリスは理解してしまったのだ。

自分が誰で、目の前の少女が誰なのかを。

少女が指を鳴らすと、アリスの身体は力を失い、その場に崩れ落ちる。

「それじゃ、——さよなら」

無邪気な笑顔を見せながら——少女はグリモワールを捲る。組み上げられる構文は赤の輝き。意味は破壊。七原色の中で最もシンプルな、純粹なる破壊の魔法。

「次のアリスは、もっとうまく作るからね」

「やめ——ッ」

叫ぶ魔理沙の視界の先。あどけない笑顔とともに——

吹き荒れる赤の魔法が、動かなくなったアリス・マーガトロイドを包み込んだ。

【八】君は彼女の元に居たと彼等は語り

大事なものは、失って初めて分かると言うけれど
もし何もかも投げ出して後悔一つしなかったら
私はどうすればいいんだろう？

Spell Card Bonus「人形遣いのレゾナンスデートル」



「あなた、少しやりすぎよ。もう少しおとなしく出来ないの？」
「大した魔法も使えないくせして、いきがってんじゃないわ！」

「究極の魔法を記した本を手に入れたのよ！」

「あなたたち人間には使いこなせない魔法よ。嫌でも、味あわせてあげるわ！」

「なんで倒せないのよ！」

「そうね、そうだわ！ わたしもママみたいな力をみつければいいんだ！」

「この子の名前？」

「決まってるわ！ 私と同じ、アリスよ！」

「さあ、今日からあなたはアリス！ わたしの代わりに、わたしの魔法を作るのよ！」



窓から差し込むカーテン越しの薄明かりに、目が覚めた。

見覚えのある天井——その必要もないのに毎日寝起きをしていた自宅の寝室。窓の外では青空の下小鳥たちが囀り、淡い緑の若芽が木々を彩る。

幻想郷の春は、今日も皮肉なほどに美しい。

「ん……」

まどろむには明るい部屋の中、もぞりと寝がえりをうつ。アリスの身体は柔らかなベッドの上に横たえられていた。清潔なシートとタオルケットは洗い立てのようで、陽の匂いをさせて心地よい。

「……………」

まだ、頭はどこかぼんやりとしていた。

ついさつきまで見ていた、寂寥感あふれる夢が、強く意識の中に残っている。

ふと喉の渴きを覚え、アリスはベッドの上に身を起こそうとし——その途中で大きくバランスを崩し、そのまま横向きに倒れ込んだ。

同時にぐらりと頭が揺れる。軽い貧血だろうかと訝りながら、ベッドの縁に手を伸ばそうと

するが……そんな単純な事が、まるでうまくいかない。

(あれ……?)

手足に思うように力が入らない。思考も霧がかかったように曖昧で、何故自分がこんな所に居るのか、その理由が分からない。

シーツの上に転がる身体に自由が利かないことに焦り、そしてすぐに原因をみつける。

寝間着の左の袖が、空虚に揺れていた。

「……あ」

掠れた声が、喉から漏れた。

瞬時に意識が覚醒する。

同時、ずきり——と。冷たい刃物を刺し込まれているような鋭い痛みがやってくる。疼痛は存在しない左腕の形をたどり、肩の付け根から指先まで、神経の位置をなぞるように疼き、脈打つ。

幻肢痛に痛む左の袖を、反射的に右腕で掴み。アリスはベッドに蹲る。

「っ……………」

無いはずの腕が、今更のように激しい痛みを訴えていた。

脈打つ幻肢痛は、空虚に欠けた己の不完全さを示す証のように、一拍ごとにアリスの心を穿つ。それに呼応するように、頭の芯にも鈍い痛み。こちらは古傷のように鈍く、けれど容赦な

く、頭の奥を執拗に反響する。

記憶を失うまでの出来事。

魔理沙との弾幕勝負。

その切欠となった地底の怨霊騒動とその探索行。

緋色の霧、妖怪の山を訪れた風の神。六十年に一度の開花。偽物の月と終わらない夜、三日おきの百鬼夜行、消えた春と桜の異変。かつてあったこと、いくつもの思い出。忘れていた記憶。全てが堰を切ったように溢れ、押し寄せてくる。

視界がぼやけ目が潤む。せめて声は上げまいと、きつく目を閉じ、顔を擦りつけるように必死になってシートを噛み締める。

ずきずきと繰り返す痛みこそが、今の自分に許されたただひとつの証のようにすら思えた。……どれくらいそうしていたか。

緩やかに引いてゆく痛みの中、涎と涙でべとべとになったシートから顔を離し、静かに息を整える。顔をぬぐおうとし——左腕が無いのを思い出して、ぐりぐりと枕に顔を押し付けた。

「……生き……てる」

初めに口を衝いて出た言葉に、喉奥から苦笑が込み上げてくる。

つくりものの身体が、生命を欲するなんて実に滑稽な話だ。

ひとりで満足に起き上がれもしないことに情けなくなりながら、アリスはいつものように人

形を呼び寄せようとし——同時に背筋から指先を貫く強烈な灼熱感に、再び声を失った。

「——っ！」

痛みというよりは——焼きついた神経が千切れて焦げてゆくような。錆ついて動かない器械を、無理矢理動かした時の軋みのような。大きな欠落を思わせる衝撃。満足に声も出せないまま、ベッドの上に蹲って。アリスは理解する。全身から、魔法を使うための経路——魔力を伝え、魔素を呼び込み、呪文を理解し構文を組み立て、魔力糸を動かして人形を動かす全ての機能が、失われてしまっている事に。

上位コマンド。最優先で命令に割り込み。

製造番号七番の全管理権限の剥奪と、魔術リンクの閉鎖を実行。

「は、っ……、あ、はははっ……」

ぜいぜいと息を荒げながら、アリスの唇からは乾いた笑いが漏れる。

人形の操作どころか、それまで当たり前のようになしていた、魔法を魔法として理解することすら、アリスの身体は受け付けない。

眠っている時でさえ常時動いていた人形達とのネットワークも全て焼かれ、断たれ、失われ、魔力糸はピクリとも動かず、人形を動かすコマンドも、人形達からの戻りの信号も、何ひとつ

感じ取ることができない。

「っは……あは、……ははは……っ」

もはや、自分が「人形遣いアリス・マーガトロイド」ですら無くなったことに、アリスは痛々しい笑いを堪え切れなかった。

乾いた笑いがひとしきり続いた後、虚脱感の中でアリスはのろろと身を起こし、右手だけで苦勞して寝間着のボタンを外し、片肌を脱ぐ。

「……………」

空っぽの片袖の中身は、清々しいくらいに空虚だった。

脱ぎ下ろしたブラウスの下、左腕の付け根は肩の部分で根元から失われている。その切断面には細かなひびが入り、骨も肉も見えない、ざらざらとした触感の——まるで陶器が欠けたような破断面をみせている。

血を流さない傷痕——いや、破損。

これまでの人生で何度も傷付いては血を流し、脈々と命を継いできた自分の身体が、そこだけ生命を模すのをやめた。そんな傷だった。

「……夢じゃ、なかったのね」

目を瞑って、もう一度開けば、すべて夢のように。そんな子供染みた結末を期待をしていたわけでもないのに、口を衝いて出たのは芝居がかった言葉。

何もないと分かっているはずなのに、空っぽのはずの胸の奥は、執拗に痛み続けていた。

「――アリス、起きたのか？」

不意にドアの外で声が聞こえた。

「……………」

無言の拒絶はあっさりと破られて、見慣れた白黒の装いを纏った魔法使いが、湯気を立てるトレイを抱えて侵入してくる。室内なのに三角帽子を被ったまま、いつもの格好の上に割烹着という珍妙な姿だ。そんな魔理沙を見て、この状況は全部彼女の仕業かと、アリスは口に出さずに納得した。

「……弱つてるところに付け込むのは流石ね」

「なんだ。もう憎まれ口叩けるくらいなら平気だな」

そんな口を利く魔理沙は、アリスが見てもはつきりするほどに憔悴していた。

今すぐ何もかも忘れて倒れてしまいたいのはこちらだというのに。自分の事などどうでもいいとばかりに、アリスの傍に腰を下ろした。

「……服くらい着ろよ」

「いいでしょ、今更隠してもしょうがないわ」

「そういう問題じゃないぜ」

醜い自傷痕を見せつけてやるような時の意地悪い気分で、魔理沙に反発してみせる。惨めな

自分を晒すことで、後ろ暗い嗜虐心と被虐心を満足させる、そんな自虐だ。

魔理沙は仕方ないなとつぶやき、アリスの背中に手を伸ばし、寝間着を羽織り直させた。

「飯、食うだろ？ もう2日も眠ってたんだ」

「……いらない」

「遠慮すんな。せつかく作ってやったんだぜ？」

テーブルの上で湯気を立てる食事——おそらく雑炊か何かだろう。見た目に反して魔理沙の料理のレパートリーは大きく和食に偏っている。こちらの意向を無視して食事の用意を始めようとする魔理沙に、アリスは幾分強く、拒絶の意志を告げた。

「そういう気分じゃないのよ。……別に、食べなくなつて平気だし」

「……そうかい」

魔理沙は不貞腐れたように席を立つと、これ見よがしに匙をとって、碗の中身を口へと運ぶ。半分棒読みで、ああ美味いぜ、と独り言を挟んでは、一口、二口、まだ熱いだろうに冷ましもせず、意地を張るように中身をかき込んで——がたとと乱暴に碗を置いた。

「欲しかったら言えよ。まだあるから」

取えて話題を逸らそうとする魔理沙に、アリスは口元を歪めて声を投げつける。

「魔理沙。私を笑いにきたの？」

「……………」

不意の一言に、魔理沙の声が色を失っていた。

「……違うぜ。そう見えたか？ だったら、悪かった」

魔理沙は、帽子の前をそっと引き下ろす。こうして視線を隠すのは、なにかを言いたくない時の魔理沙の癖だ。

「……どうして謝るの？ 別に遠慮しなくたっていいわ。本当のことだもの」

震えた声の魔理沙に、アリスは自嘲を返す。

これは当然の報いなのだ。造物主の意に適わなかった人形は、廃棄される。『アリス』に成れなかった人形は、ジャンクとして処分される。それだけのことだ。

「そうじゃない。私は、お前に酷いことを言っただ。だから」

「——人形たちの事かしら？ 馬鹿ね。魔法使いなんて皆そんなものよ。お互いを理解しようなんて思うことがおかしいの。魔法使いはね、自分の理想とするもののために、それ以外の全てを犠牲に捧げて殉ずる生き物よ。私はそうやって魔法を求めて、『魔法使い』に成ったの。あなた人間だから分らないかもしれないけど——」

そう言って、アリスはふいに言葉を切った。

こみ上げてくる笑いに、皮肉げに口元を緩め、

「……御免なさい。今のは嘘ね。……私は、魔法使いに『成った』ことなんて一度もないもの」
生まれた時からこの身体だものね、と。アリスは自嘲を浮かべる。魔理沙はなにか言いたそ

うな顔をしかめるが、苦勞してそれを飲み込んだようだった。

「……腕。な。お前の腕」

「ああ」

一瞬何の事かと迷い、すぐに自分の腕の事だと知れる。ほかならぬ自分の身体の事だというのは、それがここにはないというのがやけに滑稽に思えた。

「なんとかならんかと思つたんだが、無理だった。……せめて、持つてくるくらいできれば良かったんだけどな」

仕方のないことだろう、とアリスは思う。

アリスの身体は既にアリス・マーガトロイドという個体を保持できなくなりつつある。自分の身体を離れたことで、本体との繋がりを断たれた腕は、ものの数秒で塵と砕け、風に溶けて消えてしまっただろう。

もし何らかの方法で腕を保持していたとしても、それをもう一度自分の身体に繋げ直すことは、恐らくできない筈だった。そして——恐らく、残っている部分も遠からず同じ運命をたどることとなるのは想像に難くない。早ければ数日——遅くとも一年は保たないだろうと、アリスは踏んでいた。

「——寿命の事なんて、もう気にしないと思つてたんだけど」

そう遠くない自分の死を想い、アリスは自虐の笑みを覗かせる。

この身体は——上位命令者たる『アリス』によって、アリス・マーガトロイドを演じる事を止めてしまったのだ。

「なあ、アリス。あいつの言ってたこと、一体どこまで本当なんだ？」

否定を期待しているのだろう、縋るような視線を向ける魔理沙に——

「……全部よ」

アリスは素っ気なく答え、ごろんとベッドの上に身体を倒す。

……そう。思えば。

七色の人形遣い、アリス・マーガトロイドの人生は、全てが虚構でできていた。



全ての始まりは、魔界。

数年前。頭界と魔界とを隔てる『門』の解放を契機に、魔界の生物たちが幻想郷へと溢れ出す異常事態が起きた。それは魔界のうち、勢力拡大をもくろむ一派が、観光会社を装って起こした策謀だったのだが——世界を跨いで騒動はすぐに両者の中枢の知る事となり、異変解決のため、博麗の巫女や魔理沙たちは神社裏手の『門』を超えて、魔界へと踏み入れたのだ。

そこでアリスは、初めて霊夢や魔理沙に出会い、彼女達に二度も敗北した。

書庫から持ち出した第一級の禁書をもつてしてもなお、アリスの魔法は二人に及ぶことはなかったのだ。巫女やその相棒である魔女の本質を考えれば、不自然なことではなかったのだが——当時はまだスペルカードも命名決闘のルールも定まっていなかった頃。勝敗は決定的なものだった。

そしてそれゆえに、幼いアリスには自分の敗北を受け入れることは出来なかった。

二度の敗北を経てもなお、己の未熟さを学ばなかった少女アリス。彼女が七色の魔法を超えて欲しかったのが——創造主たる母の、魔界の神である神綺の力だった。

もとより、母のような偉大な造物主になりたいと考えていた幼い心は、その残酷性のままに一体の人形を作り出した。その目的は神の存在証明、……すなわち万物の創造を可能とする、生命の創生を実現するためだった。

禁書はアリスの願いを叶えるべく、詰め込まれた禁呪と古代魔法を吐き出して、主人の欲するままの理想のアリス、一人の人形遣いを組み上げたのである。

「生命の創生。あの子は——『アリス』は、神の力をそう解釈したのね。だからあの子はそのために、グリモワールを使って自分の分身を作り上げたの。完全自律人形を作ることを生涯の目的とした、魔法使いとしての自分自身をね。……それが、私よ」

「お前は……いや、あいつは、元人間って話じゃなかったか？」

「偽装よ。私が幻想郷にいても違和感のないように、グリモワールが細工したの」

創り上げられた人形は、ご丁寧な事に『アリス』自身の成長した姿を模していた。博麗の巫女や生意気な森の魔法使いに負けないように、素敵なレディになった自分を見せつけるためだ。魔界人の寿命は人間の数十倍にも及ぶ。『アリス』にとつては、わずか数年で自分の年齢が追い抜かれてしまうことを嫌ったのである。

博麗大結界に隔てられた幻想郷に送り込まれるにあたって、人形は偽りの記憶を与えられ、主人の命令が無くともアリスとして振舞うことを命じられた。

「私の『魔法』は、その時に決められたの」

神の力の存在証明のために必要な、己の複製という命題。それを魔法として課され、アリスは幻想郷に「元人間の魔法使い」として紛れ込まされた。

そして――あの終わらない冬の中で。

アリスは霊夢、魔理沙と『再会』する。知っているはずなのに知らない。初めてなのにそうではない、どこかずれた出会い。

そもそも何もかも、最初から。ちぐはぐにボタンをかけ違えていたのだと、アリスは思う。「生命の定義は千差万別だろうけど、あの子はそれを、自ら命を作り出し、それを受け継いでいくことと決めたわ。つまりそういうことよ。あの子に……完全自律人形として作られた私が、自分の手で完全な生命である自律人形を完成させた時、生命の創生は成就されて、あの子は神に等しい力を得たことの証明になるの。……私はそんな事も知らないまま、本当の魔法使いに

なるために、自律人形を作り続けていたってことね」

……けれど。その希望もいまや潰えた。

アリスは、魔理沙との交流で芽生えた、人形たちの命の萌芽の可能性を踏み躪り。

魔法使いとしての矜持をかけた魔理沙との決闘にも敗れた。

そしてついには、創造主から自分自身に課されていた役割すらも失ってしまったのだ。

「結構、堪えるわね。……自分が無価値だって言われるのは、あの子たちもこんな気分だったのかしらね。相手の気持ちになって考えなさいなんていうけど、こんなにはつきり思い知らされるとは思わなかったわ」

小さく肩を上下させ、アリスは後ろ暗い笑みをこぼす。

魔理沙が何も言えないのを良いことに、自虐を見せつけるようにして、空っぽの左袖を握り締めた。

「……ふふ。なんならこのまま、不完全な人形として壊れてやるのもいいかもしれないわ」

少なくとも、それで『アリス』の魔法を一つ挫くことができる。後ろ暗い復讐を口にして、アリスは嗤う。簡単な事だ。このまま何もせずじっとしていれば、そのうちアリスは壊れて動かなくなる。これほど楽な復讐があるだろうか。

——おそらく『アリス』は、それを露ほども復讐と思わないだろうが。

「ごめん。……少し、一人にして」

そう言つて、アリスは魔理沙に背を向けるようにベッドに潜り込んだ。

が、白黒魔法使いは氣を利かせるどころか、じつと立ちつくしたまま動く氣配はない。

「それでお前は、黙って消えるつもりか」

「……………」

声が出なかつたのは図星だつたから。

そんなに分かりやすい顔をしていたかと、アリスは自嘲した。

「だって、あなたの友人は私じゃないわ。……私はただの人形。それも、役目として課された魔法への到達にも及ばなかつた、アリスにもなれないのに、自分をアリスだと思い込んでいた、滑稽な失敗作よ」

「それと、お前がいなくなる事とは、関係ないぜ？」

「計算をし損じたメモを取つておいて意味があるのかしら？　ねえ魔理沙。分かつてゐるの？　人形でなくなつた人形が何の役に立つの？　私はもう人間の真似すらできなくなつたのよ。魔界であなたと会つたのはあの子。戦つたのもあの子。グリモワールを持ちだしたのも、もう一度あなたたちに負けたのも、その後で友達になつたのも、全部あの子。私じゃないの。あなたとの思い出も、出会いも、全部ニセモノなのよ」

「私は、ここにいるアリス・マーガトロイドに聞いてるんだがな」

耳元で声が聞こえたと思つた瞬間、アリスは襟首を掴まれていた。

息が届くほど、間近に顔を寄せてくる魔理沙に、アリスは澀んだ瞳を向けた。

「お優しい事ね、魔法使いさん。でも同情したって無駄。私はただの人形だから、悲しみもしないし悔しがりもしないの。最初に刷り込まれた何万通りの台本の中から、あなたの態度に相応しい台詞を読み上げてるだけよ。だから、同情も、憐れみも意味がないわ。

……あなたのやつてることは、子供の人形遊びと変わらないのよ、魔理沙」

かつて月の頭脳こと八意永琳は、アリスの操る人形を評して、操ることのできる人形には心があると云った。その意図を確かめるために始めたのが人里での人形劇だが——結局、アリスは習慣になるほど繰り返し返したそこに、何も意味のある結果を見出すことはできなかった。

なるほど確かに観客達は生きているように動くアリスの人形を見て、そこに心を見出しているのだろう。

だが、アリスに言わせれば、それは錯覚。

アリスが命じ、人形達を動かしている間だけ、かりそめのように存在する心——それはアリス自身の心に他ならないのだ。

「あなたがそれに感情移入するのは勝手だけど、それは私には関係のないことよ。あなたが用事があるのは、本物の『アリス』の方でしょう？」

「違うね。終わらない夜の時に背中を預けたのも、お茶をしに立ち寄るのも。地底で私をサポートしたのも、全部、ここにいて、アリスおまえとの思い出だ」

「ふふ。私との思い出ね。……ねえ、魔理沙。ご高説結構だけれど、それで私はどうすればいいの？ あなたの真摯な説得に涙を流して、卑小な私の誤った考えを涙ながらに反省して、あなたに感謝と生涯の忠誠を誓えばいいのかしら？ 生憎と私、人間じゃないからそういう機微は分からないのだけど」

「……アリス」

「ああ、でも、それもいいかもね。あなたの従順な従僕になるなんていうのも、目的を失くした人形の末路には丁度いいのかも。……そう言えば確か、あなたも侍従スレイブを探していたわよね」

「アリス。やめろ！」

強い叱咤に、びりびりとガラスが揺れた。

こんなにも強い言葉を魔理沙が放つのを、アリスは初めて聞いた。

魔理沙は眼を反らさない。アリスの胸倉を掴み上げたまま、一言一言を区切るように、

「自分のやってきた事を、否定するな。どんなに無駄でも、くだらなくても、叶わない夢に向かって努力するのは、馬鹿な事だなんて言うな。それを無意味だつて言うのは、」

一息。

「私の魔法を、馬鹿にしてるつてことだ」

魔理沙は赤くした目をそらさずに、じつとアリスを見つめてくる。

弾幕ごっここの時と同じだとアリスは思った。魔理沙はずっと憤っている。けれど、それは

アリスのためではない筈だった。いくら拒絶されても、罵声を浴びても執拗に食い下がってくる魔理沙の意図が、アリスには分からない。

「もう一度聞け。このまま黙って消えてくつもりか？ お前にはやることがあるんだろ」

「それも、その気持も夢も、全部——あいつに作られたものよ」

「始まりなんてどうだっていいんだ。私が聞いているのは、今のお前の気持ちだ！ アリス・マーガトロイド！」

叱咤のように、強い言葉は。

雫とともに、ぼたぼたとベッドの上に落ちる。

強がりと共に赤くした目元を擦り、魔理沙はじつと返答を待った。他の答えなど認めないとばかりに。

「アリス。お前は、お前は、私の……っ」

途中までを言葉にしかけて、けれど魔理沙はその続きを飲みこむ。今は口にすべきではないとばかりに。

「……他に何を答えても、認めてくれないなら、選択を迫る意味がないわ」

言葉に詰まった魔理沙の手の力が緩んだのを見計らい、その手を振り払う。

どさりとベッドに落ちた身体がかしぐのを、辛うじて右腕だけで支え、アリスは魔理沙に背中を向ける。

「帰って。……もう話すことはないわ」

「……………」

長い、

長い、沈黙があつた。

やがて魔理沙はもそもそと割烹着を脱いで、ゆつくりとアリスに背を向ける。

たぶん——これが最後の別れになるだろう。そう思いながらも、アリスは振り向くつもりなかった。

ぎし、ぎしと床を軋ませて——魔理沙はゆつくりとドアへ向かう。

そして。

「でもな、アリス。お前には、お前にだけは、気付いてやって欲しかったぜ。……お前には、本当にあいつらの心が、見えてなかったのか？」

魔理沙のものとも思えない、細い声。渾沌とうねる感情を全部腹の奥に飲み込んで、ただ、事実だけを淡々と告げるような、そんな声だった。

「……お前の人形たちは、お前の言うように、本物の自律人形じゃなかったのかもしれない。喋って、動いて、喜んだり、悲しんだりしてたのも全部、ただの動作エラーで、私の言うような魂なんてなかったのかもしれない。」

——でもな、それでも！ あいつからお前を守ったのは、その人形たちなんだよ！」

血を吐くような叫びへと変じた魔理沙の声に、意識せず——アリスは視線を持ち上げていた。ロクに見てもいなかったテーブルの上に、ボロボロの人形達が腰かけている。

全員が全員、泥だらけで煤だらけ。あちこちがほつれ、千切れ、それでも健気に身を寄せ合っていて、ベッドの上に伏せるアリスを見守るように、そこに並んでいた。

よく見れば、彼女達のいたるところには下手くそな補修の跡がたくさん残されている。よほど不器用な主人を持ったのだろう。

道具として作り、魔法のための礎としてきた、無数の人形たち。今はもう動かなくなった彼女達が、けれどじっと、アリスの傍に、——すぐそこに居た。

アリスは呆然となり、思わず身を起こす。

「……でも、この子達は」

人形遣いの理性が否定する。半自律稼働の人形達は、あくまでアリスの脳の一部を借りて疑似的な思考を行い、主の意図に従って動いているだけだ。そこに魂はなく、意識はない。

彼女たちは人形だ、どこまで分解しても、その身体に魂は見つからない。

否、そもそも、アリスを模しているだけの人形である自分が、在りもしない魂を見つけることなんて出来っこないのだ。

その、はずだった。

「考えてみるアリス。お前は今ここでそうやって不貞腐れて、いじけながら喋ってる。そのお

前は、どうして今ここにいる？　どうやって今壊れずに生きてるんだ？　答えろ、答えてみろよ！　アリス・マーガトロイド！　お前がただの道具で、あいつの命令通りに壊れて死ぬのが正しい役目だったら、どうして、今、お前はここにいるんだ！

私には人形の事は良く解らないけどな。仮に、そいつらがただの人形で、喜ぶのも、悲しむのも、全部、全部お前が動かしてるだけだったとしても！　お前は言っただろう！　人形ってのは、もう一人の自分だって！」

魔理沙の叫びを、その嘆きの感情を。アリスは知っている。
悔しさ、だ。

願い、努力し、繰り返し、それでもなお叶わない目標に、届かない理想の高さに、無力な自分、唇を噛み締めて俯く——その時の悲痛な想い。

「今、こうしてお前が、アリスが生きてる。それは、お前自身が望んだことだ！　そいつらがもう一人のお前自身なら、お前はあの時、死にたくないって願ってるんだろう！

私のことなんざ信じられないならそれでいい！　でもな、お前が、こいつらのことを信じてやらなくて、どうするんだよッ!!」

人形は命令に絶対服従だ。死ぬなど言われれば死なない。死ねと言われれば死ぬのだ。
その筈だ。

……それなのに。

それなのに、それなのに。それなのに！

『アリス』はアリスに、死ねと命じ、アリスは、己に——死にたくない願った。

「……………ッ」

強い音を立てて扉が閉まる。ドアの向こうに魔理沙の姿が消えてからもしばし、アリスは呆然としていた。

信じられない思いで、のろのろと立ち上がり——苦勞して、テーブルまで歩み寄る。

人形達はどれも、稚拙な継ぎ接ぎの姿をしていた。よほど不器用な主人を持ったのだろう。それでも、一度は復元不可能なまでに吹き飛んだはずの彼女達は、こうして——物言わぬまま、健気に主人の傍に控えている。

アリスの震える指先が、小さな手をそつと掴む。

人と同じ姿をして、人の傍に寄り添う、小さなヒトガタ達は。

けして、アリスの手を振り払うことはない。

「……………そう、なの？」

呆然と、アリスは問うていた。しかし人形達は無論、それに答えることはない。答えることができるのは、アリス自身だけなのだ。

「……………」

もう限界だった。堰を切ったように感情が溢れだし、頬を、喉を伝い落ちる。

まるで、幼子のように。

アリスは泣いた。

「……………ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……………」

一人きりの工房の中に、膝を折り、腕を抱えて。丸くなる少女の頬に次々と涙があふれ、手のひらを、床の上を、いくつもの雫が濡らしてゆく。

ガラス球と変わらないはずの眼が、ぼやけ、霞み、熱く疼く。
空っぽのはずの胸が軋み、痛む。

嗚咽、叫び、嘆き。あれだけ痛めつけられても、絶望しても、流れることのなかった涙が。アリスの頬を伝って溢れ落ちて行く。その感覚を知っているものは、こう呼ぶだろう。

——後悔、と。

ドア一枚を隔てた廊下で、アリスの嗚咽を聞きながら、魔理沙は上を剥き、帽子のつばを引き下げた。



地下の工房には、熱気が満ちていた。

わずかな魔力を節約しながら、多くの人形達が工房長人形の指示の元、忙しくあちこちを

走り回っている。背中に繋いだ臨時の魔力糸——糸と言うよりはロープに近い外見だが——を通じて、工房隅の魔力炉が唸りを上げ、動力を供給しているのだ。

応接室から繋がる階段の入り口から、顔を覗かせた魔理沙が声をかける。

「精が出るな」

「長年かけてやってきた事を一週間で済ませなくちやいけないんだもの。休んでる暇はないわね」

何しろ、今のアリスは魔法使いとして初心者同然だ。初歩の初歩たる実践者の階梯から、あの『アリス』に対抗できるようになるまで、ひとつずつ魔法を学び直さねばならない。

こういう時は、魔法使いの身体が心底有り難くなる。魔法を使うためには一切無駄のない身体は、睡眠も休息も必要としない。

『アリス』との再戦。

——それが、今のアリスと魔理沙の、共通の目標である。

それが何の解決になるのかはわからない。けれど、彼女に立ち向かわなければ自分はどうどこにも進めないことをアリスは確信していた。アリス・マーガトロイドの全ての始まりが彼女であるのなら、どんな危険があろうとも、再びそこに向かわねばならない。

「別に、あなたまで付き合う理由はないのよ？」

「馬鹿言うな。魔理沙さんはそんなに薄情じゃないぜ。——それに、まだお前には人形を返してもらってないしな」

素っ気なく答えて背を向けた魔理沙の耳が赤いの、アリスは気付かないふりをする。

再起を決めた日まではあと四日。フル稼働の工房では急ピッチでそのための準備が進められている。完璧に敗北した状態からそれでできるだけの準備をしなければならないのだから、時間はいくらあっても足りなかった。

「ブン屋が煩かったから追い払っておいたぜ。すぐに戻ってくるだろうけどな。……最近あいつら数が増えたせい、しつこくてかなわんな」

「そう、ありがと。一応こつちでも警備はしてるから。ずつとは無理だけど、あと数日くらいならなんとかなると思うわ」

微笑むアリスの左腕には、無骨な義手が繋がれている。

「そつち、利き手じゃなかったのか？」

「人形遣いにそんなものあるわけないでしょ」

あるいは、元々そんなものが産まれえない身体だったのかもしれないが、アリスはそこへの言及を飲み込んだ。

いくつも人形の腕を継ぎ直そうとしてみたが、どれだけ精巧に作った人形の腕も、アリスの

身体は受け付けなかった。

だからこの義手は動作には魔法を用いない、純粹な機械式の腕だ。河童の工房による作品である旨を記す刻印が、手の甲の外板部分にしっかりと打ち込まれている。

作成者は河城にとり、詳しい事情は聞かずにいて欲しいと無理を言ったが、彼女は嫌な顔一つせず、魔力を一切使わない機械仕掛けの義手という難題に要請通りのものを用意してくれた。包帯を巻き付けた指をゆつくりと動かし、ゆるく拳を握る。指を握る、それだけの動作にも1秒弱を要した。この腕には魔術回路がまったく備わっていないため、人形を用いた魔法には使えない。素人同然の人形劇くらいなら不可能ではないだろうが、精巧で高度な操作の要求される戦闘にはまず使うことが出来ないだろう。

しかしそれでも、腕をなくした身体がそれとして覚える前に、こうする必要があった。主人の我儘で壊された自分が、片腕のない姿を『自分』として、自己を人形として認識してしまう前に。このちっぽけな魂、アリス・マーガトロイドとしての形を保つための、精一杯の抵抗であった。

包帯で覆われた腕は、歪ながらも、しっかりとアリスの意志に従って動いている。シリンダーが動き歯車が擦れる音が気にはなったが、ヒトガタを取り戻した身体は従前よりも大分復調していた。

突貫作業ゆえ、試作品同然で十分に動作確認ができていないのが心残りではあるが――

「何が起こるかは、やってみるまでわからない、でしょ？」

「まあな」

魔理沙はふいと顔を反らす。一人前に照れているらしい。

工房のありったけの資材をかき集め、破損した人形から使えるパーツを回収し、あらたに三十五体の人形を仕上げた。無事で済んでいた人形も揃えて兵力は百と十七体。これでも魔界に殴り込みをかけるには不足だったが、贅沢は言っていられない。

《任シトケ！》

《出番ダゼ！》

それらを統括するのが赤と青の装甲服に身を固めた2体。彼女達は、『アリス』に敗北した時から新たに作られた、半自律稼働の人形だった。

個体識別名はそれぞれ『上海』『蓬莱』。

以前にも述べたとおり、元来、アリスのスペルカードにおいて名前を持つ固有の人形は存在しない。アリスの使役する人形の中で、稼働時間も長く経験を蓄積した上級人形が、使い魔と誤解され、そう呼ばれているだけである。

だが、この2体はそれらとは異なる。

これまでのアリスの魔法とは根本的に別の概念で生まれた人形達であった。

彼女達は半自律型の上級人形の構造をそのままに、操作における自律回路にある種の菌種を

用いた人工脊髄を組み込んでいる。頭脳と神経系を自己修復・増殖可能な粘菌のネットワークで置き換えた——いわゆる人造生命、ホムンクルスだ。

原始的ながら、彼女たちにはアリスとは独立して思考・判断可能な自我があり、主人と自分のより良い共生関係を目指して独自に思考、行動することができる。

今はまだ生まれたばかりの彼女達だが、その思考回路にはこれまでアリスが培った人形達の行動記録の全てがそのまま受け継がれている。彼女達は主人であるアリスと共生関係を結びながら、経験を積み、相互の関係を模索しながら成長していく自己進化型の人形であった。

彼女達とアリスを結ぶ魔力糸も、大図書館の魔女の協力によって錬金術の粹を尽くして製造した、ミスリル合金製に新調している。伝達率は4割も向上し、帯域をこれまでよりも大きく確保できていることが実証済みだった。

《ソレヨリ、アッチハドーナッテンダ！》

《ノンビリシテル時間ネーンドゾ！》

『上海』『蓬莱』に詰め寄られ、魔理沙は何とも味わい深い表情を浮かべる。

「……元氣いいのは結構だが、口が悪いのはどうにかならないのか、これ」

「あら。言葉を教えたのはどこの誰だったかしら」

「……………その、まあ、なんだ」

《他人ノセイニシテンジャネーゾ！》

《責任取りヤガレ!》

人形達にやりこめられ、魔理沙が助けを求めるように視線を向けてくるのを見て、アリスはくすくすと笑う。

自分の弾幕に他社の要素——コントロール不可能な他人の意志を介在させることは、以前のアリスにはけして許容できないことであつたはずだつた。以前のように魔法を使えないことが、かえつて背中を押してくれたと、アリスは自嘲する。

「形振り構つてられないだけだね」

魔理沙も苦笑して頷いた。

「でも、そうね。魔界^{まがい}に行く方法、伝手は掴めたの?」

「任せとけ。魔理沙さんに不可能はないぜ」

胸を張つて見せる魔理沙だが、その進行が芳しくないのは明らかだつた。しかし、魔界との交流が容易いものではないことはアリスも良く知っている。

多くの魔法使いにとつて羨望の世界である魔界。それゆえに、軽々しく魔法の禁忌に触れないよう、交流は厳しく制限されている。

博麗大結界ができるよりも遥かに昔、まだ魔法が科学と分かれていなかった時代こそ、魔界との行き来は比較的ゆるやかだつたともされるが、現在の幻想郷において干渉は禁じられ、ごく一部の例外を除いて接触は不可能だ。

そのひとつが、博麗神社の裏手にある魔界との門。ポータル

数年前の異変（当時はその言葉もなかったものだが）で解放され、魔理沙と霊夢が魔界に向かう原因になった場所だ。

しかし現在、この門は硬く閉ざされ、交流は封じられている。

「パチュリーに頼むしかないのかしら……」

かの日陰の魔女は、魔界出身の悪魔を使い魔として従えている。紅魔館地下の大図書館には異界との接続を可能にする禁書も多く所蔵されており、魔界を訪れるための手段を保有しているのは間違いないだろう。

だが、彼女にも紅魔館の顧問魔術師としての立場がある。魔界への門を開けば、その責任は彼女だけではなく雇用主であるレミリアにも及ぶこととなるだろう。あの傲慢な吸血鬼が責任追及の糾弾などに動じるとも思えないが、徒に騒動を引き起こすのは、アリスの望むところではない。

「お前はそんなこと気にしなくてもいいぜ。期日までには必ず向こうへの切符は用意してやる」
自信たつぷりに言い切る魔理沙に、アリスはなおも言い募りそうになった内心の不安を飲み込む。相棒を信頼するのは、射手のつとめだ。

「信じてるわよ」

「おう、泥船に乗ったつもりでいろ」

冗談なのか何なのか良く解らないことを言つて、魔理沙はまたすぐにどこかへ行つてしまう。アリスは吐息と共に、作業を再開した。



神社の境内はいつになく清浄な気配に満ちていた。いつもと変わらないように見える小さな社殿には、どこか威圧感をも感じてしまう。

「ビビってんのかね、我ながら」

これからの目的のために神経質になつているのかもしれない。鈍る心に活を入れて、魔理沙はいつものように箒を操り、裏庭へと降りた。

「お、来たね」

縁側には出漕らしを啜る巫女の代わりに、訳知り顔の萃香が寝そべり、瓢箪からぐびぐびと酒を呷っていた。ふは、と酒臭い息を吐く酔いどれ子鬼は、赤らめた顔のままごろんと大の字になり、魔理沙にひらひらと手を振つて見せる。

「霊夢、いるか？」

「向こうで掃除してるよ」

「そうか。ちよいと邪魔するぜ」

「んー……。ま、頑張りな。応援はしないけど邪魔もしないからさ」

きししと歯を見せて笑う萃香の声を背中に受け、魔理沙は境内へと足を向ける。

「――霊夢」

いつものように。境内の真ん中で、ぼんやりと箒を動かしながら。楽園の巫女――博麗霊夢はそこにいた。足音は立てないように気を使っていたが、霊夢は既に魔理沙の気配を察していたらしい。

やっぱり来たのねと溜息を一つ、箒を近くの木に立てかける。

「だいたい話は聞いてるわ」

「話が早くていいな」

「お節介な奴らが多くてね。……で、あんたなら当然、答えも分かってるわよね」

「おっと、送迎は要らないぜ？」

おどけて見せる魔理沙の前に、霊夢は袖の中から手の中にすんと大幣を落とした。自身の身長ほどもある長さのそれを肩に担ぎ、幻想郷の巫女はゆつくりと魔理沙に振りむく。

「黙って封印を解こうとか、忍び込もうとか、そんな不埒な事考えなかった事だけは評価してあげる」

「何言ってるんだ。私はいつでも誠心誠意、誠実だぜ？」

私自身の心にな、と付けたし、魔理沙も帽子の中からミニ八卦炉を取り出した。既にポケッ

トには丹藥を詰め込み、いつでも撃ちだせる臨戦体制である。

「天狗並みに信用失くす前に、考え直した方がいいわね」

しやらり。靈夢が何気なく大幣を振るうと、境内に満ちる気配が一変する。風すらそよがせる事もなく、魔理沙の充填していた魔素の四割が、調整され、霧散してゆく。

幻想郷の妖怪達が常日頃たむろするこの神社が、どの属性にも傾かないのは、結界の要となるこの社殿が、あらゆる魔を調律し、調整する強力な自浄作用を備えているからだ。あらゆるものを平均化し、中立に均す力——それこそが、博麗の力である。

魔理沙も魔法使いの端くれだ。神域たる神社において、力を削がれずに済む例外ではない。

そしてこれは異例の事だった。普段の弾幕ごっこで、靈夢は、誰かの力を削ぐなんてことをしない。そんな事をしなくても、大抵の妖怪には苦もなく勝つことができるからだ。だから、敢えてそれをするということは、この対峙が特別な意味を持っている事を物語っている。

「なあ、」

「駄目よ」

魔理沙の言葉を遮って、靈夢はきつぱりと首を振る。

いつもふわふわと、適当で自堕落な物言いをしているが。靈夢は決してその立ち位置を変えることが無い。博麗の巫女——楽園の守護者として。境界の守り手として。

「攻略開始前にEXステージとは。斬新だな」

「やっぱり、言っても聞かないか」

「当たり前だぜ。何年腐れ縁やってると思ってるんだ？」

「まったくね。時間の無駄だったわ」

魔理沙が二死人符の提示をする中――霊夢はそれに答えず、無言で封魔針を構える。符の宣言をしない――。

つまり、どうあつても、これは譲らないということ。もとより、魔理沙が要求しているのは命名決闘に乗せるような、可か不可かを選べるような相談ではないのだ。

霊夢が博麗の巫女である限り。

決して彼女は、これを譲らないのだろう。

――結論から言つて。

この勝負は、およそ丸一日後に終結をみた。



どん、とドアを叩く重い音に、ミシンに向かっていたアリスはふと顔を上げた。

「……魔理沙？」

魔法を使えなくなった今、アリス邸は魔法使いの工房とは名ばかりの無防備に近い。近くにあった暖炉の火かき棒を掴み、『上海』『蓬萊』と共に玄関に向かったアリスは、そこでぼろになった魔理沙の姿に驚愕する。

「……よお」

「ちよつと！ 何その格好!? どうしたの!？」

満身創痍——それ以外の表現が思いつかない。地底から帰ってきた時よりもなお酷いほどの有様。顔色も青く、息も荒い。手足には生々しい傷も残っており、血も流れていた。間違っても、弾幕で負うような怪我ではない。

ふらついたまま倒れ込んできた魔理沙を抱きとめたアリスは、彼女の体温がぞつとするほど冷たくなっているのに気付いた。

「魔理沙!？」

魔法の過剰使用による現象だ。魔法を使うのには不向きな人間の身体で魔法を使い続けた結果生じるもので、本来、ブレーキとなる側の身体のほうが、生命活動そっちのけで魔法を使ううとしてしまったために起こる。

症状が重ければ生きながらに魔法と化すか、死ぬか。その二択だ。およそ九割九分ほどの確率で後者になる。

「一体何が——ああもう、魔理沙！ しっかりしなさい！」

「話、付けて来たぜ。これで魔界までノーチェックだ」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！」

まるで、魔理沙の言葉が遺言めいて聞こえ、アリスは声を張り上げた。馬鹿馬鹿しい思いながらも、それをはつきりと否定できない。冷たくなった魔理沙の手を握り締め、『上海』を通じてすぐに風呂とベッドの用意をさせる。一刻も早く休息が必要だった。しかし、それよりも症状が酷ければまずその解呪を行わなければならない。

今の自分にそこまで高度な作業ができるか——しかし永遠亭や大図書館まで走っている時間はない。焦躁にかられるアリスだが——

「あとな、これ」

魔理沙は「そこそとスカートのポケットを漁ると、小さな布袋を二つ、取り出した。その片方を覚束ない指先でアリスの手に握らせる。

「……魔理沙、これって……！」

何度も見えた覚えの在る、簡素な装飾。

博麗神社謹製の、弾幕必勝祈願、交通安全のお守りだった。

「——霊夢から伝言。お前はもう少し、自分が周りから心配されてるのに気付いた方がいいんじゃないか、だとき」

呆気にとられるアリスに、魔理沙は眠そうに呟いて、

「あー……、悪い、もう限界だ。寝る」

言うが早い。倒れ込んだ魔理沙はそのまま、すうすうと寝息を立て始める。

息に乱れが無いこと、手足が壊死している様子も、魔素汚染に晒されている様子もないことを確認して、アリスはようやく、少しだけ安堵した。

使い慣れない義手を使って人形を操作し、魔理沙の体を拭き、服を着替えさせてベッドに寝かせる。

「……………」

「んー……アリス。大丈夫だ。……心配ないぜ……」

ベッドの上でもなおそんな寝言を続ける彼女に、アリスは苦笑して。

「――本当、馬鹿ね」

じつとスカートの端を掴む魔理沙の手を握り、額を寄せた。

「わかってるわよ、そんなこと」

更けて行く夜の中、小さなお守りは二人の魔法使いの傍で、いつまでも揺れていた。

【九】 エンサイクロペディア・パンデモニカ

「猫のないニヤニヤ笑いなんて、滑稽だわ！」

Spell Card Bonus 「大急ぎの逃避行」



乾き干からびた大地に、瘴気を吹く風が吹き荒れ、ひとたび雨が降れば洪水となり、気温は昼夜ごとに氷点下と灼熱を繰り返す。過酷で広大、無慈悲に荒ぶる大自然。およそ生命の誕生には似つかわしくない場所。

けれど魔素だけは呆れるくらい溢れている。それが魔界という世界だった。
「……いつ来ても妙な所だな」

吹き付ける強い瘴気の風に口元を覆いながら、魔理沙がぼやく。

通り過ぎてゆく紅い羽根の蝶が、その小さな羽ばたきで風を呼び、影の無い猫が塀の上でにやにや笑いを浮かべて消えてゆく。はるか遠い地平線には、重い巨体を引きずって地上を這いずる巨大な毛むくじやらの陸生鯨の姿。奇妙な魔界の生物たちは異邦の少女達などには興味ないようで、広大な魔界の一部としてその生を全うしていた。

「確か、小悪魔もこの出身なんだろう？」

「どこかの辺境の領主に仕えてたって噂なら聞いたことあるわ。神格もそこで与えられたらしいとか。大分ブラックな労働条件だったみたいで、いまの図書館の雇用条件がよかったから転職したらしいのよね」

「……結構世知辛い話なんだな」

二人がいるのは魔界の南に位置する、紅と緋色に透き通る内海の畔だった。赤渡海と呼ばれるこの海からは、西には白黒の流砂が縞模様を描く大灰沙、北には標高三万メートルを遥かに超える吞蓮山脈が、天を衝くばかりに聳えている。目的地である魔界の中央部には、山脈を迂回するか、塊怨樹の蠢く樹海の中を抜ける必要があった。

観光産業や魔法の開発を中心に優れた文化をもつ魔界だが、それも魔界の統治者の住む中枢水晶宮を離れば、広大な大地のほとんどのには未開の地が広がるばかりだ。

「この分だと、着くのは明日の夜になりそうだな」

魔界の地平が、ゆっくりと緩やかな弧を描き——その端に白い太陽を沈めようとしていた。星の無い魔界の夜は酷く虚ろで、ぽかりと天に昇る真円の月は、まるで夜の帳にできた虫食い穴のように、煌々と大沙海の海原を照らす。

「どこかで一泊かね。……ふかふかのベッドとあったかい味噌汁でも欲しいとこだぜ」

「贅沢は言えないけれどね」

箒の後ろに腰かけて、アリスが答える。人形遣いの魔法はまだ完全に回復しておらず、一人で空を飛ぶには制御が不十分なため、空を飛ぶには魔理沙の箒にタンデムするしかない。

ちらりと眼下を見下ろせば、山脈の裾には小さな集落があり、そこに住む有角の住人達が粗末な貫頭衣を纏い、六本脚の黒獣を使って田畑を耕していた。彼等は獣の皮をなめして作った

風車をカラカラと回し、紅い蝶の運ぶ死の砂嵐を避けながら、ひっそりと農耕をして暮らしている。

魔界がこれほどまでに歪な姿をしているのは、この広大無辺な世界がその実、天地開闢の以来より、たったひとりの神によつて創られたことに由来していた。

その神の名を、神綺という。

造物主である神は、しかし魔界を理想郷とはしなかった。

一人の神によつて創り、統括される世界には、限界があると知っていたからだ。それを可能とする御業をもつのは、全知全能なる存在のみ。個を持ち自我を持つ神が持ちうる権能では、とてもそこまで及ばない。

全知全能なる神は考える事もせず、意図もなく、ただ神という機能だけを持つて在る。

神綺は己がそうでない事を知っていた。世界とは無数の生命、無数の存在が集まり渾然となつて巡るものであることを知っていた。故に彼女は統治すれども君臨せず、干渉を嫌う。世界を存在させるために神としての権能を振るう事をしない。

ゆえに、整合性の乱れた魔界の物理法則や生態系は、顕界のそれに比べるとひどく歪なものである。

もともと生命が生きてゆくには過酷であり、苛烈な環境だ。ゆえにそこに生きる草木も動物たちも、みなまっとうな進化をすることはなかった。

いるといないの境目を彷徨う シユレディングガー・キャット 匣 猫、羽ばたきで嵐を呼ぶ エフエクト・バタフライ 赤 蝶、生涯

同じ動作を繰り返す白 バブル・プロフの犬 犬、沼地に潜み、近付いたものと同じ姿を取る沼模人 スワン・アマン。誕生と同時に際限なく拡散し、極限まで己を希薄にさせて散逸してゆく悪魔 ラブラスの魔。濃密な魔素に晒されて生きる彼等は、もはやどれも因果のあいまいな概念に近い。

魔法、魔力の根源でもある魔素は、魔界においては空気よりもありふれたものだ。物質の根源となる五行よりも遥かに濃い魔素濃度に恵まれ、蝕まれ、魔界の生物は直接この魔素を取り込んで生き、さまざまな法則を無視して概念をつくる。

「――要するに、この子たちは全貞、生きた魔法なのよ」

あるいは、これもまた神の力の一端と呼ぶこともできるだろう。声も音もなく飛んでゆく、白でも黒でもない ベニベル・レイン 縞 鴉を見上げ、アリスは言う。

樹海の辺縁――朽ちた大木の隙間に、炎を灯し。人形達に周囲を警戒させながら、魔理沙とアリスは毛布にくるまって、魔界の闇の中に身体を横たえていた。

ぱち、と焚火の火が爆ぜ――散った火花が、くるくると尾を引く小さな狐の姿を取り、森の奥へと消えてゆく。

魔界では、生命と現象の境界が酷く曖昧なのだと、アリスは続けた。

人間も、ここに長期間滞在することで魔法使いへと『成る』事ができる。人間にとつて濃すぎる魔素は毒であり、対策なしに触れ続けると身体機能を損ない、最悪の場合死に至る。その

前に魔素を身体に取り込み、血管や神経の代わりに全身を巡らせる経路として、人間の身体機能を強制的に別物へと変質させてしまうのだ。

逆に言えば、そうした生命でなければ魔界で生きていくことは難しいという意味でもある。「……これからについてだけど、あの子が水晶宮の外に居る可能性は除外していいと思うわ。不可侵条約を破つてることが表沙汰になる危険性はあるけど、魔界の統治者の娘って立場が一番生かせるのがあそこだから」

魔界との交戦の戦後処理によって、魔界と幻想郷——顕界とは不可侵条約が結ばれていた。しかしその条約が民間企業による交流を禁じる事はなかったため、なし崩し的に魔界からの観光ツアーが生まれ、出入りは黙認状態にあった。

大結界が強化され、『門』が嚴重に閉ざされたのには、そんな経緯がある。

それでも、事件にかかわった本人が結界を抜けてくる事は重大な協定違反になるはずだった。「だからあの子も、幻想郷には最低限の干渉に留めていたんでしょね。グリモワールの力でなければ、門を超えての実験なんて偽装できないもの」

枝に刺したシナモンミルク漬けのパンを、焚火で炙って齧り、アリスは続ける。

「干渉を禁じられてるのは私達も同じ。魔界へ入って来た時点で不法侵入確定。ましてあなたは一度こっちで大騒ぎを起こしてるわけだし、私に至っては姫君の名前を語る不敬者よ？　これだけで即刻処刑するだけの口実にはなるんじゃないかしら」

「やれやれ。前科者は肩身が狭いぜ。……実際のところ、真正面から突っ込むのは避けたいところだけだな」

「経験のある子は言うことが違うわね」

「年季の違いだぜ」

忍びこむのにかけては一流だと、魔法使いとしてはまったく自慢にならないことを自慢する魔理沙に、アリスは苦笑を浮かべる。

そもそも、彼私の立場が明らかに違うのだ。現段階で既に、アリス達は魔界の住人に対して申し開きできる立場にない。この状況でいざ堂々と勝負と言って、応じるのはよほどの間抜けなお人好しだけだ。

「まず間違いなく、向こうは弾幕で遊んだりせずに、実力で排除してくるでしょうね」

魔界まではスペルカード・ルールは主流ではない。知識としては伝わっているようだが、彼等の戦い方は、命名決闘法で最も重要とされる、美しさを重視しない実用的なものだった。

魔理沙が魔界を訪れたのも、命名決闘法が出来る以前のことである。相手に魅せるためのスペルカードが用いられることはなく、ただただ、本気の排除があるだけだ。

しかし、悪い材料ばかりではない。

事前にあちこちの集落や、地方の統治機構の水晶塔などに偵察人形シーカードールズを放って集めた情報では、現在魔界に――水晶宮には目立った動きはなかった。

「幻想郷との交流が解放されたって話は、噂程度にも広まっていなかった。たぶんまだ、私達の事は表沙汰にはなっていない。侵入できる余地はあるのよ。警備はそこまで厳重じゃないから、なんとか誤魔化しはできるだろうけど——水晶宮には私の姉さん達がいる。気付かれたらまず戦闘は避けられないわ」

特にまずいのがユキ、マイの二人と、神綺の側近を務める夢子だと、アリスは指を折る。

彼女達はみな、魔界の創造主の手による魔界人だ。人間よりも優れた身体能力を持ち、魔素が潤沢な魔界においては生態系の頂点に存在している。

「ルイズ姉は——たぶん居ないわ。暇さえあれば旅行してるような人だし。ユキ姉とマイ姉も、ぶっちゃけ無視していいと思うわ。見つかりさえしなければ。面倒なのは夢子ね……」
運頼みだな、と魔理沙は苦笑した。

ぱち、ぱち、と焚火が爆ぜる。干し肉をパンに挟んで齧っていた魔理沙は、残る半分ほどをコーヒールと一緒に飲みこんで、残りを包みに戻してしまい込む。

「——神綺には、何も言わないのか？」

恐らくその問いが苦いものであることを承知の上で、魔理沙は聞いた。アリスはしばしの逡巡の後に、首を振る。

「無理ね。たぶんママ——神綺には、私が誰かなんて、分からないはずよ」
「でもな」

神綺はそんな事をしないだろうという言葉をも、魔理沙は飲み込んだ。

これはアリスと彼女の問題だ。部外者がいくら口を挟んでも、解決できないことはあるのだろう。そうかただけ呟いて、魔理沙は立ち上がる。

「そろそろ寝ようぜ。明日も早い」

「ええ」

アリスは頷き、魔理沙と背中合わせになって、ケープの下に横になる。

一応雨避けの魔法はかけてあるが、天気の問題は崩れる心配はないだろう。魔界では雨乞い師とい

う老人を傷付けなければ、急な豪雨は決して起きないという。

焚火を消して——周囲には一気に闇が押し寄せてきた。

空には渦巻く紫の雲と、揺れる風。魔界の空には月もなく、星もない。時折、大きな流れ星だけが、遠く地平線に音を立てて落ちてゆく。

異邦の大地でたった二人——

それを意識すると、妙に意識が冴えてくる。魔法使いの身体は睡眠を必要としないが、それでも意識を切り替え、気分を入れ替えるためには休息は重要だった。魔法の中には睡眠や日付の変更を契機に効果を更新するものもあり、まったくの無意味であるとは言えない。

だが、できれば眠りたいと思う中で、やはり緊張はアリスの意識を覚醒させてゆく。水晶宮に行けば全てが終わると、そう思っていた。

けれど——たとえばの『アリス』に勝てたとして、その後、自分はどうなるのだろうか。

いくつも対策を巡らせ、短い期間で出来る限りの準備をしてきた。

でも、この魔界の主が、造物主が。アリスを不要というのなら、その証はどこに立てれば良いのだろうか。

今の自分は、もともとどこにも存在していなかった人形だ。それが今更、主に反逆することになんの意味があるのだろうか？

「自分の居場所、自分で掴むもんだぜ」

少し前に不安を打ち明けた時、魔理沙はそう言った。それが魔法使いの矜持って奴だ、と、気障な事を気恥ずかしそうに言う彼女に、まぶしいものを感じたのは確かだ。

そんな生き方は、自分にもできるのだろうか。

——と。

「……？」

想いを巡らせていたアリスは、毛布の下を動く小さな気配に眉を潜める。なにか野生の動物でも入り込んだかと緊張を高めるが——人形達が反応していないことに気付いて、それはないとすぐに警戒を解いた。

こちらをまさぐっていたのは、小さな手。

——隣で寝ているはずの小さな魔法使いのものだと知れる。見れば、ふいと背中を向けた魔理沙の首筋が、ほんのりと赤い。

彼女も、不安なのだ。考えてみればいくら怖いもの知らずとはいえ、十をいくつか過ぎたくらい少女には過酷すぎる旅路である。ついついそのことを忘れそうになるが——霧雨魔理沙は、ごくごく普通の、ただの人間の少女の魔法使いなのだ。

アリスは小さく吐息し、毛布の下で、そっと延びてきた少女の手を握った。機械仕掛けの義手ではない、残った自分の右手で。

「……………」

最初、強張っていた魔理沙の手はすぐに緊張を緩め——やがて、隣の魔法使いは静かな寝息を立て始める。

アリスもゆっくりと目を閉じた。

今度は、よく眠れそうな気がした。



広大な魔界の中核をなす宮殿は、それに見合うほどに膨大な敷地面積を誇る。

水晶宮——或いは万魔殿などと呼ばれることもあるという。中央にその名の由来となる紫と青に輝く巨大な魔水晶の塔を持つ宮殿には、紅魔館の本館が尖塔ごとそのまますっぽりと入ってしまふ程の大同廊がいくつも存在していた。

アリスの言によれば、これは魔界の兵士——魔界外郭を魔物たちから守るアイデアの巨人を送り出すための回廊なのだという。

アリスは人形達にも念入りに待機の命令を出すと、魔道書を開いて、事前に準備していた薄霧の魔法を発動させた。アストラルへの視認困難を発生させたうえで、さらに河童謹製の光学迷彩を組み合わせ、完全隠密の構えだ。

魔理沙もポーチの中から匂いと音を消す丹葉を取り出して口を含む。

魔法におけるスニーキングミッションは、つまるところ事前準備に全てが直結する。どれだけ高い達成値で完全透明化の魔法をかけても、物音や匂いで相手を感じずる相手には通じないし、不可視解除の魔法があれば一発だ。

「最近どうなのかまでは分からないのが難点だけど……でも、魔界の時間の流れは顕界よりずっと緩やかよ。あの子の姿も以前のままだったでしょ？ そんなに変ってはいない筈ね」

「……全員、魔法使いみたいなもんだしな」

アリスが幻想郷に来て以降はわからないが、それ以前の記憶はアリスが『アリス』の代理として不自然でないように与えられたものである。生誕の経緯はともかく、少なくとも姉妹の行

動についてはそれなりに信用に足るものだと判断していた。

送り込んだシーカードールが、魔力糸の有線接続を通じて安全を伝えてくる。廊下の向こうに警備の巡回が途切れたことを確認し、アリスは魔理沙を振り返った。

「大丈夫よ、行きましょう」

展開していた魔力糸に高圧の電流を流す。炭素のモノフィラメントは過電流で焼却され、一瞬で燃え尽きた。展開されていた人形も魔力供給を経たれ、事前に組み込まれた自己消滅プログラム通りに自壊コマンドを実行。瞬時にして燃え上がった人形は、一秒と経たずに灰になって崩れ落ちる。

紙兵衛——
ペーパー・ゴレム

紙雛をヒントに作り出した使い捨て前提の紙製人形である。使い捨て前提として使用される人形の概念を推し進め、持ち運びの簡易さと軽量性を追求したインスタント魔法だった。仕込んでおける魔力がわずかなため活動時間は短い、同時に多数の人形を、総延長数キロ範囲で遠隔操作でき、不要になれば即座に痕跡も残さず消去可能であることから偵察の精度は飛躍的に向上していた。

「単独行動を考えてみたのよ。まだ入力にタイムラグがあるから、戦闘には向かないけど」

「……お前、色々ふつきれすぎじゃないか？」

「そう？」

これらはアリスがこれまで、試作はしていたものの用いることのなかった多くの魔法——そ

の中の大量のストックだ。

いつも封印したグリモワールを抱えていた腕。あの手があれば、もっと多彩に、もっとうまく人形を扱えるだろう。

今思えば、アリスはそのことにすら目を向けていなかったのかもしれない。人形遣いとしての矜持なんて言いながら、彼女たちの機能を十全に引き出すことすら出来ていなかったのではないか。そんな苦笑と共に、アリスは魔理沙に先を促す。

侵入開始から2時間。水晶宮への潜入は拍子抜けするほどに上手くいった。

「後は、だれにも見つからずに宮殿まで入り込んで、運良く警備も突破して、無事勝てば良いだけだな。楽勝だぜ」

「調子いいわね」

「言うだけならタダだぜ」

深刻になってもはじまんからな、とつぶやいた魔理沙に続き、アリスは箒に捕まって大回廊を横切ってゆく。

「また分かれ道ね……」

廊下の突き当たりには、ドアが四つ。魔界の中枢を統べる宮殿は、まるで迷宮のように入り組んでいる。透明な水晶の壁で作られた宮殿は外から見る以上に複雑な構造をしており、忍び込んだものを奥へ奥へと誘い込んでいくようだった。

「折角だから私はこの赤のドアを選ぶぜ」

並ぶドアの中からひとつを選び、自信たつぷりに箒の先を向ける魔理沙。怪訝そうな顔のアリスに振り向き、

「安心して良いぜ。今日の星占いじゃ運勢は絶好調、ラッキーカラーは赤らしいからな」
ぎい、と押し開けたドアの向こう。

狙い澄ましたかのごとく、魔理沙の眉間に短剣の切っ先が突き付けられていた。

「危ないっ！」

ほとんど反射だけの動作だった。撓んだ魔力糸が魔理沙の脚を絡め、膝から下を引きずり降ろすように巻き上がる。短剣は尻餅を衝いて倒れ込んだ白黒魔法使いの頭をかすめ、金髪をひと房千切つて、三角帽子を真ん中で貫き、ドアに縫いとめた。

残像すら残さずに繰り出された人形達が、床に倒れ込んだ魔理沙を庇い、見事な業前で剣を振るう。次々と飛来した短剣達は火花を散らして弾き落され、水晶の床を甲高い音で跳ね転がった。

かつ、かつ、かつ。

ヒールの音を響かせて歩み出るのは、鮮やかな赤色の使用人服を身に纏った金髪の少女。ホワイトプリムにエプロンは、従順な侍従の装いだ。腰や手足に巻かれた革製のナイフベルトは、決して彼女の仕事家事だけではない事を知らせている。

「……最悪」

アリスが呻いた。

「報告を聞いた限りでは信じられなかったけど——まさか本当にお前だったか」
魔界最強のメイド——夢子が、二人を睥睨するように立ち塞がっていた。



「やはりいつぞやの魔法使いか。またぞろこそそと忍びこんで、何の用だ」

来客用のものではない、素っ気ない口調。恐らくそれが彼女の素なのだろう。夢子は刃渡り30センチばかりの短剣のブレードをしやりんと擦り合わせ、仁王立ちとなった。

こちらは遮蔽に居るにもかかわらず、両手両足を見えない剣に縫い止められたようなプレッシャーが魔理沙の全身を貫いてゆく。それは錯覚でもなんでもなく、少しでも不審な動きを見れば事実その通りに、短剣が魔理沙の手足を縫い止めるのだろう。

「いやあ、久しぶりだな」

隠れている意味はないかと、魔理沙は光学迷彩を羽織るアリスにその場に残るように伝えて、単身でホール中央へ進み出た。わずかに眉を潜め、夢子はじろじろと魔理沙を上から下まで眺めまわした。

「……少し見ないうちに随分と趣味が悪くなったものだな」

「そうか？」

「少なくとも以前は、盗人のように卑しく地面を這うような真似はしていなかったのじゃないか、魔理沙」

「乙女心となんとやらってな。ちよいと趣味が変わったんだぜ」

「似合わないな。前の方が大分マシだった」

「おいおい、嘘でも褒めてくれないと傷付くぜ？」

冗談ではなく結構本気で傷付いていたが、魔理沙は努めて軽い口調で、

「そっちも元氣そうじゃないか」

「お陰様でな。間抜けな鼠が侵入り込むことも滅多にないせいで、退屈しているよ」

一見、丸越しに見えるはずの魔理沙に対しても警戒を解くことなく立ち、油断なく周囲にも気を配り、短剣を構える姿には微塵の隙も見当たらない。

こうして相對して、魔理沙は実感する。

夢子は強い。単純に比較すれば、幻想郷でも強敵の一人にカテゴリ分けされるだろう。彼女は種族魔法使いと同じ、人と同じ姿をした魔法そのものだ。

今回、改めて魔界を訪れるにあたり、少なくとも過小評価はしていなかったつもりだが——
(……とんだ赤っ恥つてことか)

参るね、と帽子のつばを引き下げて視線を隠す。

当時の魔理沙は、幻想郷でも名だたる悪霊と契約を結び、好きなだけ導師精霊に助力を請うことができた。それを差し引いても、目の前のメイドには勝てる気がしない。

以前に魔界に押し入った時にはさして苦も無く退けた記憶があるだけに、甘く見ていたことは否めないだろう。

夢子はしやりん、とベルトから短剣を引き抜いた。手首のスナップで、刃渡り30センチ超の刃をくるくると宙に躍らせる。

「いずれにせよ、侵入者は見過ごしておけんな」

《——ねえ、魔理沙》

ふいに思考に割り込んだ会話に、魔理沙は思わず声をあげそうになった。どうにか動揺を表に出すことだけは押さえ込む。魔力糸の有線接続によるアリスの念話だ。

《なんだよ》

《分かったことが二つあるわ。夢子は私の事を知らない。それに、『あの子』は私たちの侵入に気付いていない》

それはつまり。

『アリス』の実験は、まだ魔界にも知られていないということだ。魔理沙たちが一番恐れていたのは、『アリス』が魔界の兵衛に命じて、警備体制を最高レベルまで引き上げ、水晶宮に

近づこうとする侵入者たち物量で圧倒して近付けまいとすることだった。

少なくとも現状ではそうした指示は出ておらず、今ならアリス達が戦わねばならない相手は、ごく小規模だということになる。

『——どうする？』

『なんとかやり過ごせないかしら。夢子本人が出て来たってことは、警備も動いてない証拠よ。このままあの子の所まで邪魔されずに突入できれば——』

『一気にラスボス戦か。しかしな』

会話を切り、魔理沙は夢子を見やる。

忠実な魔界の神の狗は、まるで猟犬のように隙なく全身に警戒を滾らせていた。不用意に動けばその直後には脳天に短剣が突き刺さるだろう。

『お前の事も話さず、戦わずにあいつをどうにかするのは相当骨が折れるぜ』

ぼやき、しかし魔理沙は澁みなく行動に出る。

箒を足元に投げ捨て、両の手を挙げた。敵意がないことを示す最も分かりやすい方法だ。

『参った。降参だ。ちつとばかり用事があるんだ。黙って入ったのは悪かったが、取り次ぎもなかったぜ？ 門番も居眠りしてたしな』

『もう少しマシな嘘を吐いたらどうだ』

これで隙ができるなどとは思っていなかったが、夢子は警戒を緩めるどころか、さらに視線

も鋭く短剣を構える。じつとりと、魔理沙の背中に汗が滲み出した。

息を詰めるアリスの気配が、念話を通じて魔理沙にも伝わってくる。それをおくびにも出さず、魔理沙は笑顔を絶やさない。

「即刻出て行け。いまなら腕の二、三本で勘弁してやるぞ」

「おつかないねえ。生憎と腕は二本で品切れだぜ。……せつかくの再会なんだ、昔を懐かしむのも悪くないだろ？」

「そんなものはないな」

赤い服のメイドは、有無を言わせぬ口調で首を振った。じわりと周囲の空気が重みを増す。

「幻想郷と魔界の交流は制限されているはずだ」

「そこを何とかしてくれないもんかね。最近じやなにかと緊張緩和も進んでるんだ」

「何と言おうとも」

言葉と同時に現れた、十を超える短剣が、くるくると夢子の周辺を踊り回る。

「お前を二度と神綺様に合わせるわけにはいかない」

《魔理沙！》

アリスの警告を待たず、ほとんど勘で魔理沙は右に飛んでいた。足をえぐるように、無数の短剣が水晶の床を次々と穿つ。ただの鋼鉄の短剣と見える刃は、魔理沙のレーザーでもほとんど傷も付かなかった水晶宮の壁をバターののように易々とえぐった。

「それと、これは個人的な——逆恨みだ」

「いつそ清々しいな！」

魔理沙は呼び寄せた箒に跨り、床を蹴った。穂に風を孕ませ、再加速して宙に舞い上がる。追隨したアリスが光学迷彩を被ったまま、その後ろに飛び乗った。単独で空を飛べば魔素を消費し、魔法の使用時に起こる魔素の励起にともなう発光現象で気付かれてしまう。

《かかった……アリス、いいか、反撃するなよ！》

今ならまだ、アリスの存在は伏せておける。手癖の悪い魔法使いが、魔界の宝物庫を狙って忍び込んだ——そういうことにしておける、ぎりぎりの線だ。

その間にも、夢子は次々と短剣を取り出しては魔理沙へと投げつけてくる。その狙いは凄まじい精度を保ち、冗談ではすまされない気迫と魔力を練り込まれた短剣の刃は、宙空を旋回しながら箒上の魔女を追いつがつて、そこら中の壁を、床を、天井を切り裂いた。

《魔理沙、当たったら被弾^{1ミス}じゃ済まないわよ！》

「分かってるぜ！」

手足への被弾でも十分な意味を持つ弾幕ごっこではなく、夢子のこれは不審者を攻撃する殺意のこもった攻撃だ。その切っ先は容赦なく急所を狙い撃ってくる。

それでいて、スペルカードと呼んで十分なほどに美しさも備えているのだから始末に悪い。「手の早さは咲夜といい勝負だな。時間を止めないだけこっちのが楽か？」

《——気づかないうちにナイフの本数が増えてくるくらいしか差がないわ》

最強の魔界人である夢子の能力の一つが、この器物使用アニメメイトとしての力。触れることなく短剣を操る能力だ。咲夜の弾幕はあくまで、彼女が身一つで投擲するナイフでしかないが（それでも鋼鉄のドアぐらい軽々と貫いてみせるが）、夢子は魔力で直接、無数の短剣を手元に転送し、自在に操作する。その数は千をはるか超えて万に迫る。

ゆえにその軌道は決して単調なものではない。何もない場所で直角に跳ね、ほとんど180度ターンして翻り襲いかかる事もある。重さも鋭さも十分すぎるほどで、同時に千人以上の剣士を相手にしているようなものだ。

扱えるのは同型の短剣という縛りこそあれ、千を超える刃をそれぞれ個別に操作し軌道を計算して狙い撃つものだから、常軌を逸している。

宙を疾走する夢子は、残像すら残して魔理沙の箒に追隨してきた。

《魔理沙、もっと急いで！》

「無茶言うな、これでも全速だぜ」

ぼやいて魔理沙は、さらに箒の操作に集中する。光の尾を引いて加速する箒だが、いかんせん二人乗りでは普段の最高速には及ばない。そんな魔理沙を追いつがるように、次々と夢子の手を離れた短剣が撃ち込まれてくる。

「うおッ!？」

何もない空間をはね回った短剣が、魔理沙の背後から脾腹を狙う。すんでのところで身体をよじった魔理沙は、切っ先を辛うじて箒の柄で受け止めた。

星空に橋を掛けるのに使われるほどその頑丈さで有名な銀製蓬萊竹の柄を貫通した鋭い刃はが、魔理沙の服の胸元をさくりと裂いていた。

魔理沙はなお激しく振動している短剣の柄を掴み、箒から引き抜いて、地面に投げつける。

「どうした、だいぶ腑抜けたな? ——真剣勝負などここ何年もしていないようだが、それで挑んでくるとは実にいい度胸だ」

「……参ったもんだぜ」

冷や汗が背筋を伝う。

命名決闘法を始める前はこんなことを繰り返していたのかと、魔理沙は今更ながらにかつての自分の体たらくに齒噛みした。当時は命の危機すら覚えずに戦っていたものだが、毎日毎日魔女香に酔っ払っていたせいで、恐怖心まで麻痺していたらしい。

《魔理沙、どうにかならないの。一度は戦ってるんでしょ》

「できたらとつくになんとかしてるぜ」

素直に吐露し、魔理沙はマントの下のパーチから、星砂を一瓶取り出して箒の穂に振り掛けた。魔素を孕んだ銀星蓬萊竹が輝きを帯び、一段と加速する。

「逃がさん」

夢子は短く叫び、さらに百本近い短剣を投擲した。上下左右、床に壁に天井を跳ねまわる劍の群れが、まるで押し寄せる軍勢のように迫る。

まさに金城鉄壁。無双の空間制圧力。夢子を魔界最強たらしめる所以が、この圧倒的なまでの攻勢防衛力だ。近づいたものは撃ち落とされ、逃げる者も撃ち落とされる。彼女は一人でこの水晶宮の警備をこなす。

ホールを急角度でターン、脇のテラスを突っ切つて大回廊に飛び出した魔理沙を追うように、夢子がドアを跳ね飛ばして姿を見せた。同時に、彼女の姿を覆い隠さんばかりの無数の短剣が、大回廊を埋め尽くすように出現する。

うねる短剣の群れが、怒濤を切つて押し寄せる。それはさながら、鱗の一枚一枚に刃を持つ大蛇のよう。

《ちよつと、どうする気!?!》

「——いや、狙い通りだぜ」

魔理沙が首を竦めた瞬間、短剣が帽子を深々と切り裂く。衝撃で吹き飛ばされそうになった三角帽を、アリスが人形で捕まえた。人形が帽子の中から丹薬の詰まった瓶を放り投げ、魔理沙はスカートの中から八卦炉を取り出した。

箒の加速はそのままに、魔理沙は背を捻つて、手の中の八卦炉を夢子へと向けた。もう一方の手で乱暴に掴んだ丹薬を口に放り込み、咀嚼して飲み下すと短くスperlを詠唱。

「――^{よも}四方に^{あまね}普く星々の光、天に満ちる億千の輝き。汝、その名は閃光の射手！」

スペルカード宣言の代わりに、呪文詠唱が深層心理に刷り込まれた一連の詠唱手順を実行。長つたらしい呪文を圧縮構文で省略し、魔理沙の身体に魔力が満ちる。事前に摂取していた魔力増幅用の茸のエキスから膨大な量の魔力が溢れ、少女の身体を介して抽出、魔理沙の全身に充填されてゆく。

同時、八卦炉に装填された六連の丹薬に練り込まれる高密度連鎖核反応発生体に魔力の撃鉄がぶち込まれた。

底部の丹薬が着火、爆発的な火力を噴き上げ、狭い炉内を一気に満たした。密閉されたエネルギーは高圧・高密度となり、唯一の出口である炉の解放孔へと殺到。指向性を持たされて収束した爆炎は、さらに連鎖して充填された前方の丹薬に着弾、発火。

六連の高密度魔力核が連鎖的に反応し、わずかに刹那の間で数千倍のエネルギーを励起させる。本来は指向性をもたない高火力が、ヒヒイロカネ製炉面内で反射し、強制的にベクトルを与えられる。膨らんだ輝きは、瞬く間に閃光となり、少女の翳した炉の外へと溢れだす。

「行けっ!!」

魔界の濃密な魔素を食って、閃光は普段の数倍の輝きを奔らせた。数キロはあろうという廊

下を、視界の端まで薙ぎ払う閃光は——かつて水晶宮に挑んだ魔理沙が持っていなかった力。閃光の射手が、地上に落ちた星の輝きのままに、迫る剣の戦列を一瞬で蒸発させた。磨き抜かれた水晶の壁を閃光が反射し、轟音が水晶宮を揺るがした。荘厳な魔界の主の居城すら軋ませ、恋の魔砲が天を貫く。

「っ、どうだ！」

会心のスぺルに大きく肩を上下させる魔理沙。

用意していた魔力の大半をここに注ぎ込んでしまった。迅速に呼吸を整え、吹き上がる閃熱の余波の中、魔法茸のエキスをたて続けに口にして疲労の回復に努める。

種族魔法使いであれば、外部の魔素を取り込むことで魔法の放出の直後でも瞬時に回復できるのだが——こればかりは人間には思うようにいかない。

強固な水晶の壁を、床を、大きく挟り溶解させるほどの火力——破壊の余波が風を産み、大回廊を吹き抜けてゆく。魔砲の生んだ余波の中、箒はそれよりも速く水晶宮を奔る。

「……凄いわ」

ケープの裾を風にまかせながら、素直な称賛をアリスは口にしていた。しばらく見なかったうちに、魔理沙の魔砲の取り回しは一回り精度を上げている。自分の象徴ともいえる高火力スぺルを敢えて封じて、弾幕を繰り返していたことで、魔理沙の魔法は大きく成長していた。

「ただね、魔理沙」

アリスは疲れたように呻く。

薄煙を割いて飛来するのは、まったく衰えなく突き刺さる短剣の群れ。

そして、崩れゆく床を蹴って、訓練された猟犬のように疾駆する、赤い服のメイドの姿。

「夢子は、魔界人の中でもとりわけ頑丈なのよ」

「もう少し早く言ってくれ！」

魔理沙の非難の叫びは、短剣の着弾音にかき消された。迎え撃たんと放たれたマジックミサイルやレーザーの直撃をもとめせず、短剣を握ったメイドは魔理沙達に追いつがる。

「それでお終いか」

夢子は移動に際し、位相をずらしてあらゆる妨害を擦り抜けさせることができる。空気抵抗すら透過させることができる彼女に、追いかけてつこうをしながら攻撃を当てることは不可能に近いのだ。

やはり魔理沙一人には荷が重すぎる。アリスはケープの下の上着、蓬萊に覚醒のコマンドを叩き込んだ。深い眠りから寝坊もせずに跳ね起きた二体が、配下の人形達に強制起床を駆ける。スperlを用意したアリスが光学迷彩を剥ぎうとした、その時。

「――アリス！」

覚悟を決めた表情で、魔理沙が叫ぶ。

「後の事は期待するなよ！」

アリスがその意図を把握するよりも先に、魔理沙は箒を蹴飛ばしていた。余力を残している余裕などないとはかり、魔理沙はとっておきの符の一枚を引き抜く。

——天儀「オーレリーズソーラーシステム」。

かつてこの宮殿を侵略した魔理沙が使っていた魔法の、スペルカードによる再現。スペルの宣言と共に、魔理沙を取り囲むようにして六重の楕円が出現する。

さらに周囲の魔素をこっそりと吸い上げ、巨大な6つの球体がそれに追隨した。

水・金・地・火・木・土。6種の魔素に対応する6つの天体が、魔理沙の周囲を巡り始める。

渾然一体と出現したシステムは、天体の運行を示す渾天儀。魔界の宮殿をところ狭しと飲み込んで、惑星が軌道を旋回し始める。

六連の楕円軌道を描いた球体は、回転の高速化に伴って濃密な魔界の魔素を吸い上げ、みるみる巨大化してゆく。旋回する天体は、飛び来る短剣の群れを押し潰し、薙ぎ払い、重力すら伴う攻防一体の破壊力を誇示しながら、魔界のメイドを押し潰さんと迫った。

「——む」

対する夢子の判断も迅速だった。身体の全面に、三百近い短剣の刃で衝角を組み上げた。短剣で編み上げた籠で己を包み、その身を一つの鍬に変えて、魔理沙の放ったオーレリーズに真っ

向からぶち当たる。

高速での衝突は爆発を生み、轟音が、水晶宮を大きく軋ませた。

ひとつ。ふたつ。魔理沙が渾身の力を込めて撃ち放った天体が、力づくで打ち砕かれてゆく。

「ッ——」

渾天儀は、6つの惑星が揃って初めて真価を発揮するシステムだ。ひとつが砕かれれば、運行のバランスも大きく崩れ、歪み始めてしまう。

切り札のはずなのに、持続時間の間、スペルを維持する事すらできそうにない。魔理沙はきつく歯を食いしばり、懸命に渾天儀を制御した。

三つ、四つ——夢子の猛攻は続く。連続して繰り出される巨大な天体めがけ、両の手で握った短剣を突き立て、二本の刃を噛み合わせるように擦り合わせて、真つ向から打ち砕く。

五つ目の天体を破壊した夢子は、その残骸を足場に奔る。

「本当に化物だな、お前はっ！」

「良い褒め言葉だ」

スペルブレイクの爆風の中、鋭く地面を跳ねて間合いを詰め、夢子は逆手に握った短剣を勢い良く振り抜いた。咄嗟にヒヒロカネの八卦炉でそれを受け止める魔理沙だが——

「甘い」

同時に、彼女の器物使いの能力で繰り出された七本の短剣が、それぞれ死角から白黒の魔法

使いに振り下ろされる。

四本目まではどうにか避けた魔理沙だが、残る三本は狙い過たず、少女の脾腹と、胸と、喉を引き裂いていた。

閃く白刃に、ぱつと鮮血が散る。

悲鳴すら上げることなく、少女の身体が痙攣し——制御を失った箒から滑り落ちた。

箒は七色の光を引いて回廊の奥へと吹き飛び、どさりと床に転がった小さな身体から、周辺にじわじわと紅い血だまりが広がってゆく。

動かない少女の身体めがけ、さらに十五本、容赦なく急所だけを選んで短剣を投げつけて。

「ち」

夢子は小さく舌打ちをした。

床に倒れた少女の身体が、小さな煙を上げて無機質な紙人形へと姿を変える。即効性の幻覚魔法が効果を失ったのだ。

「してやられたか」

刹那。紙人形が燃え上がり、閃光と共に爆発する。

回廊を埋め尽くすほどに噴き上がる爆炎の炎から身を引いて、夢子は苦々しげに回廊の奥を睨んだ。

【一〇】少女は無慈悲な赤の女王

「――時よ止まれ。世界よ、私の方が美しい。」

Spell Card Bonus 「魔法使いの^{アンカー}絆」



瞬く赤光が警戒を叫び、鳴り響く警報が回廊を反響する。

俄かに騒然となる魔界の中枢を、七色の光を引いて箒が飛ぶ。

「あれで何分誤魔化せるかしらね」

「急ぐぞ、アリス！」

ゴレム

押し寄せる警備の兵衛を蹴散らして階段を駆け上り、雨のように射掛けられる魔砲の矢を避けながら窓を突き破って、二人の魔女は奔走していた。

ダミーの人形で一旦は夢子を引き離れたものの、水晶宮に侵入者があることは知れ渡ってしまっている。もはや隠密行動など意味はない。光学迷彩他の偽装をかなぐり捨て、魔理沙達は、立ち塞がる鋼人形や隊伍を組む守護霊を片端から蹴散らし、全速力で水晶宮を駆け抜けてゆく。

「——上海！ 蓬萊！」

《《任セロ！》》

槍を構えた騎士隊を率い、忠実な人形が宙を走る。兵士人形8体を前に出して警備兵を押しとどめ、槍兵をもつて背後の指揮官を牽制。弓兵の狙撃で同時に仕留める。早指しのギャンビット手を進め、で進行方向の警備を突き崩し、突破口をこじ開ける。

蓬萊人形がそれに追隨。レーザーと共に呪詛を込めた楔弾をばら撒いて、黒炎を吐く死^{ヘル}獵犬^{ハウンド}たちを貫いた。非実体化して侵入者に噛みつき喰らい千切る実体をもたぬ獵犬たちが、飢餓の靈質の欠落を補充され、次々と昇天してゆく。

「飛ばすぜアリス！」

背中のアリスが腰に手を回す。魔理沙は箒の尾を大きく膨らませ、警備の穴を貫いて飛翔した。のろのろと追尾しようとする重装備の鋼人形をついでに吹き飛ばして、二人を乗せた箒はついに水晶宮中央の塔へと辿り着く。

魔界の各地からもその威容をもって見るここのでできる塔は、その内部に山一つを飲み込めるほどの巨大な空洞となっていた。

突入と同時に、塔の内側を昇る螺旋階段に展開していた魔界の兵団が、二人を待ちかまえていたように魔法を降り注がせる。

「うひゃあ!!」

「——もう、使えるスperlなんてほとんど残ってないのに！」

飛び来る炎や稲妻に身を竦める魔理沙を庇うように、人形達に盾を構えて上に展開。さらにアリスは右手の魔力糸を大きくはじいた。

人形「レミングスパレード」。転がり出した自爆人形が壁にとりつき、階段を駆け上がって立て続けに爆発を轟かせる。大混乱に陥る兵団の隙を縫って、アリスは人形を投げ上げた。

自律操作のシーカードールズを先行させて進路と視界を確保。進行ルートを割り出したアリスは、魔理沙にそれを転送した。

「凄い数よ！」

「相手してる暇はない、一気に突っ切るぜ！」

箒の柄を蹴飛ばして上向け、その上に飛び乗った魔理沙が、スペルを宣言する。アリスは魔理沙の伸ばした手に魔力糸を絡め、その後ろに飛び乗った。

彗星の光尾を引いて奔る箒が、水晶塔中央、螺旋階段の吹き抜けを突き抜け、一気に最上階まで加速する。

ブレイジングスターの突貫で隔壁を突き破って、廊下に飛び出した二人は、回廊の突き当たりに目指すドアを見つける。ここでも警報が鳴り響き、赤光が踊る。扉の左右に配された守護石像が侵入者を感じて実体化をはじめた。

アリスが叫んだ。

「あそこよ、魔理沙！」

「おう！ お前ら、邪魔するな！」

歪な鉤爪と振れた角を振り立て、魔理沙へと襲いかかる守護石像。そこへ割り込む魔理沙が、出力を上げた3連のレーザーを照射。焦点を絞った閃光が、見事に石像の核を打ち抜いた。

ガーゴイルが崩れ落ちる中、滑り込むようにドアに取りついたアリスは、魔道書を広げて錠

前に施された魔法錠の解錠を試みる。だが――流し込んだ構文は硬い音と共に錠前に弾かれた。魔界の高い魔法技術で塞がれた扉は、高い精度で用意したアンロックの魔法でも、強固な抵抗を抜くことができない。

「アリス、まだか!？」

廊下の向こうから押し寄せてくる魔眼兵の群れを、レーザーで薙ぎ払いながら、魔理沙が焦りもあらわに叫ぶ。

「わかってるわよ!」

叫び返したアリスは、魔道書からさらに強力な解呪の魔法を選び、片っ端から錠穴に流し込んで呪文構文を吹き飛ばそうとする。しかし錠前の対魔法防壁はそれらを呪核から迂回させて飲み込み、逆に魔道書の頁が撓み、記された構文が次々焼き焦がされる。入念に用意してきた魔法がバラバラに碎かれ、使い物にならなくなってしまう。

呪詛返しに魔道書の頁が撓み、記された構文が次々焼き焦がされる。入念に用意してきた魔法がバラバラに碎かれ、使い物にならなくなってしまう。歯噛みしている暇もなかった。アリスは燃え上がったページを破り捨て、魔道書を強引に閉じて強制終了。

「――おうりゃ!」

気合い一発、ありったけの力を込めてドアに前蹴りを叩き込んだ。

「つておい、アリス! ブレインはどこいった!」

「文句は後で聞くわ！」

靴のかかとが狙い過たず錠前部分を打ち抜く。二度、三度と体重を載せた蹴りを叩き込まれて錠前が歪み、ついには砕けた。

「よし、開いた！」

「うお!？」

最低限の罾だけを調べ、アリスは魔理沙の腰に魔力糸を放って巻き付け、そのままドアの奥へと身を躍らせた。素早く扉を閉め、手近なクローゼットを引きずってドアに押し付ける。片手で魔道書を捲り、クローゼットとドアに加重と防護強化の魔法をかけ、即席のバリケードに変える。

直後、扉の向こうから強烈な打撃音。大きく軋むドアに、魔理沙も慌ててアリスの助勢に回る。背中を押さえこんだクローゼットが大きく跳ね、激しく揺れる。

ドアを破らんと叩き付ける衝撃の中、アリスは顎の汗をぬぐう。

「……どうにかなったかしら。防護魔法に頼りすぎると、案外こういう物理には弱いものよね」「いやだからそういう問題なのか？ なあ」

まだ何か言いたげな魔理沙だったが——アリスは敢えて無視した。

「そんな事より……見て」

ドアの中に広がる部屋はこれまでの風景と一変していた。

普段から弾幕勝負で鍛えた魔理沙の眼でも、部屋の向こう端はうつすらと霞み、見通す事も出来ないほどに広大な空間だ。少なく見積もっても十キロ四方ではきかないだろう。

床はカラフルなタイルを敷き詰め、壁紙は空色のパステルの色合い。窓にはレースのカーテンが揺れる。見上げるほど大きな玩具箱からは、ぬいぐるみに人形、積み木にバズルとさまざまな玩具が飛び出し、床には書きかけの画用紙とクレヨンが散らばっている。

ピンクを基調としたファンシーな装飾で統一された室内は、少女らしさを殊更に強調している。ドアの内には相応しくない広大な空間は、その主の存在を強く誇示しているようだった。魔法使いが人里離れた森や塔に自分の工房を構えるのと同じように、この部屋こそがこの場の主の魔法の集積なのだ。

前に進み出たアリスは、すうと息を吸い、叫ぶ。

「……いるんでしょ！ 出てきなさい！」

広大な部屋の中に、その澄んだ声が反響し、余韻を残す中――

宙空に突如、銀色の水面が出現する。羽虫が飛ぶような、耳障りな音を響かせながら、純粹鏡面アリスミラーが揺らめいた。反在子なる架空粒子によって離れた場所を結ぶ『門』だ。すきま妖怪の境界を思わせる空間の裂け目から、部屋の主が姿を現す。

「誰かと思ったら、やっぱりあなたたちだったのね」

大きな本を胸に抱き、現れた魔界の姫――死の少女は、ふわりとした金髪をまとめるリボン

を小さく揺すって、満面の笑顔を浮かべていた。



「あーあ。夢子も使えないなあ。こんなの通しちゃうなんてメイド失格ね。

……あ、魔理沙はいいのよ？ この前はお喋りもできなかったし。私もお話したいことがいっぱいあるんだから！」

「——相変わらず、小さな子にはモテるのね」

「好きで好かれてる訳じゃないぜ」

隣のアリスと囁き交わし、魔理沙は一步前に進み出る。

「久しぶりだな、アリス……って呼べばいいのか？」

「おかしいこと言うのね。私の他にアリスがいるみたいじゃない」

くすくす笑い、『アリス』は魔理沙の隣に視線を向ける。少女は無邪気な笑顔のまま、こくと首を傾げた。

「でもおかしいわね？ 全部焼いてやったのに、なんでまだそいつ、動いてるのかしら？」

言葉と共に——『アリス』の周囲に噴き上がった閃光が、虹色の輝きを撒き散らす。

たちまち弾けるのたうつ蛇のような稲妻が、魔理沙の頬をかすめ、アリスを直撃した。

「アリス!？」

「やだなあ、魔理沙。アリスは私だよ。そいつなんかじゃない」

「——お前ッ!」

激昂しかけた魔理沙を押しつけるように、爆炎の中からアリスの人形達が飛び出した。

「御免なさい魔理沙、どいて」

「うお!？」

戦列を組んだ人形達が、次々に盾を構えて躍り出る。盾に刻まれた防護紋章が結界を展開、四方八方から降り注ぐ誘導弾を反らして滑らせ、反発する力場が火花を散らす。

死の少女は不機嫌そうに表情を歪めた。

「なんで抵抗するの? あなた、わたしの人形でしょう。なんで言う通りに動かないの?」

「……私だってアリスよ。あなたの、思い通りには、ならない」

そうしている間にも、最優先権限を持つ上位固体からの停止命令が休むことなく飛んでくる。

——抗うたびに悲鳴を上げたくなるほどの激痛を堪え、アリスは静かに、『アリス』に対峙する。

自らの造物主の前に、アリスは一步も譲らなかつた。

「……本当に分かってないみたいね。あなたは。わたしが誰で、自分が何なのかも」

「ええ。それを確かめるために、ここまで来たのよ」

「……もういいや。次はもつとうまくやるよ」

吐息と共に、『アリス』は本の頁をめくった。高度に迷彩された指向性の魔力が、アリスを直撃する。最上位アカウントによる命令は、あらゆる自己防衛機能をスルーして、アリスの深層意識へとアクセス自壊コマンドを打ち込む。

額に記された製造番号に、個体破壊の刻印が深々と打ち込まれた。

——ばちん。

呆気ないくらい小さな音と共に——アリスの身体が力を失って地面に転がる。

「これでよしと。役立たずの人形のくせに、本当にわたしになったつもりなんてお笑い草ね」
ぱんぱんと手を叩き、『アリス』は魔理沙に振り向いた。

「でも、魔理沙がまた来てくれたのはうれしいなあ。……そう言えば、今日は霊夢は一緒じゃないの？」

なんだか懐かしいわね。前にここで会ったのってもう何年前になるのかしら。グリモワールでも幻想郷の事は分からないのよね。本当は、せっかくそいつを送り込んでるんだから、私も魔理沙とお喋りしたかったのに」

「……………」

「ねえ、魔理沙ってはどうしてそんな怖い顔してるの？」

「……それはね」

答えたのは魔理沙ではなかった。

《サケンジャーネーゾ！》

怒りの形相も露わに、矢のように飛び出した上海と蓬萊が、人形の軍団を率いて『アリス』に急襲をかける。

騎士人形の槍が、剣が、斧が、グリモワールの張った自動防壁にぶつかって火花を散らした。だがいかに魔界の禁書とはいえ、精度の甘い自動防御では全てを弾くことはできず、遠距離からの弓兵の狙撃までは対処しきれない。

ミスリルの鎧が『アリス』の頬をかすめ、浅い傷を付ける。

つう、と頬を伝う血を見下ろして、『アリス』は信じられないというように目を剥いた。

「どうして!? なんで動いてるの!?!」

糸の切れた人形のように地面に転がっていたアリスが、もどかしい動きで身を起こす。きしきしと五月蠅い機械仕掛けの左腕で自分を支え、震えながらもしっかりと二本の足で立ち、造物主の視線をまっすぐに受け止める。

「まだ、終わってないからよ」

「ふざけるな！ 人形のくせにつ！」

驚愕の疑問は悲鳴に近いものだった。

事実、『アリス』の撃ち込んだ強制終了命令は、遠隔操作でアリスの制御系統を全部切り離し、心魂機関の主魔源をも落とし、全ての動作回路を焼いたことを確認している。魔法どころか息

をすることもできなくなつて、魂と心を演算する思考プログラムも、神意文字の羅列となつて消失した筈だった。

それなのに、なぜ動いている。

「魔理沙！ なんなの、なんなのこいつ！」

「——あん？ そんなの決まつてる。アリスはアリスじゃないか」

「ッ、お前、魔理沙まで誑かしたのねっ！」

『アリス』は激昂と共にありつただけの自己破壊命令を指向性の魔力波に乗せて飛ばすが、もはやそれらは何の意味もなさなかつた。怒りも露わに唸りながら主人を守らんとする上海、蓬莱、他全ての人形達も、誰もそれに従うことはない。

上位固体の命令を超えてアリスを生かしているのは、アリスと共生関係にある二体の自動人形——上海と蓬莱だった。

自己破壊命令が実行された瞬間、彼女達はアリスの死によって魔力供給や借り受けている魔法野を喪うことを防ぐため、あらかじめ用意していた通りの蘇生処置を行ったのだ。

生命の危機に瀕し、自己保存のため活性化した菌糸脊髄はアリスの魔力糸を逆に辿つて命令系統を解析。粘菌による思考回路はアリスの身体へと侵入し、神経系を再構築。同時に必要なだけの魔力経路を全身に構築し、急速に少女の体を復元してゆく。

構文が次々に書き変わり、分解した魔素を吸い上げて。

上海と蓬萊は、新たなアリス・マーガトロイドの身体を作り上げた。

アリス一世一代の賭け——それは、自分の命を人形たちに預ける事だった。

「……ひやひやしたぜ」

「心配しないでって言ったでしょ」

アリスが『アリス』の支配から逃れるためには、一度生命を維持する全て破棄し、一から組み直す必要があった。しかしそれをアリス自身が組み変えたのでは、上級アカウントを保有する『アリス』には決して抗することはできない。経路も回路も、元とはまったく違うものでなければならなかったのだ。

その答えが——人形との共生である。

「あんたたちも！ 人形なら、わたしの命令を聞きなさいッ！」

唸り上げる人形達を一括する『アリス』だが、上海、蓬萊をはじめアリスの人形達は、ひとりたりとてその命令に従おうとはしなかった。

自らの主人と同じ記憶、同じ感情、同じ意志をもって、人形たちの軍団はアリスを取り囲み、造物主たる『アリス』に剣を向ける。

彼女達の胸には、確固たるアリス・マーガトロイドの魂が宿っていた。

「この子たちの親はあなたじゃない。私よ」

有線による接続と、十七の攻勢防壁。人形達によって構文すら一から組み直された防壁だ。

いかな上位アカウントとたる『アリス』の権限でも、片手間に破れるような代物ではない。

「じゃあ、壊しちゃえばいいんでしょッ！」

癩癩のように叫んで、『アリス』は躊躇いなく、傍らの魔道書の封を解いた。リミッターを解除され、幼い身体ではまるで抱えあげるほどの大きさに拡大したグリモワールが、内に秘められていた魔力を解放する。

御伽の魔法、七不思議の秘密。世界にあるという無数の魔法を、たった一人の少女のために再現し演算し実現するグリモワール。《アリスの魔道書》がその神意を顕現させる。

突如展開された呪力圏が部屋をたちまち埋め尽くした。

「なんだこりや……？」

「呪力圏！ 魔法使いの決闘の舞台よ！」

ルールに乗っ取ったスペルカード戦ではない、魔法使い同士の決闘。それはお互いの心と魔法を、存在が消滅するまですり潰し合う、本物の殺し合いだ。

「不思議の国の魔法使い、赤の女王アリスが汝に挑む！」

魔法名を名乗り、『アリス』はありつただけの魔素を放射した。

もはや彼女は不思議の国に迷い込んだ少女ではない。この小世界と化した呪力圏を支配する女王へと昇格したのである。

魔道書は一般的には触媒や呪具の作成法を記したレシピ本であり、魔法の使い方は丁寧な解

説かれていても魔法自体はその所有者が能動的に使用しなければならない。少々特殊な例になると、魔道書自体にも魔力を持たせ、使用者が魔法を身につけていなくても、簡易な方法で行使できるようにするものがある。

そしてさらに希有なものが、魔道書自体に式を組み込んで使い魔にしたり、装丁に人皮や魔物の骨などを用いたりして意思を持たせたものだ。往々にして強い魔法を籠められた魔道書は所有者を選び、性質の悪いものだったりすると自ら所有者を害して、自分に相応しい（ほとんどは魔道書の主観だ）主の手に収まるように画策することもある。

グリモワール・オブ・アリスはまさにその典型だ。己の理想の所有者である永遠の乙女に、無限の魔力と無尽蔵の魔法式を提供し続ける代物だった。

『アリス』の手にあるアリスの魔道書は、頁から星と肉、夢と心の魔素を引き出し、ひとりで呪文式を構築して投げつける。一構文だけでも秘儀の粹を尽くした呪文式は、ぬいぐるみを歴戦のゴーレムへと組み上げ、カーテンを城の城壁へと変える。

「――アリス」

「ええ」

挑まれた魔法の秘儀を前に、二人はしかし顔を見合わせ、しっかりと頷き合う。

やることは、一つだ。

「七色の人形遣い、アリス・マーガトロイドが決闘に応じる。立会人は普通の魔法使い、霧雨

魔理沙。……けど、私が使うのはこのスペルカード、形式は命名決闘法よ」

——「二死八符。怯えることなく符数を宣言するアリスに、『アリス』は絶叫した。

「馬鹿にするなッ！ そんなの、子供のこっこ遊びじゃないッ！」

「ええ、そうよ。私達はそれで戦う。——それで、あなたに勝つてみせる」

「いい加減にしろ、この木偶人形ッ！」

怒りもあらわに『アリス』が声を荒げて叫ぶ。魔道書は頁を翻し、次々に呪文式を構築。

「——その者の首を刎ねよ！」

わずか一節で完成する《入滅》^{デス}の即効魔法。ハートの女王の命令に、首斬りの斧が飛ぶ。

ここは完全なる敵陣、『アリス』の腹の中も同じ工房の中だ。まして『アリス』は禁書の力を解放している。本来は入念な準備が必要なのである一撃必殺の呪殺、死の契約^{デスバクト}すら一語で再現できた。

胸元に強烈な衝撃を受け、アリスは壁まで吹き飛ばされた。

喉元に深く食い込んだ不可視の一撃は、しかしギリギリのところまで魔力糸を断ち切るには至らず、アリスは首を落とされるに届かない。

「……ここまでは想定通りね」

「で、次はどうするんだ」

「決まってるじゃない。勝つのよ。私達の戦い方だね」

「……大したブレインだな」

だが嫌いじゃないぜ、と苦笑して、魔理沙は瓶詰めマジックミサイルの弾薬をばら撒き、魔法の矢を撃ち放つ。乱れ飛ぶ碧の鏃が、風を切り裂く。

が、臨戦状態のグリモワールは即座に反応。対抗呪文が幾重にも展開され。放たれた魔理沙のマジックミサイルをかき消した。

さらにグリモワールは次々と構文をはじき出し、魔理沙が苦心して組み上げた魔法を端から解析してゆく。半秒も掛けずに魔理沙の呪文式を解析し終えた魔道書は、そっくりそのままそれを奪い去った。無尽蔵に湧き出した星の魔素を呪力圏にチャージし。そのまま魔法の鏃へと組みかえて、魔理沙に投げつける。

「魔理沙！ 迂闊な魔法は逆効果よ！」

奔る光の軌跡は数百を超え、標的を決して外さない魔法の矢となって魔理沙に迫る。

アリスの魔道書は、呪力圏内で使われた魔法を自動で片っ端から解析・識別して、頁の中に書き加え自分のものとしてしまう。無尽蔵の魔力と、膨大な処理能力を兼ね備えた万能のスペルブックだ。ゆえに、この禁書は主人を持たぬように、魔界の書庫に厳重に封印されていた。

この魔書が好むのは、穢れなき無垢な少女。物語の主人公たる理想のアリスである。

同じ魔法でも、使い手の魔力が違えばその差は歴然。『アリス』の放つ魔法の矢は完璧な仕上がりだった。決して的外さない百五十七発の魔法の矢は、回避判定すら許さずに魔理沙を直

撃する。辛うじて命中した十二発は全弾呪文抵抗に成功したものの、魔理沙の傷はけして浅くはなかった。

箒の速度を上げて懸命に魔法の矢から逃れようとする魔理沙を守るため、アリスも符を抜く。

——足軽「スーサイドスクワッド」。

ナイト30、ビショップ32
騎士を前に、僧正を後詰に、後方への睨みを利かせ、牽制のピンを刺して『アリス』へ向けて切り込ませる。魔力糸を引いて迂回した人形が背中から切り返し、六体の騎士人形が槍の穂先を束ねて打ち込み、果敢に王手^{チェック}をかけた。虹色のレーザーで標的を捉え、剣が、『アリス』の張り巡らした弾幕を撃ち落とし、呪力圏を削る。

深く敵陣に切り込んだ人形達が光を放ち、爆音を響かせた。

あらゆる魔法を解析して乗っ取る『アリスの魔道書』。だからこそアリスは、それが最も不得手とする、人形による直接打撃をもつて攻める。剣や槍を防ぐには、ただの魔法を止める防護魔法だけではなく、質量を相殺するだけの構文も余計に必要なからだ。

弩による鏃が打ち込まれ、槍袈が重なり、背後から重装甲の騎士人形が突撃を加える。

「——鬱陶しいっ！」

『アリス』が一喝した。魔道書の頁がひとりでに煽られ捲れ、構文が参照されて新たな魔法

を組み上げる。色は紫。意味は停滞。七原色の中で最も広範囲を薙ぎ払う魔法だ。

途方もない魔力が人形達の突撃を押しとどめ、次々にその命を砕いてゆく。

七色の魔法はさらに色を変えた。現れるのは続けて激しさを増す破壊の赤。出力を増した赤の魔法が、波濤のように襲い来る。

上海人形のレーザーでそれを押しとどめ、魔符の爆風が衝撃を相殺する。呪力圏を削り、無数の指手を打ち合う超高度な戦略魔法戦。人形達の演算能力を借りて指し筋を導き、次の一手を凌ぎ合う。定跡の手番を省き、迅速に相手を追い詰める早指^{アクセラレイテッド}し。極限まで無駄な動作を削り、有効打を打ち込んでゆく。

アリスにも一抹の不安はあった。自分の主人たるアリスが、自分の想定をはるかに超えて実力をつけているかもしれないと。

——その最悪の想像は、当たっていた。

剣符「ソルジャーオブクロス」、廻符「輪廻の西藏人形」、操符「マニピュレイト。パペット」、戦符「リトルレギオン」、騎士「ドールオブラウンドテーブル」。

——全て、一瞬でスぺルブレイク。

ばきんと相殺した銀メッキの大剣を放り捨て、人形が魔力炉を暴走させて自爆する。吹き荒

れる爆炎の中、いまだ『アリス』は無傷だった。縫いぐるみに構文を仕込み、即席のゴーレムとして前衛を守らせ、自分は本陣から魔法を打ち込む。

『アリスの魔道書』が何重にも展開する晝装が、深く打ち込むスペルをことごとく叩き落とし、弾き返す。

「……ねえ魔理沙。夢子の時も聞いたけど、あなたどうやってこれに勝ったの?」

「企業秘密だぜ」

嘯いて、魔理沙は防壁から身を乗り出し、星弾薬をばら撒く。炸裂する輝きが部屋を煌々と照らしだし、ゾンビのように近付いて来る縫いぐるみの兵団を吹き飛ばす。しかし『アリス』に『アリスの魔道書』がある限り、敵の兵力は無尽蔵だ。その傍からグリモワールは魔素を呼び込み、魔界の兵を喚起して、新たな軍勢を補充してゆく。

対する魔理沙は、既に疲労の色が濃かった。

魔理沙が魔法使いや強力な妖怪に抗することができるのは、純粋なゲーム、規範に則った命名決闘による勝負だからこそだ。完全な魔法戦、魔力の比べ合いにおいて、ただの人間、普通の魔法使いでしかない霧雨魔理沙に有利はひとつもない。

それでも、魔理沙は良くやっていた。

ここまでほとんど一人で魔界での連戦を戦い抜いてきたのだ。致命的な魔法だけは全力で抵抗、複雑に絡みつくバインド、状態異状付加のステータス異状を喰らって大きく能力を低下さ

せながら、それでも根性でスペルを詠唱し、『アリス』の魔法をわずかながら打ち砕き、呪力圏を削いでいる。

しかし、彼女の限界が近いのも明白だ。魔法決闘の立ち会いは基本、一対一で行われるものだが——立会人としてその場に居る魔法使いとて、決して無事では済まない。魔法を齧った程度の人間の魔法使いには、居合わせることにすら叶わないはずのものだ。

だが、魔理沙は退かなかった。汚れた頬をぬぐい、血の混じった唾を無理矢理飲み込んで、アリスに問う。

「アリス。あの魔道書の弱点ってわかるか？」

「——弱点？」

古代魔法と禁呪を詰め込んだ、魔界でも最大の禁書。そんなものあるわけが——と言いかけて、アリスはふと、あることを思い付いた。

「……本、そう、本であること」

「本？」

大図書館に住む日陰の魔女が、いつか言っていたことだ。

魔道書は、本である故に逃れ得ぬ性質を持つ。

その図書館に無限に近い知識を持ちながら、パチュリーは決して全知ではない。なぜか。本が一度に開ける頁は一か所だけからだ。

「たとえ魔道書が無尽蔵の魔法を扱えるとしても、一度に読み出せる魔法には限りがある。だから、その処理能力を超えて、魔法を注ぎ込めば——」

「分かった。そいつは私がやる」

口元を拭い、魔理沙はじつとアリスの眼を見た。

「だから、後は任せたぜ、アリス」

「……できるの？」

「見損なうな。私を誰だと思ってるんだ？」

普段なら無茶だと止めたかも知れない。けれど——アリスは静かに、白黒魔法使いに頷いた。

「いくぜ！ 今日はいいつで打ち止めだ！」

七色の魔法の合間を縫って、魔理沙は防壁から飛び出した。箒を足場に飛び上がり、袖に残っていた丹薬を全て口を含み、噛み砕いて無理矢理に嚥下する。

魔法の森の中でも特段に瘴気の濃い地域に生息するある種の茸は、近づいた虫や小動物の生命力を吸い上げ、魔素に変換する性質を持つ。魔理沙の飲み込んだ丹薬は、それを抽出、濃縮したものだ。

（ラスボス戦でこのままお荷物じゃ、カッコ付かないだろ！）

貧弱な魔力しか持たない人間の少女が、魔法使いたちの遊戯に挑むために必要な魔^{デモン}薬^{トリップ}。一日に、三度以上の服用は試したことが無い。魔力丹が少女の体内を巡る生命を吸い上げ、魔

力へと練り上げて変換してゆく。

部屋の中に吹き荒れる風と炎から魔素をチャージして、足りない星の魔素は触媒で補填する。さつそく魔薬の過剰摂取でくらりと揺れる意識を繋ぎ止め、魔理沙は箒の上で八卦炉を抜いた。炉の火力を最大まで上げ、燐核丹薬をありったけぶち込んだ。既に稼働限界を超えた八卦炉は、手袋越しにも分かるほどに赤熱しており、皮手袋の焦げる匂いをさせていた。

アリスが人形達をもつて打ち込んだ大剣を、『アリス』のグリモワールが橙の盾で弾き止める、まさにそこへ。

「余所見していると怪我するぜ！」

両手に構えた八卦炉に、魔力の撃鉄を叩き込む。

ヒヒロカネの表面を撓ませるほどの爆発的な魔力の奔流が、魔理沙の手元から迸った。砲撃の反動で宙空に固めていた魔法陣の足場ごと、地面にたたきつけられそうになりながら――魔理沙の恋の魔砲が、一直線に天を裂く。

——恋符「ファイナルマスターズパーク」。

文字通りの最後の一撃。

「おおおおおおおおおお！」

魔理沙を象徴する星の光、閃光の射手のスペルカード。

並ぶもののない高火力と貫通性から彼女の切り札ともされているが、その取り回しは最悪極まる。己自身を砲台として放つ閃光は、自分を中心にした一方向にしか収束しない。その反動を抑えるための幾層もの防御魔方阵——砲台の「足場」となる部分を展開しているため、発動中の機動力は極端に落ちるのだ。天狗にも挑むその駿足で戦術を組み立てる魔理沙にとって、恋符は自分からそのアドバンテージを放棄するようなスペルだった。

この魔法の本来の持ち主は、その精強さに任せて回避などほとんど考えず、移動を初めから切り捨てていた。妖怪ならではの頑強さに任せ、一ヶ所に脚を止めて、その膨大な火力を存分に發揮するために作り出したものだ。

そして彼女は同時に、分身を作って2ヶ所から投影図のように相手を狙い撃つこともできた。そのどちらも魔理沙にはできない。

だが魔理沙は、あの膨大な火力を自在に振り回すほどの練度をそこに練り込んだ。

魔理沙はこの魔砲を、標的を貫く砲撃としてではなく、極太の剣として振り回したのだ。遙か数キロ先までを貫通する極大の閃光が、螺旋のように部屋を引き裂き、押し寄せる七色の魔法を飲み込んでゆく。

「こんな……こんな魔法、くらい、でっ」
強がる『アリス』ですら、動きが鈍い。

呪力圏を削る強大なスペルに、『アリスの魔道書』は危機を察知、主人の命令を待たずに自動で防御魔法を構築した。撃ち込まれるマスターズパークの構文を解析し、それを最適に防御するための霊装、橙の結界を組み上げる。

「———いまだ！」

アリスは懷からワイヤーを手繰り、兵士人形を打ち出した。上海、蓬萊のサポートを得て音速に近い速さで突出した人形は、『アリス』の構築する陣地のすぐ前に陣取り、速座に盾を構えて防御態勢を取る。打ちだした魔力糸を巻き取り、アリスはそこへ身体を滑り込ませた。

これはスペルカード・ルールではない。しかし、アリスも、魔理沙も、『アリス』にはスペルカードで立ち向かうと決めていた。彼女に、今の幻想郷の流儀を見せるために。人形遣いアリス・マーガトロイドとしての生き様を記すために。

命名決闘法は、美しさ。ルールにのつとるもの。単純な力の強さを競うものではない。実用的な戦闘法ではない、女子供のお遊びだと多く揶揄される。

でも、それは違う。

スペルカードの戦いは真剣勝負。心を、生き様を示す戦い。

諦めさえしなければ、気力が尽きない限り、どんな相手にも勝つことができる。

通常ショットだけでも、粘りに粘って避け続ければ、相手を倒せる。そんなルール。博麗神社のお守りを握り締め、アリスは符名を宣言する。

——魔光「デヴィリーライトレイ」。

ありつたけ宙空に配置させた人形達が、魔力炉を暴走させた。

無数の予告線が空間を刻み、檻のように『アリス』を取り囲む。刹那、

足元から噴き上がる青白い閃光が、『アリス』を直撃した。二重に重ねられた純エネルギーの超火力スヘルその相乗効果が、莫大な破壊を喚起する。

防御の限界を超えた『アリスの魔道書』が処理オチし、ガラスが割れ砕けるように呪力圏に広がっていた橙の防御霊装が消失する。

「よし！」

魔理沙は焼けついた八卦炉を握り締め、鉛のように重くなった手足を引きずって、大きく肩を上下させていた。

が——視界を埋め尽くした白い閃光は、瞬く間に爆ぜ割れた。

即座に再起動したグリモワールが、赤の魔法をインターセプト。デヴィリーライトレイの処理を乗っ取ることを放棄して、真つ向力押しに切り替えたのだ。グリモワールは単純な出力の差で、アリスと魔理沙の合体スヘルの威力を押し切り、正面から砕く。

爆音の中、『アリス』は服の裾を煤けさせ、怒りに燃える視線で魔理沙を睨む。

「どうもこいつも、なんで、わたしの邪魔するのよ！」

残酷な幼さのままに、『アリス』が昂ぶらせた感情のままに叫ぶ。

御伽物語の主人公である少女にとってあらゆる感情は、暴虐なる魔法だ。悲哀は雨を呼び、諦めぬ心は奇跡を起こし、喜びは世界を包む。物語をハッピーエンドへと導くのが『アリス』の役割であり『アリスの魔道書』はそんな少女のためにあるのだ。

「わたしは、わたしの魔法を実現しなくちゃいけないのに！　なんでみんな、わたしの邪魔ばかりするの！」

『アリス』の嘆きを止めるため、グリモワールはそこに溜めこんだありったけの魔法を吐き出して、新たな魔法を産み出してゆく。

呪力圏が唸りを上げて拡大し、『アリス』の周囲に、白く輝く六本の柱が立ちあがる。ひとつひとつが人工太陽にも勝るとも劣らない純エネルギーの顕現となる輝きは、周囲を切り裂きながら跳ね上がり、そのままアリスの背中へと吸い込まれて、燦然たる輝きを噴き上げた。

三対六枚、少女の背に広がる輝きは、まごうことなき神意の力。

「……おいおい。冗談きついぜ」

魔理沙はそれを見て、乾いた呻きを漏らす。

「……笑うしかないわね、これは」

それはこの魔界の神の、創世と破壊の翼だ。

水晶宮を中心に巻き起こる嵐が、白亜の塔を大きく揺らす。魔界の神の権能のままに、その力が振るわれんとする。

グリモワールは濃密な魔界の魔素を無理矢理に吸い上げ、少女の身へと充填してゆく。吸い込まれそうな破壊力の余波が、羽ばたきと共に水晶宮を揺るがした。

「見なさい！　これがママの魔法よ！　あんな誰だか分らない様なお婆ちゃんより、わたしの方がよっぽどうまく使えるんだから！」

母と同じ姿を纏った自分を、誇らしげに掲げるように『アリス』が高らかに叫んだ。白い翼が色を変える。

赤、橙、黄、緑、青、藍、紫。七色の魔法が暴走し、うねり吹き荒れながらも『アリス』の身体を取り巻くように荒れ狂った。虹のように溶けあつた彩りは、やがて高密度に圧縮されて、無差別に混じり合つた渾沌と一色へ変じる。

その色は全てを内包する、蟠る黒。神意の輝きを、混沌の漆黒が蝕むように覆い尽くしてゆく。背に帯びる翼は、血管のように鮮やかな紅を浮かばせる。

同時、強く脈動する翼のはばたきが、水晶宮を揺るがした。

——大魔法「魔神復讐」。

「だって、わたしはママの娘なんだから！」

嘆きとも、怒りともつかないアリスの咆哮と共に、魔界にあつて奇跡に等しい大魔法が、世界を切り裂いた。六枚の翼から閃光が放たれ、魔理沙たちを取り囲む。

万能たる神の権能を、全て破壊に費やした魔神の業、その完璧なる再現だった。

魔理沙の恋符など問題にもならない。地底の人工太陽ですらここまでの力を生み出すことができるかどうか。

——当たり前だ。これは魔界の神の力。ひとつの世界を創造し、大地を、風を、雨を、太陽を、月を、星を生み出した、神の権能なのだ。

もはや魔法の及ぶところではない。

翼の僅かな一振りで、張り巡らせていた防壁はすべて吹き飛んだ。抗魔する事も許されない、神の一撃。

同じ魔法としての土俵ですらない。

これは、神罰だ。

——羽ばたいた神の翼が、アリスめがけて打ち下ろされる。

「アリス！」

その刹那。魔理沙の手元から迸った閃光がそれを穿った。余力と呼ぶのもおかしい、残リカスのような魔力を振り絞って放った、正真正銘最後の一撃。焦点を絞った収束閃光^{ナロースポット}。それ

がわずか数フレームだけ、死の翼を押しとどめる。

「いい加減に、しろおッッ!!」

『アリス』は激昂して背の翼を振り回した。翼の表面に銀色の輝きが出現する。揺れる水面の純粹鏡面が、魔理沙のナロースパークを飲み込み、その貫通力を完全に吸収して、火力をそのままに反射する。

「あははッ! 馬鹿の一つ覚えね! そんなので私が負けるわけ、ないじゃないっ!」

もはや箒を動かす余力もない、撃ち返し弾をグレイズできずに、魔理沙はそれに撃墜された。自らの魔法でぼろぼろに焼け焦げて、白黒の少女は地面に転がる。

これで、残り一死一符。

「あとはお前だけだ!」

憎しみを目に滾らせ、『アリス』はアリスを見た。

アリスもそれに答えるように、最後の一枚となったスペルカードを宣言する。

共生関係にある主の身を守るために。上海、蓬葉が魔力糸ネットワークを介して、人形アリスの権限に介入。七つのリミッターを全てカット。

上海、蓬葉、人形達がその内部構造に仕込んでいた質量を展開。本来の姿を取り戻す。駒の女王より、妖精の女王への昇格だ。

何千何百と繰り返した魔法を、アリスの指が、唇が、自然と紡ぐ。

——試験中「レベルティターニア」。

威風堂々の姿へ変じた二体の人形が、全てのリミッターを切つて撃ち出す破壊の閃光。それは魔理沙の恋符にも劣らない出力をもつて、『アリス』を飲み込む。

が——

「そんなの、もう効かないんだから！」

一度喰らつた魔法なら、グリモワールが解析してすぐにその対抗策を用意してくれる。同系統の魔法であれば、恋符の解析がすぐに転用できた。

レベルティターニアの威力はアリスの持つ最大の火力だが——それでなお、単独でグリモワールの防衛を貫くにはまるで足りない。

「これで、全部、おしまいッッ！」

六枚の翼のうち4枚を重ね、吹き荒れる妖精の砲撃を防ぐ。口元に歯を覗かせ、『アリス』はなお独りでいじましい抵抗を続けるアリスにとどめを指すべく、残る背中の翼を振り上げた。

勝利の笑みを浮かべかけたその瞬間——『アリス』は表情を変えていた。

「……………、ッ？」

背筋を怖氣が走る。反射的に振り向いた先、地面に転がる魔理沙の姿に——『アリス』の違

和感は確信へと変わった。

魔理沙は、もう八卦炉を持っていない。

「お前……ッ」

勝利を確信していた少女は、表情を変えた。

振り向いた先、アリスの手の中には――魔理沙の八卦炉があつた。赤熱したヒヒイロカネを躊躇うことなく右手に握り、機械の左腕をそれに添えて。すでに燐核丹葉は再充填、魔力も魔素も十分すぎるくらいチャージされている。

すべてはこのための布石。アリスの魔力を温存して、この一撃にかけるための一手。

さっきのナロースパークは、防御のためのものではない。アリスに魔道具を投げ渡すのを気付かれないようにするためのものだ。

「そうね。これで最後。――詰チエックメイトみよ」

地面に大の字に寝そべった魔理沙が、帽子の下でにやりと白い歯を覗かせる。

「――ぶちかませ、アリス」

七色の人形遣いの、ありつただけの力を込めて。

閃光が――水晶宮を薙ぎ払った。

【一】 伸ばすその手も竦みもするが、

君は決めたと私は聞いて

「自分で考える人形より、

自分で操った方が便利のような気がしてきたわ」

——東方非想天則 ♪ アリス・マーガトロイド 勝利台詞

Spell Card Bonus 「アリスのための物語」



黒皮の装丁が蒸気を噴き上げ、解像度の荒い非常用^{セーフモード}の青画面に白い構文をたどどしく表示する。過剰稼働を繰り返し、処理限界を突破したグリモワールは、機能の全遮断と緊急冷却のプロセスに移行していた。

並の魔道書ならとくに灰化していてもおかしくないが、曲がりなりにも魔界に置いて禁書とされただけの事はある。

グリモワールはアリスと人形達の攻撃を防ぐために、その出力の全てを自律防御機構へと振り分けたのだ。決して効率のいいとは言えない基礎防御霊装での防御魔法に蓄えられた魔素のほとんどを注ぎ込み、強引な力技で三連の砲撃を跳ねのけた。

しかしその代償は大きかった。処理能力の限界を超えた防御魔法の連続使用に、グリモワールを構成する構文が破損。書き込まれた術式が過負荷^{オーバーロード}で焼き切れ、魔道書は致命的なエラーを吐き出しながら、自己保存の安全装置によって強制終了^{シャットダウン}。

『アリス』本人も魔道書との接続を強制的に切断されたダンプショックで、軽い酩酊と放心状態にある。グリモワールの力を借りて増設していた常時発動の魔法も全て消失し、魔素と魔力を保持できなくなって、失われてゆく。

そこに居るのは、不思議の王国を統べる女王ではなく、ただの魔界人の少女だった。

「……………」

まだ荒い息を整えるように、アリスは大きく深呼吸。

レベルティターニアの終了と共に、人形達が元のサイズへと縮小してゆく。

八卦炉を魔理沙の元へと投げ渡し、アリスはゆっくりと『アリス』の元へと歩み寄った。

「……………」

険の強い視線をぶつけてくる『アリス』から眼を反らさぬまま、機械の左腕で足元で動作停止に陥っているグリモワールを拾い上げ、半開きの表紙を閉じた。安全装置が働き、解かれていたベルトが伸び、禁書に絡み付いて嚴重に再封印を施す。

——勝敗は、決したのだ。

「……………」

幼い『アリス』の敵意の混じった視線に、アリスは困惑していた。

言いたい事も、聞きたい事も、山のようにあった。けれど——一体何を口にしていいのか、分らない。

怒るべきか、殴るべきか。理不尽に暴力を振るい、傷付けても良いのかもしれない。それくらい事はされたような気がする。今のアリスであれば、容易く彼女を縊り殺すことができるだろう。機械の左腕を動かせば、少女の喉を潰すくらい事は簡単だったし、人形達に命じれ

ば指先一つ動かすことなく、銀の穂先で少女の胸を串刺しにし、刃を振るわせてその首を跳ね飛ばす事もできる。

己の主人に害をなした仇を打たんと、上海と蓬萊は獣のような唸りを上げる。

敵意を剥き出しにした人形達は、魔力糸を引きちぎってでも『アリス』の首を落とさんと猛っていた。アリスはそれを制するコマンドを厳命し、ゆっくりと少女の前に膝を折る。

「なんでよ！　なんで、死なないのよ！」

アリスが口を開こうとした時。痛癢をぶつけるように、『アリス』はその幼い心をぶち撒けた。

「ママのするみたいにな、ちゃんと上手くやったのに！　どうして言うことを聞かないの！　あなたは、わたしの言うとおりに動いてればいいのに！　失敗したんだから、黙って壊れればいいのに！　なんで、全部、わたしの言うとおりに動かないのよ！」

思うようにいかないことへの憤り、嘆き、怒り。けれどそれは――

「どうして失敗するの!?　どうして、わたしの魔法は、ママみたいに上手くないのよ！」

（――ああ）

すっと、理解が胸の中に落ちた。目の前で泣きじゃくる幼い『アリス』が、ポーン01を解体した時の自分の姿に重なる。

間違はなく――彼女は、自分の創造主だった。

同じように人形を扱い、同じように考え、振る舞い、傲慢に女王を努めようとする。この幼

い少女もまた、懸命に《アリス》に――魔界の神の後継者たる存在になろうとしていた。

「……アリス」

背後から、案ずるような魔理沙の声。

大丈夫、とそれに応じて、アリスは静かに、座り込んだ少女に視線を合わせる。

友人のはずの魔法使いが、この期に及んでなお自分の味方をしてくれないことに憤ったか。『アリス』は、自棄を起こしたように叫んだ。

「――この者の首を刎ねよ！」

しかし。グリモワールの支配権を取り戻し、この部屋の人形達はいまや、全てがアリスの支配下だ。たった一人の『アリス』に残された権限では、人形に命じる事も、その操作権を奪い取る事もできない。

「どうしたの！ 動きなさい！ 誰でもいい！ こいつを壊して！ わたしの人形でしょう！ わたしの言うことを聞きなさいよお！」

泣きじゃくりながら、小さな暴君は何度も何度も命令を下す。しかし、アリスを取り囲む人形達は誰も動こうとしなかった。

「つく……なんで、なんで、よお……！」

いつしか少女の声は枯れ、無力を象徴するような、小さな嗚咽だけがその場に残る。そんな彼女に、掛ける言葉を見つけれないアリスが、小さく唇を嚙んだ、その時。

「ふたりとも、そこまで」

ぱんぱんと柔らかく手が打ち鳴らされる。

聞き覚えのある声にアリスが振り向けば、そこには赤い長衣を纏う銀髪の少女の姿があった。莊嚴な氣配と、有無を言わせぬ威容。訳もなく膝を折ってしまいそうになる強いカリスマと、同時に酷く柔和な、穏やかな氣配を併せ持った——言葉ではとても形容の及ばない、絶対的な存在感。

「ママ!？」

『アリス』が、涙に濡れた顔を上げた。

神綺——

それが、魔界の造物主たる神の名前だった。

「今頃お出ましか、のんびりしすぎだぜ」

《マッタクダゼ!》

ぼやく魔理沙に、蓬萊が追隨する。

隣には先程までの猛犬ぶりもどこへやら、忠実な従者の顔に戻った夢子を従え、しずしずと廊下を進む彼女に、アリスは思わず息を飲む。そして——

「あうっ」

魔界の造物主は長いロープの裾を踏ん付けて、べしやりと顔から床に倒れ込んだ。
色々、台無しだった。

「……………」

「……………」

「……………あ……………」

ずるぺたーん、と漫画でも見ないくらいに見事にすっこけた魔界の神に、しばし、どうしようもなく重い沈黙が、あたりに満ちる。

「痛たた……………」

皆が言葉を失う中、思い切り顔から転んだ魔界神は、ぴこぴことお下げを揺らし、赤くなつた鼻をさすりながら起き上がった。

いつのまにか周りを取り囲む空気がいきなり微妙になったことに気付いて、つうと頬に汗を流す。

「あ、えっと……………」

そんな母の元へ、『アリス』が駆け寄った。台無し感溢れる空気を打破するように（本人にその自覚はないだろうが）神綺のスカートを掴み、

「ママ！ 聞いてよ！ こいつら酷いのよ！ わたしの事をいじめるの！ わたしが作った人

形のくせに、私の言うことを聞かないのよッ！」

涙でぐしやぐしやになった顔を擦りつけ、『アリス』は母に訴える。

「こいつらをやつつけて！ ねえ、早く！ ママ！ 聞いているの、ママってば！」

叫ぶ『アリス』の肩に手を置いて、神綺はそつと膝を折り、視線を合わせるようにしてその顔を覗きこんだ。

「——アリスちゃん」

静かに。

たった一言、それだけで。火のついたように泣いていた『アリス』が息を飲んだ。

じつと、優しいげに目を細めて、神綺は幼い娘の頭を撫でる。

そして——

ぺちん。と間の抜けた音が響いた。

おでこを指で弾かれ、赤くなつた額を押さえこんで、『アリス』の表情がみるみる歪む。ここに至つてようやく、彼女は自分の前にいるのが誰なのかを悟つたようだった。

魔界における造物主。あらゆるものの母。

Goddess of Devil's World
魔界神。

その慈母の微笑み——全知全能に等しい権能の前で、隠し事などできようはずもないのだ。

「ま、ママ……？」

「アリスちゃん。あなたは自分がなにをしたのか、わかつてる？」

「……………」

ゆっくりと、言い聞かせるような一言に、『アリス』の喉が震えだした。ひ、と声にならない泣き声が少女の口から漏れ、頬を涙が溢れ落ちる。

「だ、だつてっ」

途切れ途切れ。嗚咽の中で、『アリス』は最後の抵抗を叫ぶ。

「だ、だつて！ わたしが、ママみたいになれなかったら、駄目なの！ わたしはママの娘なんだから、ママみたいにちゃんと、いっぱい魔法を使えなきゃいけないの！ だから——」

「それで、このお姉さんたちを殺そうとしたの？」

「ち、ちが——」

「アリスちゃん」

その一言が、決定だった。

それまでの傲慢な姿などどこへやら。まるで外見相応の少女のように『アリス』は大声を上げて泣き出した。泣きじやくりながらごめんなさいを繰り返す『アリス』を、神綺はよしよしと抱きとめて、その背中をそつとさすってやる。

背後で控えていた夢子が、小さく溜息を吐いたのが見えた。

「アリスちゃん。あなたはいけないことをしたわ。あなたのしたことは、どんな理由があつてもしてはならないことよ。アリスちゃんが私のようになりたいというなら、尚更にね」

たどたどしく頷く『アリス』の背中をぽんぽんとやさしく撫で、俯く我が子へ、神綺は優しく語りかける。

「……アリスちゃんがはやく大きくなろうとしてくれるのは嬉しいけれど、まだあの本は早かったかもしれないわね」

そうして、神綺は幼い『アリス』を抱き上げながら、アリスと魔理沙の方を振り向いた。

「……………」

思わず後ずさりそうになる魔理沙とアリスを、呆然とさせる――
全てを帳消しにしてしまうような、笑顔だった。

(…………ずるい)

猛つていた心がみるみる融け、人形達まで毒気を抜かれたように大人しくなつてゆく。

やっぱり彼女は、神なのだ。人智の及ばない、遥か次元の上の力を持つ、理想の、憧れの、母なのだ。悔しいけれど、それだけは認めざるを得ない。

神綺は『アリス』の顔を袖で拭つてやりながら、優しく語りかける。

「さ、アリスちゃん。この後、どうすればいいか分かるわね？」

背中を押され、目を赤くした『アリス』は俯きながらもたどたどしく、アリスと魔理沙の前へと歩み出た。なお、しゃくり上げながらも――懸命に涙をこらえて、頭を下げる。

「ごめん……なさい」

「よくできました」

そつと頭を撫でられ、『アリス』はまた涙をこぼし始める。

直接的な叱責よりも、いけないとされていたことを諭される罪悪感の方が、そのことの方が、『アリス』にはよほど応えるらしかった。

「……なあ」

「なに？」

魔理沙は仏頂面で足元の箒を拾い上げる。

「前は気付かなかったけど、やり口が汚くないか、神綺のやつ」

「ああいうところが、素直に好きになれない理由なのよ」

叱られて泣いている幼子を前に、これ以上なにを要求できるのだろうか。

いつの間にか老獪な魔界の神の手のひらに転がされている事に気付きながらも、揃って顔を見合わせ、魔法使い達は苦い溜息をつくことしかできなかった。

いつしか泣き疲れて眠ってしまった『アリス』をそつと抱きあげる神綺に、ふと魔理沙が言う。

「……あいつ、本当は気付いてたんじゃないのか？ お前がこうなるってこと」

「呆れた。だから許せって言うの？ 私もあなたも、殺されかけたのよ？」

「そういうもんだろ、スペルカード・ルールってのは」
そう言って笑う魔理沙に、アリスは頬を膨らませ――そして、小さく吹き出す。
「そういうものかもね」

煤けた顔には、今日一番の笑顔が覗いていた。

【Op.】 互いが御伽噺とて、虹と私は離れて歩く

「この世界は、きっと約束でできている」

Spell Card Bonus 「ちていそ、幻想郷へ」



燦々と注ぐ太陽の下、揺れる梢の影が、まだらに地面を染める。

突然、アリスの家に押し掛けてきた氷精は、興奮した様子で聞いてきた。

「それよりさ！ この辺でいだらぼつちを見なかった？」

「いだらぼつち？」

「ものすごく大きな妖怪だよ！ さっきまでこの辺にいたんだ！」

背伸びをし、両手を大きく広げてぴよんぴよんと飛び跳ねては『こーんなに！』とその大きさを示すチルノ。

（大きな妖怪……ねえ）

アリスはふむ、と顎に指を添え——片目を閉じて悪戯っぽくチルノに笑いかける。

「知ってるわ。多分。貴方も見てみたい？」

「見たい見たい！ 今日はずーっとそれを探してたんだ！」

両手をぐっと握り締め、早く早くと急かす氷精に、アリスは符を見せて命名決闘を提案した。

——「死五符。決して軽い勝負とは言えないその条件にも動じることなく、チルノは自信たっぷりに応じてみせる。

「平気さ、あたいは最強だもん！」

「そう。良かった。まだ実験段階だけど、試してみるには丁度良いわね。——上海、蓬萊」

妖精相手にこんなことを言うなんて、以前は考えもしなかった自分の態度に軽く驚きながらも、アリスは口元に小さく笑みを見せる。

《準備デキテルゼ！》

《支援ハ任セロ！》

「出たなあー！」

アリスを庇うように頼もしく飛び出す人形達に、チルノも負けじと纏う冷気を強めてゆく。布陣を組む人形の軍団達に、先手必勝とばかりさつそく一枚目の符を宣言。ぱきぱきと凍りついた地面が人形達を取り囲み、凍りつかせてゆく。

幻想郷最強の妖精は、彼我の力量差など気にもせず、むしろ勝つ気満々といった様子だ。それが正しい。命名決闘法というのは、そのためにあるものなのだから。

ここは幻想郷。遙かエデンの東の楽園。

今日も少女達は空を飛び、弾幕こつこに興じる。



地下の図書館には、今日も変わらず静寂があった。

いつものようにここを訪れた白黒の魔法使いは、珍しく殊勝にテーブルに本を広げている。

先日、懲りずにまたここに忍び込もうとして見事に失敗、手痛い代償を支払われたばかりなのだ。

それでも諦めた様子は微塵もない。メイドに厳重に釘を刺され、司書の使い魔が監視をしているので、仕方なしに閲覧していると言う方が正確だろうか。

「結局、全部神綺のやつに持ってた感だったな」

自律意志を持つ存在として、必要な要件とされることは、子孫を残し生命を継ぐこととされる。けれど、その他にも自律意志の証となる行いがある。

それが、創造主への反逆だ。

「多くの神話や創世にも見られる親殺しね。自身を生み出した相手を否定することで、子は親を超えて行くのよ」

「……反抗期みたいなもんか」

魔理沙の合いの手に、パチュリーはくすりと笑う。

あの大騒動も、魔界の神にしてみると娘の成長の微笑ましいひとコマであるらしい。あの場を収めてしまった器といい、つくづくスケールが違うな、と魔理沙は思う。

ぺらりと頁をめくり、魔理沙は机に頬杖をついて大げさに溜息をついた。

「変わったよな、アリス」

「そうかしら」

図書館の魔女は、百年をはるかに超えて生きたというその風格そのままに。わずかに口元を緩める。

《ソウダゼ！ ありすハ可愛イ！》

ぴこぴこと跳ねまわり、自分の事のように喜ぶ兵士人形が、魔理沙の頭の上に飛び乗った。顔をしかめ、五月蠅いぜとわめく魔理沙が、どたばたと自分の人形と取っ組み合いを始めるのを見て、パチュリーは小さく咳をひとつ。

「前から、あんな風におてんばで、少し意地っぱりで、素敵な女の子だったわよ」
図書館の魔女は珍しく、そんな風に、笑ったのだった。

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『虹と私は離れて遠く』は、アリスと魔理沙を主人公に人形遣いアリスの魔法についてあれこれと書いた、当サークル十八冊目のSS本にして、初の長編オフセット本になります。

人生初の長編がこんな分厚さになってしまった事にも驚くばかりですが、とにもかくにも趣味全開でありつただけの熱情をぶつけてみたところ、原作そつちのけの独自設定と御都合に溢れた内容となっております。

お気楽な幻想郷の日常ともやや逸脱した感のある、スペルカードに収まりきらない少年漫画的限界バトルの連続となっておりますので、肌合わない方は申し訳ありません。

サークル活動を始めて3年、いつか書きたいと思っていた人形遣いアリスのお話について、どうにか今回、拙いながらも書き切ることができました。

これまでに触れてきた多くの作品。たくさんインスピレーションを与えてくれた素晴らし

い先達の方々に深く感謝します。

特に仮面の男さんの「アリスのための物語」、はねくさんの「大正十五年の上海アリス」はその最たるものです。素晴らしいお話がありがとうございます。

続けて謝辞を。今回、表紙は「狐野デンパチとクレイジー・フォックス」のギツネのデンパチさんにお願いました。二人の魔法使いの距離感と矜持を素晴らしい筆致で描いていただけなこと、感謝感激です。

また、内容、装丁についても白身、R i z a 両氏に多大なご協力をいただきました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

長々と書いてきましたが、そろそろ紙面も尽きてまいりました。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

「虹と私は離れて遠く」

平成24年5月27日 第9回博麗神社例大祭

発行 オハラザカサンバンチ 折葉坂三番地 (<http://oruhazakablog28.fc2.com/>)

著者 あがね 銅 おりは

表紙 キツネのデンパチ、

印刷・製本 緑陽社

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。





折葉坂三番地

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>

表紙：キツネのデンパチ、
(狐野デンパチとクレージー・フォックス)

<http://denpachifox.blog.fc2.com/>